

特別史跡
大湯環状列石

発掘調査報告書(13)

1997-3

秋田県鹿角市教育委員会



序

自然に囲まれた鹿角市は、遺跡の宝庫でもあります。特に、大湯環状列石は、日本を代表する縄文時代の遺跡として、昭和31年に国の特別史跡に指定されております。

この貴重な文化遺産を保護し、学術的、歴史的価値を、正しく後世に伝えていくため、昭和59年より発掘調査を継続してまいりました。

これと共に、平成2年の周辺遺跡の特別史跡への追加指定、同3年の公有化事業に始まった史跡環境整備事業も、平成7年には「特別史跡大湯環状列石環境整備基本計画」の策定に至り、今後は、第Ⅰ期環境整備計画の具体的な内容を盛込んだ「同環境整備基本設計」の策定を目前に控えています。

本年は、平成4年に策定した「同基本構想」を踏まえ、史跡整備の急がれる第Ⅰ期整備計画地内に調査区を設定し、縄文時代の精神文化を知る上で貴重な資料を得ることが出来ました。

本書は、調査成果をまとめたものであります。学術研究、埋蔵文化財保護の資料として、活用いただければ幸いと存じます。

終りに、この調査に際し、ご指導・ご協力を賜りました文化庁並びに秋田県教育委員会、関係各位に心から感謝申し上げると共に、今後の環境整備事業につきましても、一層のご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月

鹿角市教育委員会

教育長 浅利 忠

例　　言

1. 本報告書は、平成8年度に国・県の補助を得て実施した、特別史跡大湯環状列石第13次発掘調査の報告書である。なお、同調査は、史跡の環境整備計画策定のための基礎資料収集を目的に実施されたものである。
2. 本調査の概要については、機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。
3. 本報告書の執筆は調査員が行なったほか、調査員の指導の下に調査補助員も執筆した。文責は各々の文末に記した。
4. 資料の鑑定等は、下記のとおり依頼した。

石器類石質鑑定 秋田県立十和田高等学校 教諭 錄 田 健一

炭化植物の同定 小坂町立十和田小中学校 教頭 成 田 典 彦

5. 土層、土器等の色調の記載には、『新版 標準土色帖』(日本色彩研究所)を使用した。

6. 報告書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の『毛馬内：1/2,5千』である。

7. 遺物の復元・実測・採拓・トレース等の一連の整理作業は、調査員の指導の下に、調査補助員、整理作業員が行った。

8. 本報告書に収載した各々の図版には、スケールを付した。なお写真図版については、任意の縮尺とした。

9. 本報告書の文中において、用語の主たるものについては統一するように努めたが、数度にわたり使用されるものは、簡略している場合がある。本報告書から「土壤」を「土坑」に改めた。分析で性格の判明したものについては、「土坑墓」等と標記している。

10. 図版・写真図版で、下記の記号やスクリーントーンを使用した。

S B…………建物跡 S K…………土 坑 SK(F)…………フ拉斯コ状土坑

SK(T)……T ピット SX(O)……石圓炉 SX(S)……配石遺構類

S X(f)……焼土遺構 Pit……柱穴状ピット SD……溝状遺構

S I……竪穴住居跡 □……遺構確認面下の土層 □……柱痕・焼土

11. 発掘調査・報告書作成については、下記の方々からご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

田中哲雄、岡村道雄（文化庁文化財保護部記念物課）、小林達雄（国学院大学）

熊谷常正（盛岡大学）、阿部義平（国立歴史民俗博物館）

安村二郎（鹿角市史編さん室）、村越 澄、葛西 効（青森大学）

遠藤正夫（青森市教育委員会）、錆田祐二（宮古市教育委員会）

佐藤智雄（函館市教育委員会）、小林 克（秋田県埋蔵文化財センター）

高木 晃（財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

本文目次

序

例言

本文目次

図版・写真図版・表目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

- | | |
|-------------------|---|
| 1. 遺跡の位置と立地 | 1 |
| 2. 遺跡の層序 | 2 |

第Ⅱ章 調査の概要

- | | |
|----------------|---|
| 1. 調査要項 | 5 |
| 2. 調査の方法 | 6 |
| 3. 調査の経過 | 6 |

第Ⅲ章 綱文時代の検出遺構と出土遺物

- | | |
|---------------------|----|
| 1. 建物跡と柱穴状ピット | 9 |
| 2. 配石遺構 | |
| (1) 環状配石遺構 | 14 |
| (2) 配石遺構 | 30 |
| 3. 石甌炉 | 36 |
| 4. 烧土遺構 | 37 |
| 5. 土 坑 | |
| (1) Tピット | 39 |
| (2) フラスコ状土坑 | 42 |
| (3) 土 坑 | 52 |
| 6. 埋設土器遺構 | 58 |
| 7. 遺構外出土遺物 | |
| (1) 土 器 | 60 |
| (2) 石 器 | 75 |
| (3) 土製品 | 84 |
| (4) 石製品 | 88 |

第Ⅳ章 歴史時代の検出遺構と出土遺物

- | | |
|----------------|-----|
| 1. 垂穴住居跡 | 94 |
| 2. 土 坑 | 103 |
| 3. 溝状遺構 | 108 |

第Ⅴ章 自然科学的調査

第VI章 分析と考察

第VII章 調査のまとめ

報告書抄録

図版・写真図版・表目次

図版目次

第1図 遺跡の位置と立地	1	第31図 フラスコ状土坑実測図(1)	43
第2図 調査区位置図	3	第32図 フラスコ状土坑実測図(2)	45
第3図 基本層序	4	第33図 フラスコ状土坑実測図(3)	46
第4図 F4区遺構配置図	8	第34図 フラスコ状土坑出土土器実測図	48
第5図 建物跡実測図(1)	11	第35図 フラスコ状土坑出土土器拓影図(1)	50
第6図 建物跡実測図(2)	12	第36図 フラスコ状土坑出土土器拓影図(2)	51
第7図 建物跡実測図(3)	13	第37図 フラスコ状土坑出土土器拓影図(3)	52
第8図 柱穴状ピット実測図(1)	15	第38図 フラスコ状土坑出土遺物実測図	53
第9図 柱穴状ピット実測図(2)	16	第39図 土坑実測図(1)	55
第10図 柱穴状ピット半截図(1)	17	第40図 土坑実測図(2)	57
第11図 柱穴状ピット半截図(2)	18	第41図 土坑出土土器拓影図	59
第12図 柱穴状ピット半截図(3)	19	第42図 土坑出土遺物実測図	60
第13図 柱穴状ピット半截図(4)	20	第43図 埋設土器遺構実測図	60
第14図 柱穴状ピット出土土器実測図	20	第44図 遺構外土器出土状況	61
第15図 柱穴状ピット出土土器拓影図(1)	26	第45図 遺構外完形・復元土器出土状況	61
第16図 柱穴状ピット出土土器拓影図(2)	27	第46図 遺構外出土土器実測図(1)	64
第17図 柱穴状ピット出土土器実測図	28	第47図 遺構外出土土器実測図(2)	65
第18図 柱穴状ピット土・石製品実測図	28	第48図 遺構外出土土器実測図(3)	66
第19図 第1号環状配石遺構実測図	29	第49図 遺構外出土土器実測図(4)	67
第20図 第2号環状配石遺構実測図	30	第50図 遺構外出土土器実測図(5)	68
第21図 第3号環状配石遺構実測図	31	第51図 遺構外出土土器実測図(6)	69
第22図 第4号環状配石遺構実測図(1)	32	第52図 遺構外出土土器拓影図(1)	70
第23図 第4号環状配石遺構実測図(2)	33	第53図 遺構外出土土器拓影図(2)	71
第24図 第401号環状配石遺構実測図	34	第54図 遺構外出土土器拓影図(3)	72
第25図 第5号～11号配石遺構実測図	35	第55図 遺構外出土土器拓影図(4)	73
第26図 石器炉実測図	36	第56図 遺構外出土土器拓影図(5)	74
第27図 焼土遺構実測図	38	第57図 石器出土分布状況	76
第28図 Tピット実測図(1)	40	第58図 遺構外出土石器実測図(1)	78
第29図 Tピット実測図(2)	41	第59図 遺構外出土石器実測図(2)	79
第30図 Tピット出土石器実測図	42	第60図 遺構外出土石器実測図(3)	80

第61図	遺構外出土石器実測図(4)	81	第75図	第3号竪穴住居跡実測図	97
第62図	遺構外出土石器実測図(5)	82	第76図	第4号竪穴住居跡実測図	98
第63図	遺構外出土石器実測図(6)	83	第77図	第5号竪穴住居跡実測図	99
第64図	土製品出土分布状況	85	第78図	第6号竪穴住居跡実測図	100
第65図	遺構外出土土製品実測図(1)	86	第79図	第7号竪穴住居跡実測図	101
第66図	遺構外出土土製品実測図(2)	87	第80図	第8号竪穴住居跡実測図	101
第67図	遺構外出土土製品実測図(3)	88	第81図	第9～13号竪穴住居跡実測図	102
第68図	遺構外出土土製品拓影図(1)	89	第82図	竪穴住居跡出土遺物実測図	104
第69図	遺構外出土土製品拓影図(2)	90	第83図	土坑実測図	106
第70図	石製品出土分布状況	91	第84図	土坑出土遺物実測図	107
第71図	遺構外出土石製品実測図(1)	92	第85図	燒土遺構実測図	108
第72図	遺構外出土石製品実測図(2)	93	第86図	楕円形土坑の長軸方向	111
第73図	第1号竪穴住居跡実測図	94	第87図	建物跡の規模	113
第74図	第2号竪穴住居跡実測図	95	第88図	遺構の移り変り	120

写真図版目次

P L 1	調査区全景	124	P L 10	出土土器(1)	133
P L 2	建物跡	125	P L 11	出土土器(2)	134
P L 3	柱穴状ビット・環状配石遺構	126	P L 12	出土土器(3)・出土石器(1)	135
P L 4	環状配石遺構	127	P L 13	出土石器(2)	136
P L 5	環状配石遺構・配石遺構・石匂炉	128	P L 14	出土土製品	137
P L 6	Tビット・ラスコ状土坑	129	P L 15	出土石製品	138
P L 7	ラスコ状土坑・土坑	130	P L 16	出土炭化材	139
P L 8	埋設土器・竪穴住居跡(平安時代)	131			
P L 9	土坑(平安時代)	132			

表 目 次

第1表	建物跡一覧表(1)	21	第5表	柱穴状ビット一覧表(3)	25
第2表	建物跡一覧表(2)	22	第6表	土坑の長軸分布	112
第3表	柱穴状ビット一覧表(1)	23	第7表	環状列石との類似性	114
第4表	柱穴状ビット一覧表(2)	24			

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と環境

特別史跡大湯環状列石は、秋田県鹿角市十和田大湯字万座、字野中堂、字一本木後口に所在し、J R花輪線十和田南駅の北東3.5km、東北縦貫自動車道十和田ICの北東3.7kmの地点にあります。

秋田県の北の玄関口である鹿角市は、十和田湖と八幡平の両国立公園という雄大な自然の真っただ中に位置し、「歴史と伝説の里」として知られています。

市内には米代川を本流とし、それに流れ込む大小様々な支流が、自然の姿を残したかたちで数多くみられます。このような豊かな自然は人々に多くの恵みを与えてくれます。

野山には、春一番を知らせるふきのとうから始まり、たけのこ、わらび、みず、きのこ等のたくさんの中草がそれぞれの季節ごとに芽を出し、クリ、クルミ、トチの実等の広葉樹が山々に生い茂ります。また、川ではイワナ、アユ、ヤマメ等の川魚がいたるところに泳いでいます。

そして時には、ウサギ、カモシカ、クマ等の動物や、白鳥をはじめとする多くの渡り鳥達の姿もみることができます。

また、市内を見渡せば平坦で緩やかな台地がいたるところに目につきます。この台地は十和田湖の噴火時の火砕流と河川の侵食作用によって形成された台地で、標高は180m前後、低地



第1図 遺跡の位置と立地

の水田面等との標高差は30m前後を測ります。それぞれの台地上からは市内をよく見渡すことができ、このような良好な地形的条件と自然環境を背景に、この台地上には縄文時代から近世までの多くの遺跡が分布し、その数は現在416ヶ所を数えています。

特別史跡大湯環状列石は、通称「風張台地」とよばれる南西方向に緩やかに延びた舌状台地の沢が入り込んで、ちょうど一番狭くなる部分にあります。その両縁辺部の沢地には多くの湧き水を湛え、また、台地下の大湯川一帯も見渡せ、数ある台地の中でもこの場所は、条件的に最良の地であると思われます。

周辺遺跡としては縄文時代中期の大集落・天戸森遺跡、後期中葉の集落・赤坂A遺跡や両列石と類似した遺跡として後期前葉の高屋跡遺跡等があげられます。

本年度は万座環状列石の北側約100mの地点に調査区(F4区)を設定しました。

(花海義人)

2. 遺跡の層序

基本層序はこれまでと同様 I ~ V 層に分層し、各層の細分は第6次F₁区、第9次D₁区の細分基準を基本とした。

第I層は大湯浮石層までの堆積層で、Ia層は表土、Ib層を耕作土とした。

第II層は大湯浮石層で約1000年前の十和田湖噴火時に降下したものである。色調、堅さ、粗密度、混入物の含有量等から3層(IIa~IIc)に細分される。本層前後において平安時代の遺構が確認される。

第III層は、大湯浮石層から地山直上の暗褐色までの層で色調、堅さ、粗密度、混入物の含有量等から3層に細分される。IIIa層は黒色土でほとんど混入物を含まず、堅くしまっている。IIIb層も黒色土で混入物を含まないが、IIIa層とは粗密度と堅さで分けられる。IIIc層は黒褐色で下位火山灰(地山)を少量含んでいる。本調査区ではIIIa~IIIb層が遺物包含層、IIIc層が遺構確認面となる。また、従来のIIIc層(チョコレート色にちかい黒褐色土)が調査区東部の中央寄り付近で所々にみられた。

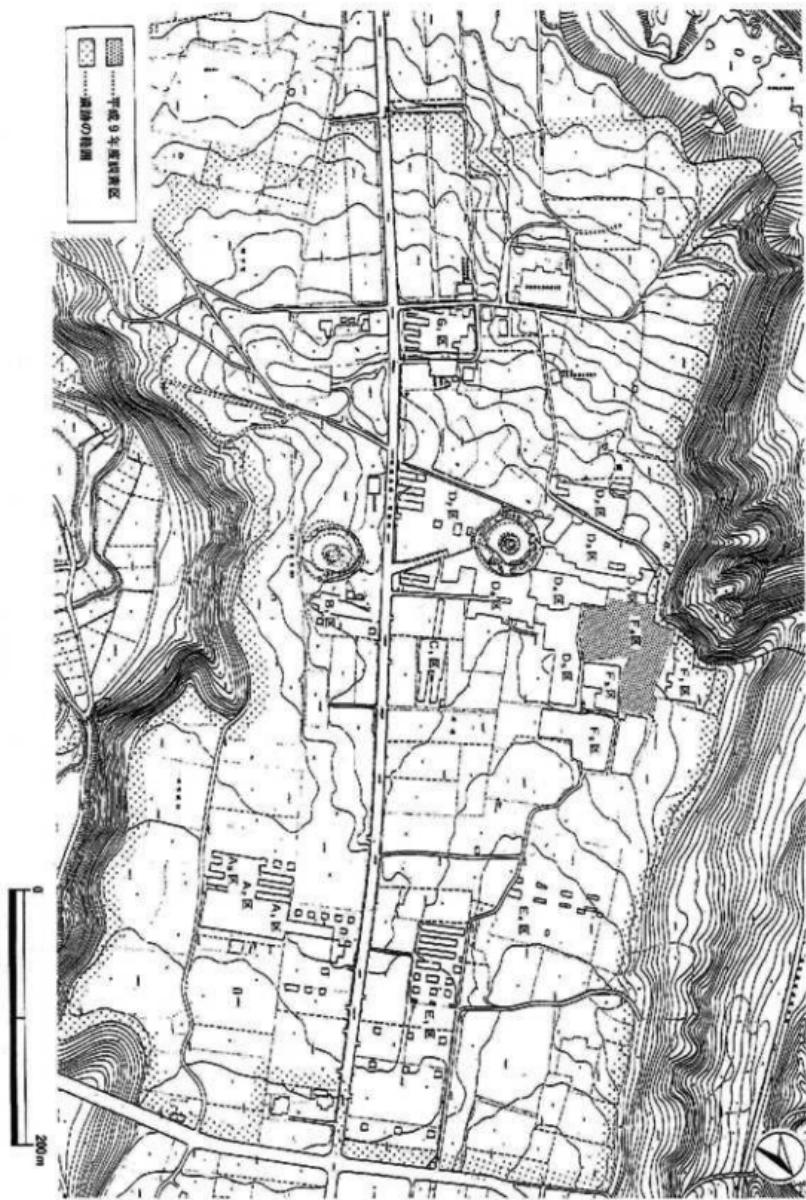
間1層は地山粒を含む黒褐色土で、IIIc層よりも地山粒を多く含んでいる。調査区中央部から西部にかけてその分布がみられる。環状配石、特大な環状配石はこの上面での確認となる。

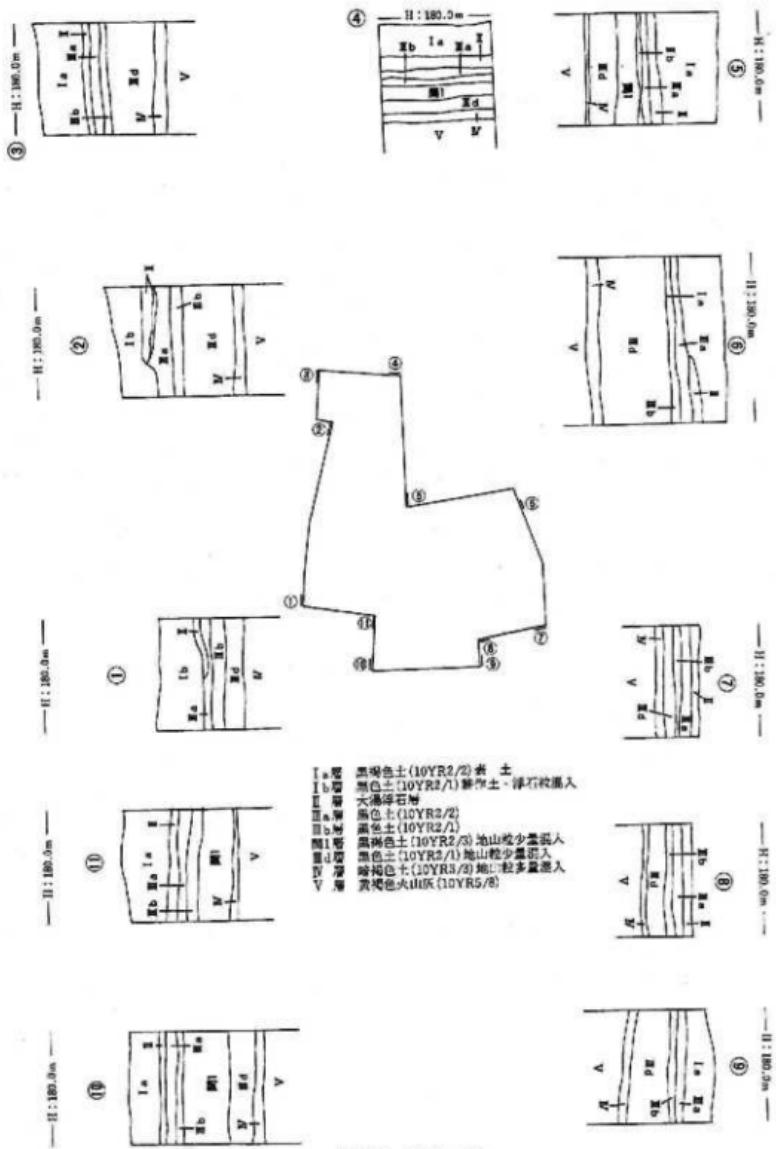
第IV層は地山(下位火山灰)直上の暗褐色土の層で、若干粘性があり、しまっている。

第V層は黄褐色の火山灰層で、本書では地山とよんでいる。なお、プラスコ状土坑やTピット等の深いものは本層や、その下のシラス層まで掘り込んでいるものみられる。

(花海義人)

第2図 湖東区位置図





第3図 基本層序

第二章 調査の概要

1. 調査要項

1. 遺跡名 特別史跡大湯環状列石
2. 調査目的 万座環状列石の北側50~150mの地点(F₄区)を発掘調査し、F₁区・F₂区で確認されている堅穴住居群等の遺構の南側への広がりを把握し、史跡環境整備を行なうための基礎資料とする。
3. 調査地 F₁区 秋田県鹿角市十和田大湯字万座19番地ほか
4. 発掘面積 3,878m²
5. 調査期間
- | | |
|----------|---------------------|
| 調査準備 | 平成8年6月3日~6月7日 |
| 発掘調査 | 平成8年6月10日~11月26日 |
| 整理・報告書作成 | 平成8年11月1日~平成9年3月31日 |
6. 調査主体者 鹿角市教育委員会
7. 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課 文化史跡整備担当
- | | |
|----|-------|
| 主任 | 藤井 安正 |
| 主事 | 花海 義人 |
8. 調査参加者
- | | |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査指導 | 武藤祐浩(秋田県教育庁文化課 学芸主事) |
| 調査員 | 成田 典彦(小坂町立十和田小中学校 教頭)
峰田 健一(秋田県立十和田高等学校 教諭)
佐藤 樹(元鹿角市教育委員会埋蔵文化財発掘調査員) |
| 調査補助員 | 柳沢和仁、大森寿子 |
| 作業員 | 苗代沢ノブ、宮沢トミエ、柳沢勝江、柳沢ヤス、松宮カチ、宮沢カヨ
柳沢恵美子、佐藤良子、兎沢サツ子、柳沢ミネ、木村千鶴江、
高村サツ、柳館愛子、安村ヨコ、黒川一子、児玉フテ、田中ミヤ
田中美千栄、関イサ、成田由紀子
田中栄子、福島美紀子、石川千春、石川久美子 |
9. 生涯学習課
- | | |
|------|-------|
| 課長 | 田中 正美 |
| 課長補佐 | 奈良勝哉 |
| 主査 | 秋元信夫 |

主 任 藤井 安正

主 事 花海 義人

10. 協力機関

文化庁文化財保護部記念物課、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター

2. 調査の方法

調査区内のグリッド設定については、第1次発掘調査以来のN-49°Wを基準線とする5m単位とし、万座環状列石内の基準杭より延長した。杭番号は、アルファベットと算用数字の組合せにより、西側の杭をもってグリッドの名称とした。

作業の効率化を図るため、周辺の調査区の基本層序をもとに、重機を導入し、大湯浮石層上面までの表土除去を行なった。遺物包含層・遺構確認面であるII層以下については、手掘りによる分層発掘を行い、極力上層での遺構の確認に務めた。確認された遺構については、種類別・発見順に番号を付した。

本調査は、遺構の分布状況を把握することに主力を注いだことから、各遺構の精査は、半裁に留め、遺構の保存にも務めた。

遺構の実測は、簡易通り方測量とし、1/20で図化した。遺物の取り上げについては、各グリッド、各層毎に一括して採取したほか、完形・復元可能土器や土製品・石製品については、出土地点を記録するように務めた。

写真撮影には、3台のカメラを使用し、調査各段階・遺物出土状況を白黒、カラー、スライドフィルムに収めた。

(藤井安正)

3. 発掘調査の経過

特別史跡大湯環状列石第13次発掘調査は、平成8年6月3日より開始し、遺構の埋め戻しが終了したのは11月26日である。以下、調査日誌に基づき、その経過を記す。

6月3日～7日、発掘調査準備、環境整備を行なうとともに、6月6日より重機を導入し表土除去を行なう。

6月10日、作業員への作業説明と事務連絡のあと、調査区北側より作業を開始する。21日、F区境界付近で平安時代の堅穴住居跡を確認、隨時精査に入る。手掘りによる表土除去も、7月中旬頃には、調査区西側まで終了し、大型の石の露頭が相次ぐ。19日より、石の露出作業に取り掛かり、その配置は環状を示すことが判明した。7月末までに堅穴住居5棟、土坑12基の精査を行なう。

8月からは、調査区南側の遺構確認面までの掘り下げと調査区中央部の遺構確認作業に主力

を注ぎ、多量の遺物の出土と共に、土坑・柱穴状ピットの確認が相次ぐ。8月8日には、NHK「ひるどき日本列島」の番組で特別史跡大湯環状列石と調査風景が紹介された。同19日には、花輪第二中学校生徒が発掘調査に参加した。同22日より、確認造構の精査を開始する。

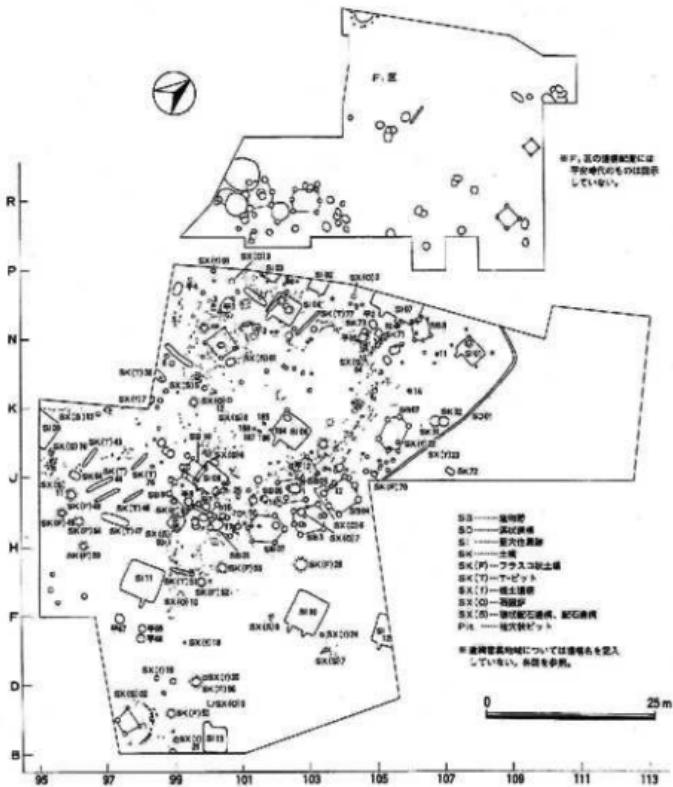
9月に入ると確認造構も日毎に増え、造構の精査に追われ、9月末までに土坑等29基、柱穴状ピット77個の精査を終える。

10月上旬から、調査区南西側の表土除去と造構確認、同中旬より中央部の環状配石内の造構確認に主力を注ぐ。造構精査も並行し行い、同下旬にまでに土坑等58基、柱穴状ピット155個の精査を終了する。なお、10月15日、16日の両日にわたって文化庁記念物課 岡村道雄主任文化財調査官の現地指導を、同28日、29日の両日には、特別史跡大湯環状列石環境整備検討委員会に出席された文化庁記念物課 田中哲雄主任文化財調査官、国學院大學 小林達雄教授、盛岡大学 熊谷常正助教授の指導を受けた。

10月31日までに、造構平面図作成を僅か残し、造構の精査と調査区全量、各造構の写真撮影を行なった。

11月2日に現地説明会を開催し、120名程の参加があり、縄文の世界に関心を寄せ、盛会に終わった。なお、造構保護のため埋め戻しは人力とし、11月18日から26日まで行なった。

(藤井安正)



第4図 F4区域構配図

第Ⅲ章 縄文時代の検出遺構と出土遺物

F₁区において確認された縄文時代の遺構は、建物跡10棟、柱穴状ピット127個、環状配石遺構4基、配石遺構8基、焼土遺構20基、石器炉12基、Tピット12基、フラスコ状土坑20基、土坑22基である。なお、第10次調査で確認した第401号環状配石遺構について、追調査を実施したのでその概要も述べる。

1. 建物跡と柱穴状ピット

F₁区からは、181個の柱穴状ピットが確認された。そのほとんどは、調査区の西側に集中する。これらのピットは、基本層序第Ⅲd層でその輪郭が確認され、その規模は、径26cm～120cm、深さ40cm～140cmを測る。柱痕が確認されたものが多く、径23cm～52cmを測る。規則的な柱配置から、10棟の掘立柱建物跡の存在を確認したが、見落としたものもあるものと思う。

柱穴状ピットからは、赤色顔料の塗布された小型壺のほか、縄文後期前葉の土器破片、石器、石製品（碗状石製品・土器片利用石製品）、土製品（鐸形土製品・耳栓）、炭化植物が出土している。

第1号建物跡（第5図、15図、18図）

調査区のほぼ中央、Y I・Y J-99・100グリッドに位置する。第3号環状配石遺構、第20号・21号土坑、第19号Tピットと重複し、新旧関係は、20号土坑・19号Tピット→本建物跡→3号環状配石遺構である。

ピット1～6を柱とする6本柱の建物跡で、張り出し部軸長440cmを測る。軸長方向はN-64°Eである。柱穴の規模は比較的大型で、径68cm～92cm、深さ94cm～119cm、柱痕径22cm～35cmを測る。

ピット内より沈線文を主体とした後期前葉の土器破片が出土している。

第2号建物跡（第5図、15図）

調査区のほぼ中央、Y I-101・102グリッドに位置する。第3号環状配石遺構、第27号フラスコ状土坑と重複し、新旧関係は、本遺構→3号環状配石遺構である。

ピット36・40・43・44・46・×を柱とする6本柱の建物跡で、張り出し部軸長555cmを測る。軸長方向はN-54°Eである。柱穴の規模は、径52cm～80cm、深さ約80cm～110cm、柱痕径20cm～30cmを測る。

ピット内より沈線文・蒂繩文を主体とする後期前葉の土器破片が出土している。

第3号建物跡（第6図、15図、18図）

調査区のほぼ中央、Y I・Y J-102・103グリッドに位置する。第22号ラスコ状土坑、第7号石窯炉と重複し、新旧関係は、本建物跡→22号ラスコ状土坑→7号石窯炉である。

ピット13・32・38・39・41・42を柱とする6本柱の建物跡で、張り出し部軸長470cmを測る。軸長方向はN-33°Eである。柱穴の規模は、大きく70cm~93cm、深さ約97cm~107cm、柱痕28cm~37cmを測る。

ピット内より沈線文を主体とする、後期前葉の土器破片、土製品が出土している。

第4号建物跡（第6図、15図、16図、18図）

調査区のほぼ中央、Y I-103、Y J-103・104グリッドに位置する。第6号石窯炉と重複し、木造構が古い。

ピット19・30・37・56・58・65を柱とする6本柱の建物跡で、張り出し部軸長490cmを測る。軸長方向はN-14°Eである。柱穴の規模は、大きく88cm~120cm、深さ約108cm~133cm、32cm~52cmを測る。

ピット内より後期前葉の完形土器1点、土器破片、碗状石製品が出土している。

13図は、ピット19より出土した球形を呈する小型の壺で、主文様として隆沈で渦巻文が施文されている。頸部が偏った位置に付けられ、全面に赤色顔料が塗布されている。同ピットより炭化植物（スキ科）が出土した。18図4は、ピット30より出土した碗状石製品で、器面に沈線により曲線文が施文されている。石材は泥質凝灰岩である。

第5号建物跡（第6図、15図）

調査区のほぼ中央、Y J-102グリッドに位置する。第6号建物跡、第13号ラスコ状土坑と重複し、新旧関係は本建物跡→13号ラスコ状土坑である。

ピット11・14・16・34を柱とする4本柱の建物跡で、長辺415cm、短辺310cmを測る。長辺方向はN-14°Eである。柱穴の規模は、小振で径54cm~68cm、深さ約77cm~90cm、柱痕18cm~22cmを測る。

ピット内より沈線文・帶縄文を主体とした、後期前葉の土器破片が出土している。

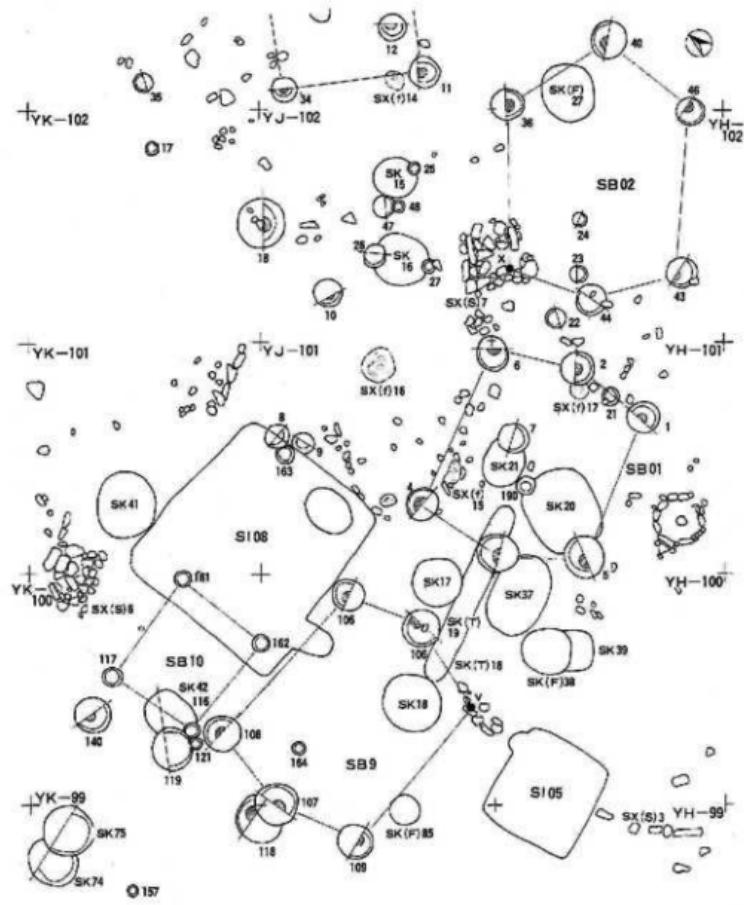
第6号建物跡（第6図、15図~16図）

調査区のほぼ中央、Y J-102、Y K-102・103グリッドに位置する。第5号建物跡、第4号環状配石遺構と重複し、新旧関係は、木造構→4号環状配石遺構である。

ピット15・120・165・167を柱とする4本柱の建物跡で、長辺280cm、短辺275cmを測る。長軸方向はN-20°Eである。柱穴の規模は、小振で径58cm~70cm、深さ約57cm~100cm、柱痕22cm~28cmを測る。

ピット内より、沈線文を主体とした後期前葉の土器破片が出土している。

第7号建物跡（第6図、16図）



(14)

+YK-98

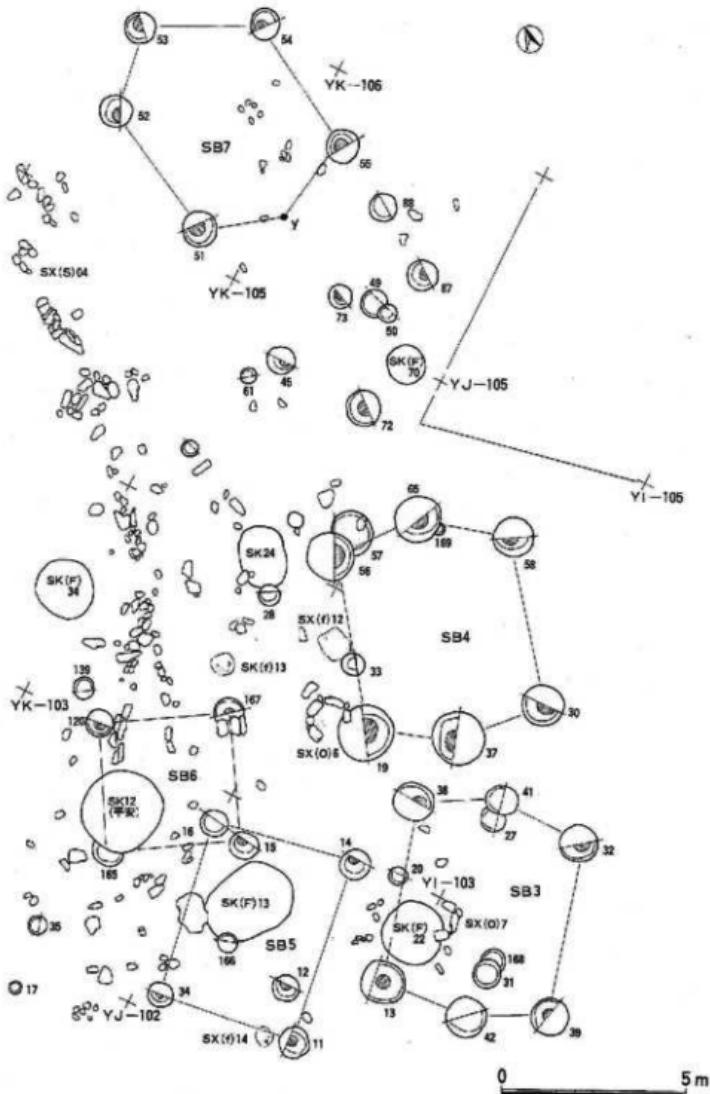
+YJ-98

+YI-98

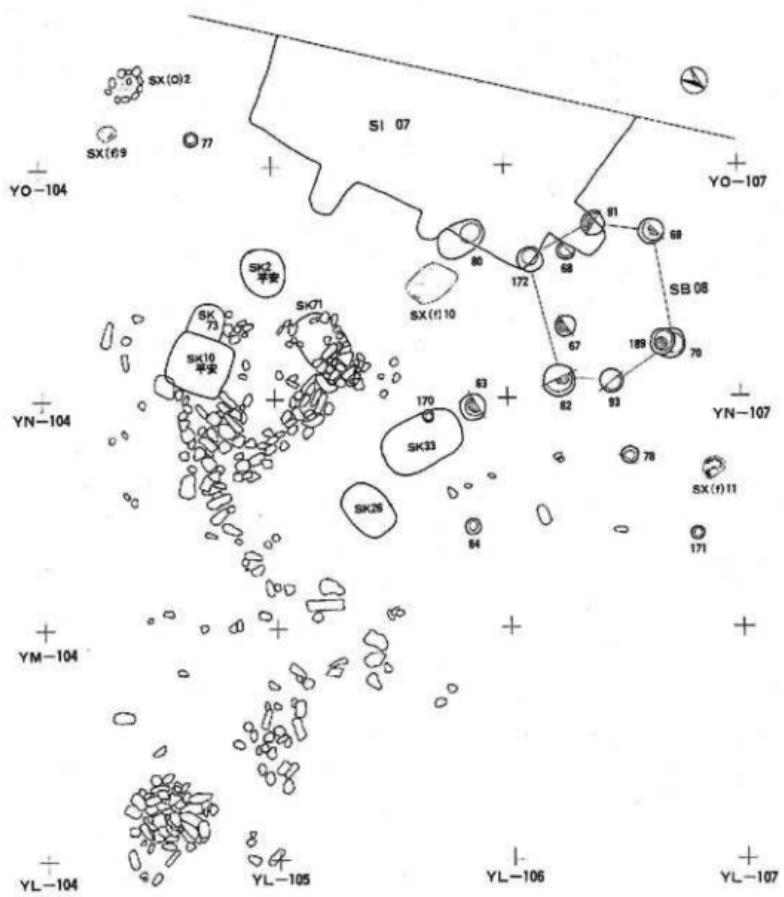
+YH-98

0 5m

第5図 建物跡実測図(1)



第6図 建物跡実測図(2)



第7図 建物跡実測図(3)

調査区の中央より僅かに東北側、Y K-105、Y L-105グリッドに位置する。

ピット51・55・7を柱とする6本柱の建物跡で、張り出し部軸長500cmを測る。軸長方向はN-12°-Wである。柱穴の規模はやや小振で、径68cm~78cm、深さ約93cm~102cm、柱痕32cm~37cmを測る。

ピット内より、沈線文を主体とした後期前葉の土器破片が出土している。

第8号建物跡（第7図、15図~16図）

調査区の中央より僅かに北寄り、Y N-106グリッドに位置する。

ピット62・69・91・93・172・189を柱とする6本柱の建物跡で、張り出し部軸長340cmを測る。軸長方向はN-40°-Wである。柱穴の規模は小振で、径50cm~70cm、深さ約70cm~82cm、柱痕25cm~33cmを測る。

ピット内より、後期前葉の土器破片が出土している。

第9号建物跡（第5図、16図）

調査区の中央より僅かに南部、Y J-98 99、Y K-99グリッドに位置する。第19号Tピット、第85号ラスコ状土坑と重複し、新旧関係は、19号Tピット→本遺構である。

ピット105・106・107・108・109・vを柱とする6本柱の建物跡で、張り出し部軸長500cmを測る。軸長方向はN-87°-Eである。柱穴の規模は、やや大きく小振70cm~93cm、深さ約95cm~105cm、柱痕23cm~32cmを測る。

ピット内より、隆沈文・沈線文を主体とした後期前葉の土器破片、土製品、石製品が出土している。

第10号建物跡（第5図、16図）

調査区の西端部、Y K-99グリッドに位置する。第42号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。

ピット116・117・161・162を柱とする4本柱の建物跡で、長辺210cm、短辺205cmを測る。長軸方向はN-86°-Eである。柱穴の規模は小振で、径35cm~43cm、深さ約62cm~70cmを測る。

ピット内より、沈線・帶繩文を主体とした後期前葉の土器破片が出土している。

（藤井安正）

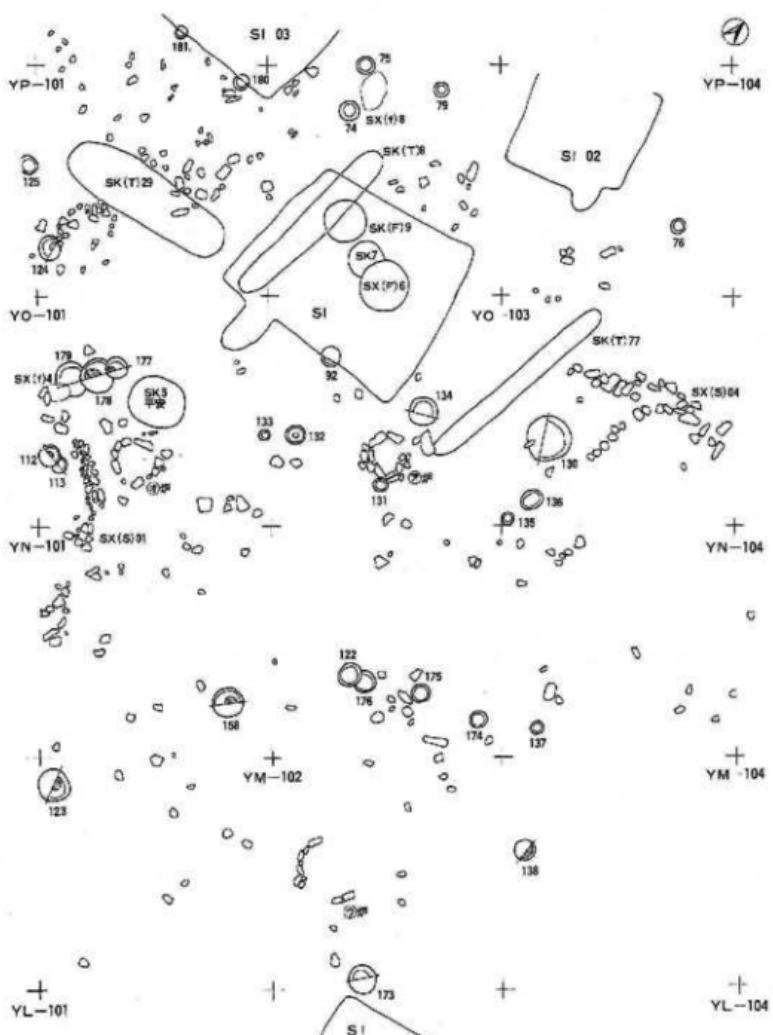
2. 配石遺構

(1) 環状配石遺構

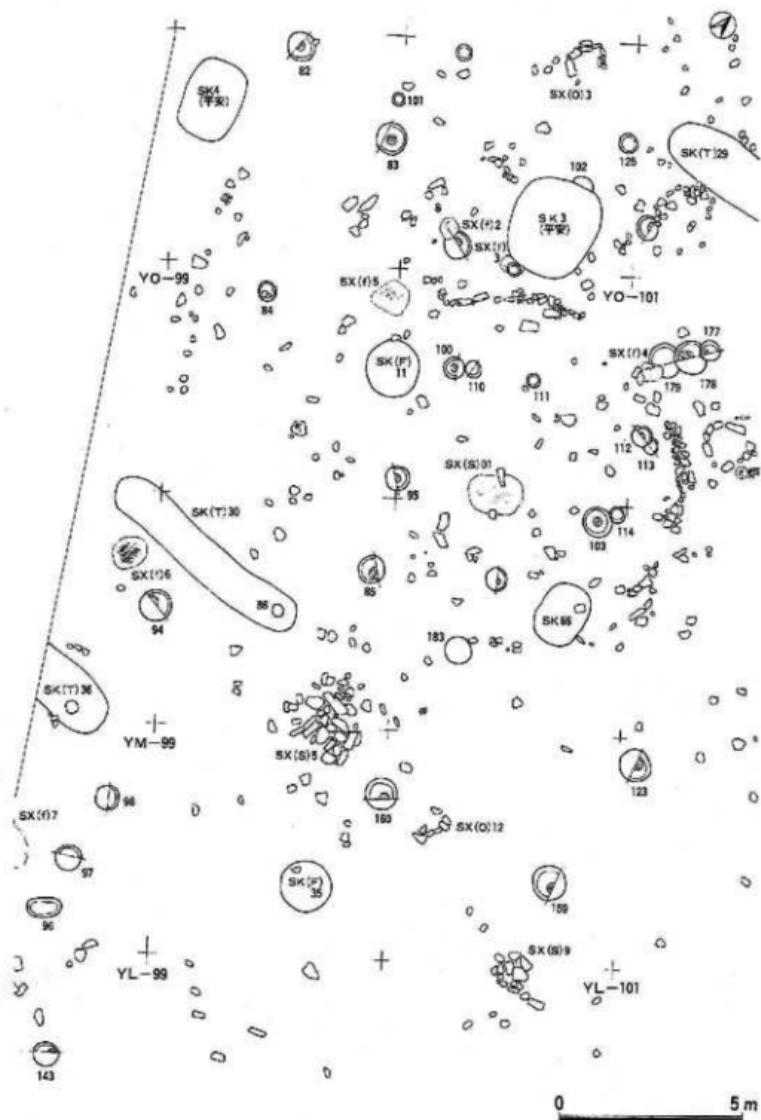
第1号環状配石遺構（第19図）

調査区西側のY N・Y O-99・100グリッドに位置し、Ⅲb層下面を構築面とする。第4号環状配石遺構、第11号ラスコ状土坑、第66号土坑と重複し、いずれの遺構より新しい。

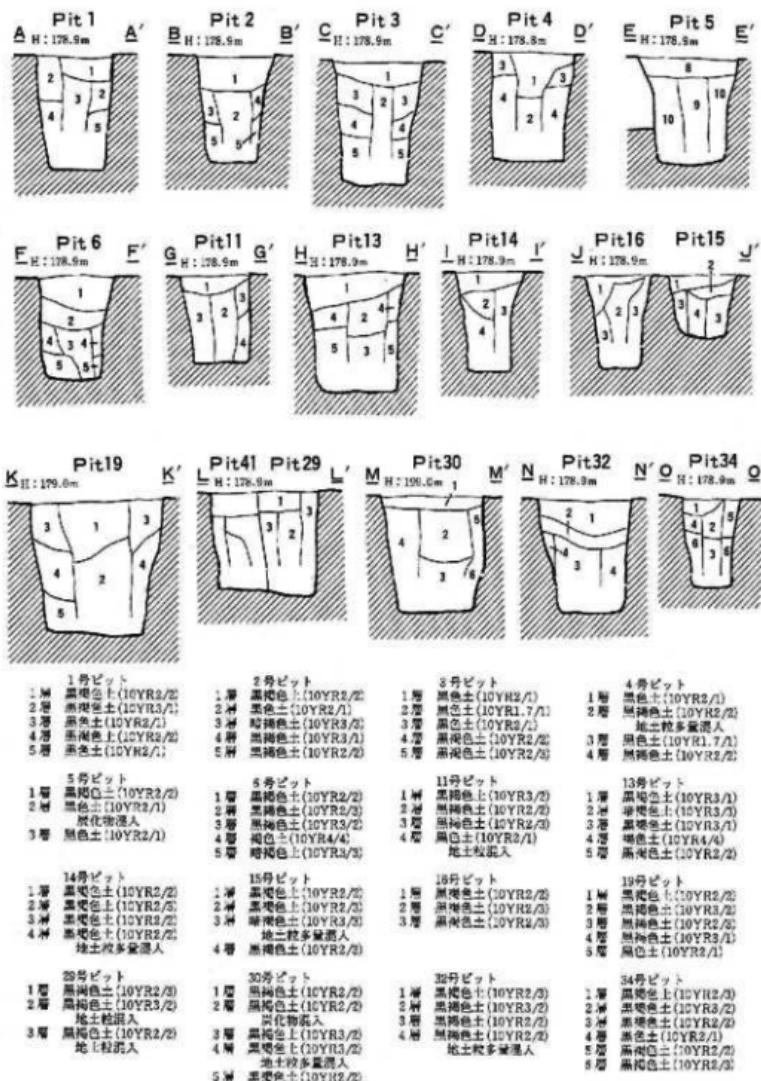
環帶部は径約750cm、帯幅30cmを測り、東側に200cm×80cmの張り出し施設を有する。張り出



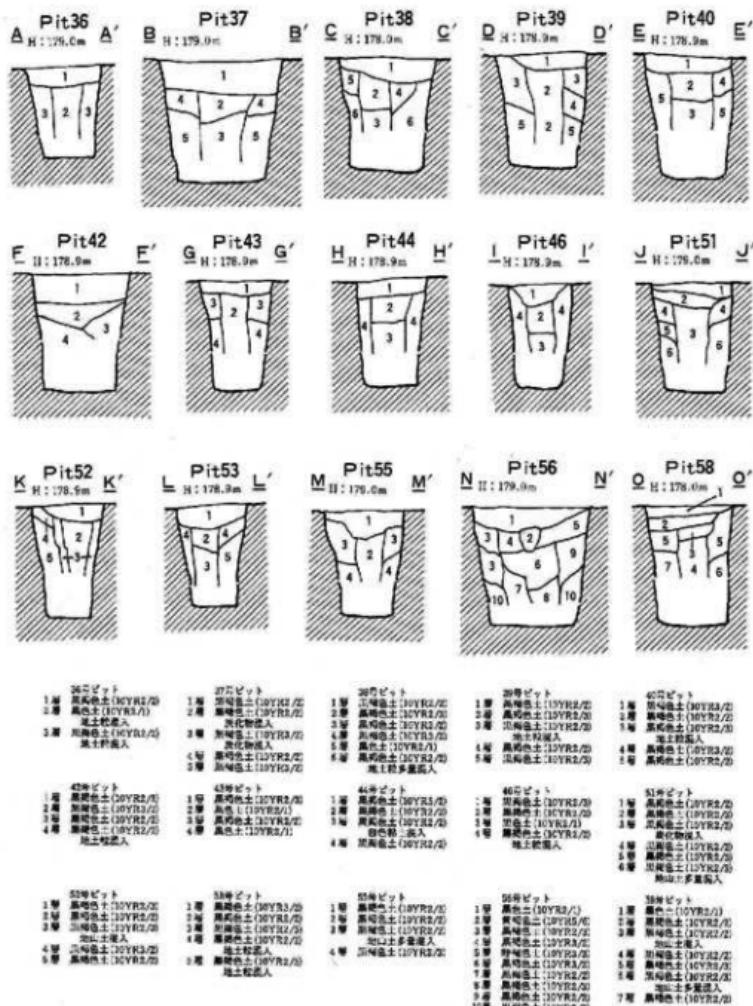
第8図 柱穴状ピット実測図(1)



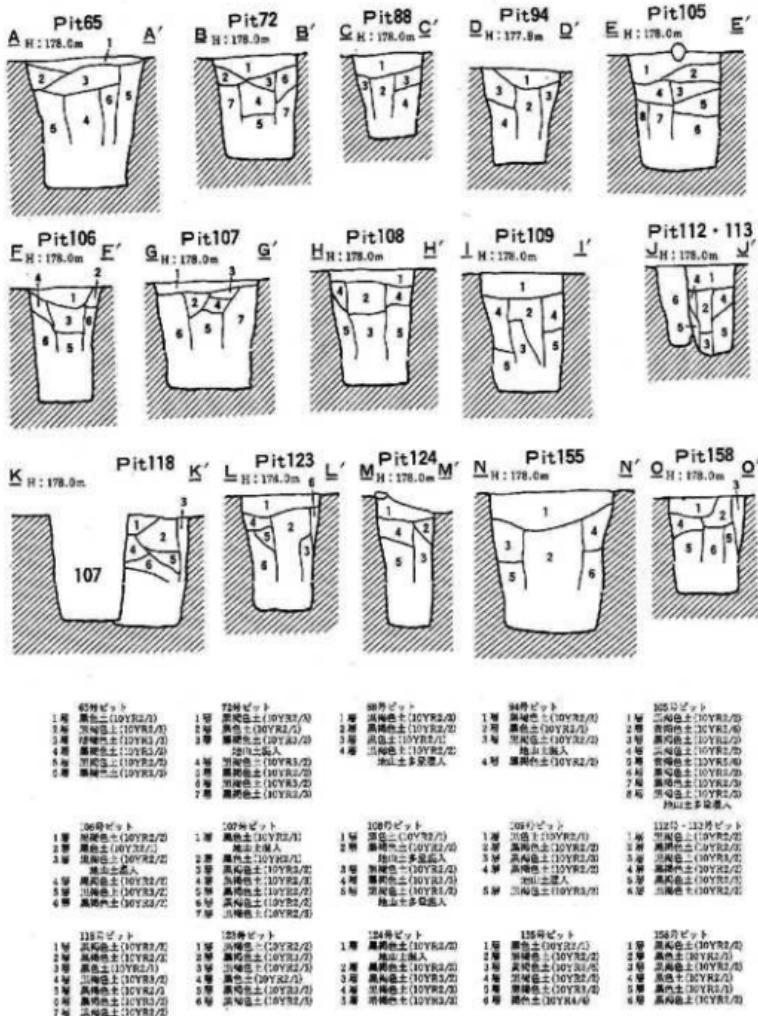
第9図 柱穴状ピット実測図(2)



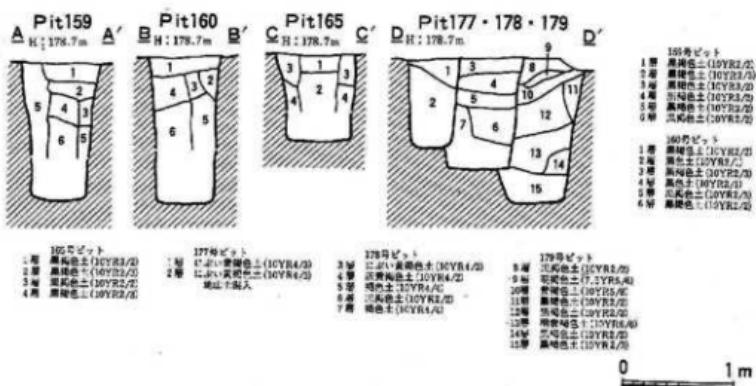
第10図 桂冠状ピット半載図(1)



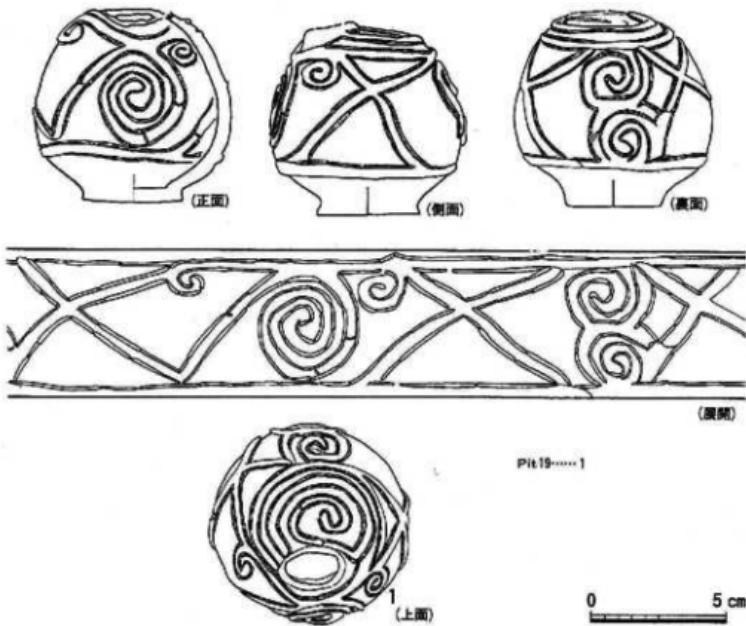
第11図 柱穴状ピット半裁図(1)



第12図 柱穴状ピット半載図(3)



第13図 柱穴状ピット半裁図(4)



第14図 柱穴状ピット出土土器実測図

第1表 建物跡一覧表(1)

*張り出し部をもつプランのうち、張りだし部軸長が長辺より長いものは張りだし部軸方向を長軸方向とした。

*新旧関係は旧→新で標記。標記のないものは新旧不明。

建物跡 No.	形態	柱穴			長辺の長さ(cm)	短辺の長さ(cm)	張り出し部軸長 (cm)	長軸方向	新旧関係
		数	番号	幅員、奥行き(cm)					
SB01	Ⅱ種	6	pit1	68×68×110	22cm	330(pit1-pit5)	350(pit1-pit5)	140(pit2-pit3)	N-6°E
			pit2	71×70×98		320(pit2-pit5)	370(pit4-pit5)		SK20-SB01
			pit3	68×82×119		33			SK(T)19
			pit4	75×70×97		35			SK37-SB01
			pit5	92×83×94		33			SB01-SK(S)
			pit6	77×70×96		33			
SB02	Ⅱ種	6	pit35	72×67×86	27cm	(360)(pit35-pitX)	390(pit35-pit46)	555(pit40-pit44)	N-54°E
			pit40	63×78×110		30	365(pit43-pit45)		SK(F)27
			pit43	65×63×100		20			
			pit44	67×57×100		25			
			pit46	62×49×					
			pitX	x x					
SB03	Ⅱ種	6	pit13	93×90×107	28cm	396(pit13-pit28)	360(pit13-pit39)	470(pit41-pit42)	N-33°E
			pit22	83×82×103		37	386(pit22-pit28)		SK(F)22→
			pit28	90×83×109		34			SK(O)7
			pit29	82×80×103		29			
			pit41	70×53×97					
			pit42	50×89×95					
SB04	Ⅲ種	6	pit19	120×118×120	32cm	380(pit19-pit56)	385(pit19-pit30)	490(pit37-pit65)	N-14°E
			pit30	60×88×140		40	380(pit26-pit58)		SK(O)6
			pit37	113×112×108		50			
			pit56	105×102×133		32			
			pit58	88×87×109		32			
			pit65	105×100×118		43			
SB05	Ⅰ種	4	pit11	68×65×80	21cm	415(pit11-pit14)	295(pit11-pit34)	N-14°E	SK(F)13
			pit14	68×65×30		22	395(pit14-pit34)		SB06
			pit16	61×57×84					
			pit34	56×52×77		18			
SB06	Ⅰ種	4	pit15	62×57×57	28cm	275(pit15-pit17)	290(pit15-pit166)	N-23°E	SB06-SX(S)
			pit17	58×57×77		28	275(pit17-pit166)		SB06-SK12 (平2)
			pit166	70×39×78			290(pit166-pit167)		SB06
			pit167	65×39×100		22			
SB07	Ⅱ種	6	pit51	78×75×99	37cm	390(pit51-pit52)	380(pit51-pit55)	(300)(pit53-pit57)	N-12°W
			pit52	79×69×102		32	310(pit54-pit58)		
			pit53	68×68×94			385(pit52-pit54)		
			pit54	70×63×98					
			pit55	75×70×96		32			
			pit57	x x		32			

第2表 建物跡一覧表(2)

建物跡 名	形態 数	柱穴 数	柱 穴		長辺の長さ(cm)	短辺の長さ(cm)	張り出し前軸長 (cm)	長軸方向	新旧関係
			番号	幅員、高さ(cm)					
SB06	Ⅲ類	5	pit62	73×65×(82)	33	270(pit62-pit172)	230(pit62-pit185)	340(pit51-pit33)	N-40°-W SB08-S107 (平安)
			pit69	55×54×(86)	24	250(pit69-pit186)	270(pit69-pit172)		
			pit91	52×50×(86)	25				
			pit93	50×49×70					
			pit112	52×50×80					
			pit189	58×60×70	25				
SB09	Ⅳ類	6	pit105	63×63×(105)	29	400(pit105-pit108)	355(pitV-pit105)	500(pit105-pit137)	N-87°-E SKC10-6B10 SK18(平安) SK(F)85 pit118→ pit107
			pit106	70×66×(101)	23	(280)(pit109-pitV)	370(pit108-pit109)		
			pit107	63×62×(95)	32				
			pit108	77×75×104	29				
			pit109	78×73×(105)	23				
			pitV	X X					
SB10	Ⅰ類	4	pit116	55×53×70		210(pit117-pit161)	205(pit115-pit117)	N-86°-E SK42-SH11 pit116→pit115	
			pit117	43×42×65		193(pit116-pit162)	220(pit161-pit162)		
			pit161	38×37×62					
			pit162	38×37×65					

し部を通る造構軸線に相対して、2個一対の柱穴状ピット95・111・114・182、造構中央に118cm×80cmの焼土を確認した。配石に使用される石は、拳大～人頭の大さで、その石材は石英閃緑玢岩が主体を占め、蛇紋岩、チャートが各1点含まれる。

造構の構築時期は、重複する造構から後期中葉と考えられる。

第2号環状配石造構(第22図)

調査区中央よりやや南側、YH・YI-99・100グリッドに位置し、Ⅲb層下面を構築面とする。第1号・2号・10号建物跡、第38号・58号フランクスコ状土坑、第20号・21号・39号土坑、第19号・51号Tピットと重複し、いずれの造構より新しい。

環帶部は、推定径660cm、帯幅25cmを測り、北東側に85cm×75cmの張り出し施設を有する。張り出し部を通る造構軸線上に石爐が位置する。炉は径110cmを測り、4方向に三角形に石を配置した突出部を有する。柱穴状ピットは、確認できなかったが、本年度の調査例から存在したものと判断される。配石に使用された石は、拳大の円礫～30cm余りの柱状のもので、その石材は、石英閃緑玢岩が主体を占め、泥質凝灰岩、緑色凝灰岩、石英安山岩、安山岩、火山礫凝灰岩が含まれる。

造構の構築時期は、重複する造構から後期中葉と考えられる。

第3号環状配石造構(第20図)

第3表 F・区柱穴状ピット一覧表(1)

(新旧関係は旧→新で標記、記号のないものは新旧不明)

pit No.	グリッド	直径×短径・深さ (cm)	重複関係	pit No.	グリッド	直径×短径・深さ (cm)	重複関係
001	YI-100	68×68+(103)	SX(F)17→pit2	039	YI-102	82×80+(103)	
002	YI-100	71×70+(98)	SK(T)19, SK37→pit3	040	YI-102	80×78+(110)	
003	YI-100	88×82+(119)		041	YI-103	70×63+(97)	pit29→pit41
004	YJ-100	75×70+(97)	SK20→pit5	042	YI-102	90×89+(106)	
005	YI-100	92×83+(94)		043	YI-101	65×63+(100)	
006	YI-100	77×70+(96)	SK21→pit7	044	YI-101	67×67+(100)	
007	YI-100	64×62+(102)	pit8→SI	045	YK-104	63×60+(92)	
008	YJ-100	57×50+(82)	pit9→SI	046	YI-101	52×49+(95)	
009	YJ-100	48×+(95)		047	YJ-101	48×48+(100)	
010	YJ-101	62×60+(78)		048	YJ-101	26×+(52)	
011	YJ-102	68×66+(80)		049	YK-105	60×(60)+(92)	pit40→pit50
012	YJ-102	59×54+(78)		050	YK-105	41×40+(62)	pit49→pit50
013	YJ-102	93×90+(107)		051	YL-105	88×76+(99)	
014	YJ-102	68×66+(90)		052	YK-105	70×69+(102)	
015	YJ-102	62×57+(57)		053	YL-105	68×68+(94)	
016	YK-102	61×57+(84)		054	YL-105	70×63+(93)	
017	YK-101	27×26+(60)		055	YK-105	75×70+(96)	
018	YJ-101	107×110+(112)		056	YK-104	105×102+(133)	pit57→pit56
019	YJ-103	120×118+(120)	pit19→SX(O)6	057	YK-104	90×+(85)	pit57→pit56
020	YJ-102	42×39+(53)		058	YJ-104	88×87+(109)	
021	YI-100	40×40+(70)		059	YK-104	38×38+(55)	
022	YI-101	44×43+(84)		060	YK-104	35×35+(58)	
023	YI-101	39×38+(75)		061	YK-104	36×34+(57)	
024	YI-101	31×30+(45)		062	YO-106	70×68+(82)	
025	YJ-101	27×25+(55)	SK15→pit25	063	YN-105	58×56+(105)	
026	YJ-101	50×48+(62)	SK16→pit26	064	YN-105	36×35+(80)	
027	YJ-101	30×30+(48)	SK16→pit27	065	YJ-104	105×100+(118)	pit66→pit65
028	YK-103	48×47+(65)	SK24→pit28	066	YP-100	60×58+(110)	pit66→pit65
029	YI-103	54×+(96)	pit29→pit41	067	YO-106	44×43+(105)	
030	YI-103	90×88+(104)		068	YO-106	40×+(63)	
031	YI-102	62×59+(100)		069	YO-106	55×54+(80)	
032	YI-103	83×82+(103)		070	YO-106	64×+(80)	pit70→pit189
033	YJ-103	51×50+(56)		071	欠番	×	
034	YJ-102	54×52+(77)		072	YK-104	79×74+(92)	
035	YK-102	40×38+(90)		073	YK-106	55×52+(90)	
036	YJ-102	72×67+(80)		074	YP-102	43×41+(70)	
037	YJ-103	113×112+(108)		075	YP-102	41×38+(62)	
038	YJ-103	90×83+(100)		076	YP-103	33×31+(71)	

第4表 F.区柱穴状ピット一覧表(2)

(新旧関係は旧→新で標記、記号のないものは新旧不明)

pit No	グリッド	直径×短径・深さ (cm)	重複関係	pit No	グリッド	直径×短径・深さ (cm)	重複関係
077	YP-104	30×30・50		115	YN-98	28×26・(90)	SK(T)96→pit115
078	YN-106	39×38・73		116	YK-99	35×33・70	SK42→pit115→pit119
079	YP-102	35×32・60		117	YK-99	43×42・65	
080	YO-105	107×78・		118	YK-98	100×・(100)	pit118→pit107
081	YP-100	33×33・80		119	YK-99	94×85・(100)	SK45→pit115→pit119
082	YO-99	62×60・70		120	YK-103	58×57・(77)	pit120→SX(S)
083	YO-99	68×65・70		121	YK-99	26×・50	pit121→pit119
084	YO-99	43×40・72		122	YN-102	54×48・	pit176→pit122
085	YN-99	60×55・(75)		123	YM-101	73×70・(103)	
086	YN-99	15×14・		124	YP-101	52×47・(120)	
087	YK-105	69×64・(87)		125	YP-100	40×38・50	
088	YK-105	62×62・(75)		126	YP-100	32×24・(75)	SX(F)3→pit126
089	欠番	×		127	欠番	×	
090	欠番	×		128	欠番	×	
091	YO-106	52×50・(80)		129	欠番	×	
092	YO-102	43×・(70)		130	YO-103	100×97・110	
093	YO-106	50×49・70		131	YO-103	32×30・(80)	pit131→SX(O)
094	YN-99	69×69・(85)		132	YO-102	43×41・(82)	
095	YO-100	52×52・(111)		133	YO-101	27×26・56	
096	YM-98	75×42・(80)		134	YO-102	60×60・(75)	
097	YM-98	55×53・(99)		135	YO-103	30×28・50	
098	YM-98	51×50・(90)		136	YO-103	60×40・60	
099	欠番	×		137	YN-103	30×27・78	
100	YO-100	47×45・(73)		138	YM-103	45×44・(100)	
101	YP-99	29×29・75		139	YK-103	50×45・(90)	
102	YP-100	48×・(140)	pit102→SK03	140	YK-103	80×80・83	
103	YN-100	68×62・(120)		141	YK-99	54×54・(92)	
104	欠番	×		142	YL-98	42×42・(86)	
105	YJ-99	83×83・(105)	SK(T)19→pit105	143	YL-98	56×53・(83)	
106	YJ-99	70×68・(101)		144	YM-97	50×50・(77)	
107	YJ-99	93×92・(95)	pit118→pit107	145	YL-96	57×56・91	
108	YK-99	77×75・104		146	YH-95	63×62・100	
109	YJ-98	78×73・(105)		147	YG-95	70×67・95	
110	YO-100	37×33・(104)		148	YG-95	55×54・83	
111	YO-100	29×29・(75)		149	YG-96	70×64・76	
112	YO-101	47×46・(80)	pit113→pit112	150	YE-98	56×55・70	
113	YO-101	35×・70	pit113→pit112	151	YO-97	52×52・67	
114	YN-100	36×30・(108)		152	YD-97	45×44・66	

第5表 F₄柱穴状ビット一覧表(3)

(新旧関係は旧→新で標記、記号のないものは新旧不明)

pit No	グリッド	直徑×短径・深さ (cm)	重複関係	pit No	グリッド	直徑×短径・深さ (cm)	重複関係
153	YC-97	46×45・69		172	YO-106	52×50・80	pit172→
154	YC-97	83×82・(92)		173	YM-102	62×60・95	
155	YC-98	110×・(125)		174	YN-102	38×33・75	
156	YE-98	70×69・69		175	YN-102	41×40・65	
157	YK-98	24×23・45		176	YN-102	49×・72	pit176→pit122
158	YN-101	68×62・(88)		177	YO-101	47×47・80	
159	YM-100	75×72・(125)		178	YO-101	73×・100	
160	YM-99	68×68・(130)		179	YO-101	75×・130	
161	YK-99	38×37・47	pit161→	180	YP-101	34×・46	pit180→SI03
162	YK-99	38×37・65	pit162→	181	YQ-101	26×・40	pit181→SI03
163	KJ-100	40×40・62	pit163→	182	YN-100	50×47・	
164	KJ-99	30×30・50		183	YN-100	60×55・	
165	YK-102	70×・78	pit165→SK12	184	YL-101	28×26・45	
166	KJ-102	44×43・50	SK(T)→pit166	185	YL-101	22×22・55	
167	YK-103	68×・(100)	pit167→SX(S)	186	YL-101	27×26・50	pit187→pit186
168	YI-102	52×・(100)	pit168→pit81	187	YL-101	22×22・50	pit187→pit189
169	YJ-104	27×・62	pit169→pit65	188	YL-101	23×23・55	
170	YN-105	24×24・52		189	YO-106	58×50・70	
171	YN-106	30×30・73		190	YL-100	40×38・	

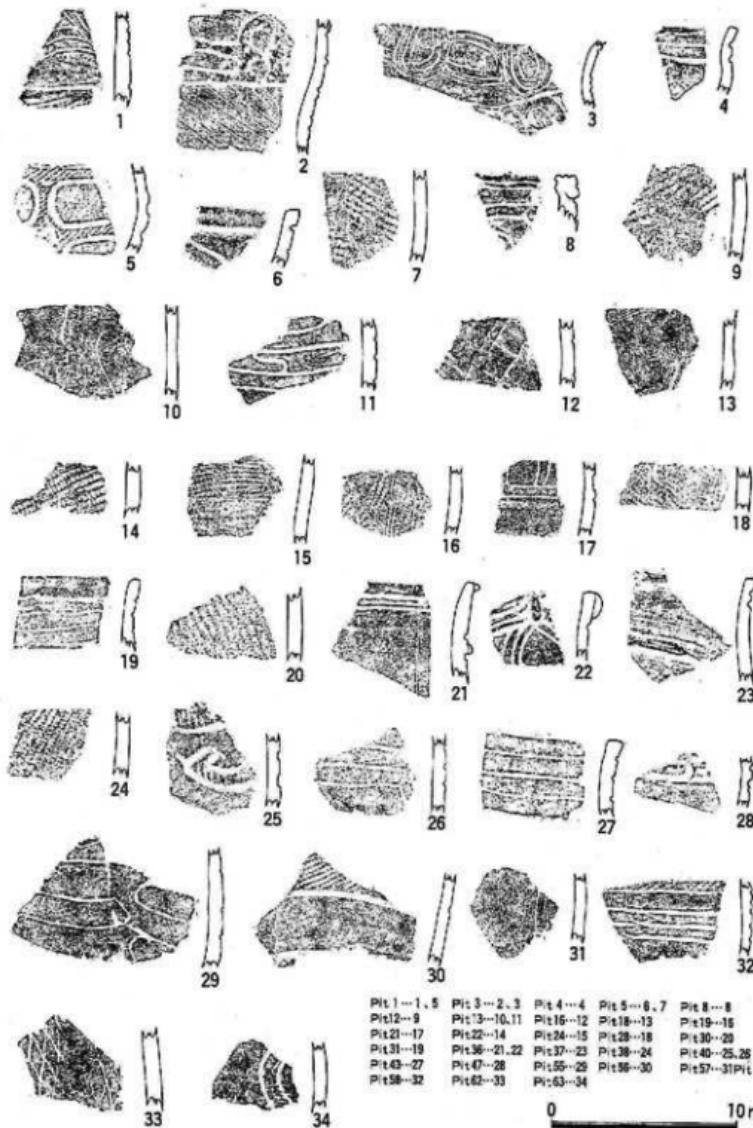
調査区南端、YC・YD-97・98グリッドに位置し、IIIb層下面を構築面とする。第10次発掘調査報告書00・第407号環状配石遺構としたもので、本調査によって全容を確認した。

環帶部は、径約670cm、環幅30cmを測り、南側に380cm×180cmの張り出し施設を有する。遺構ほぼ中央に径50cmの焼土、輪線を挟み2個一対の柱穴状ビット151~154を伴う。ビットの規模は、径45cm~83cm、深さ66cm~92cm、柱痕径20cm~29cmを測る。配石に使用される石は、拳大~64cmのもので、その石材は、石英閃緑玢岩が主体を占め、石英安山岩、凝灰岩、安山岩隕岩である。

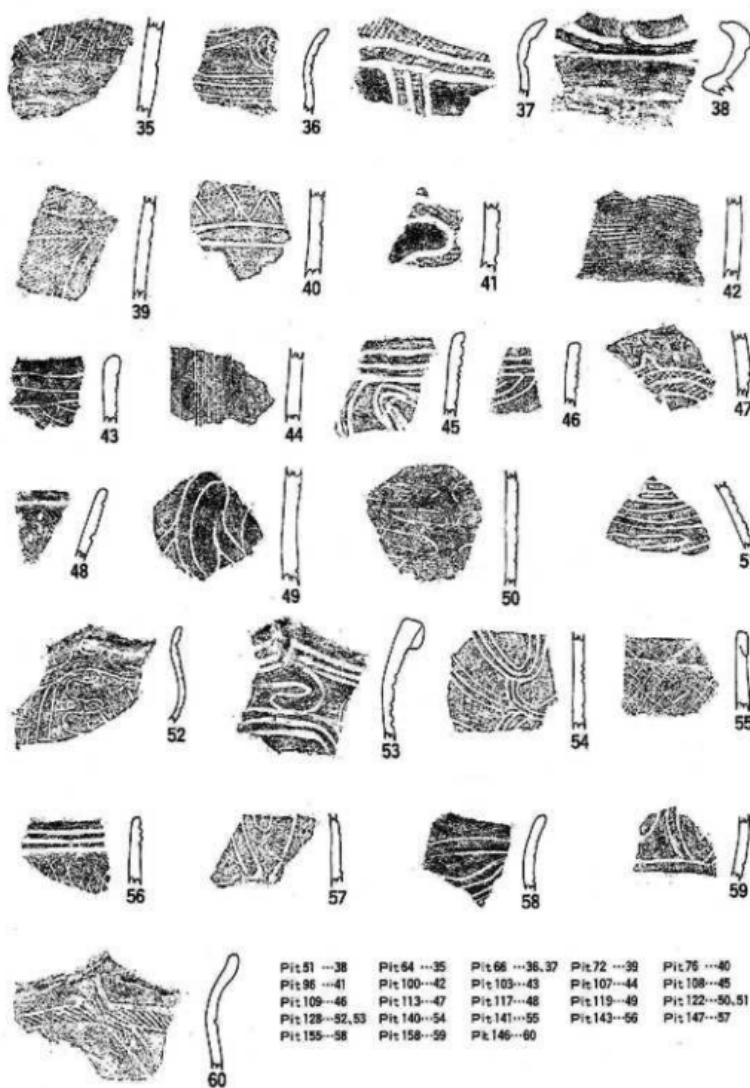
第4号環状配石遺構(第23図)

調査区中央に位置し、IIIc層下面を構築面とする。第6号建物跡、第1号環状配石遺構等多くの遺構と重複し、その新旧関係は、6号建物跡→本環状配石遺構→1号環状配石遺構である。

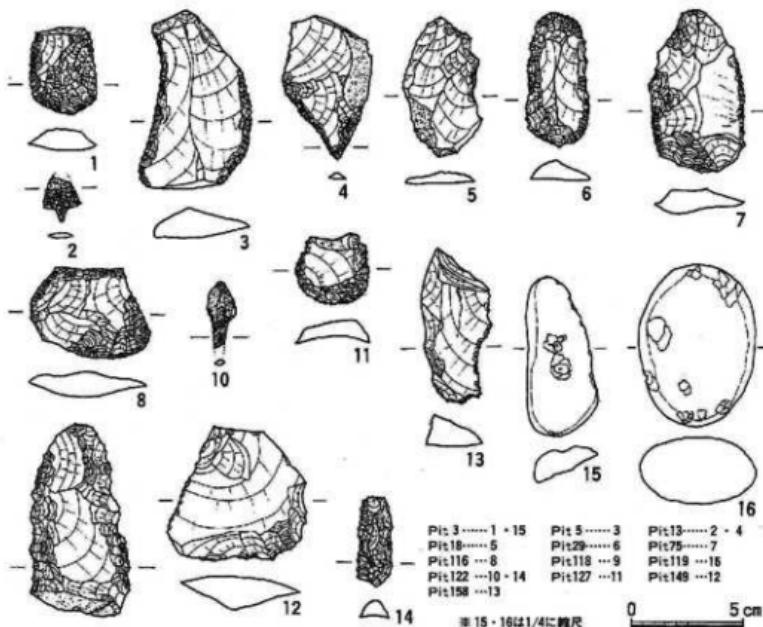
環帶部は、推定長軸28m×短軸20mを測り、梢円形を呈する。環帶は、断続する列状配石(拡大図イ・ウ)によって構成され、環内北東部に配石遺構(拡大図ア)が位置する。張り出し部は、遺構北側に構築され4m×3mを測り、規則的な石の配置をしている。張り出し部軸線上、遺構ほぼ中央に石圓炉(ア)、同軸線を挟み対応する位置に石圓炉(イ・ウ)と、環帶内側に接して配置されたビット103・130・132・134・160・183と、石圓炉(ア)より4m程離れて巡るビット123・138・158・159・174が本遺構に伴うものと考えられる。



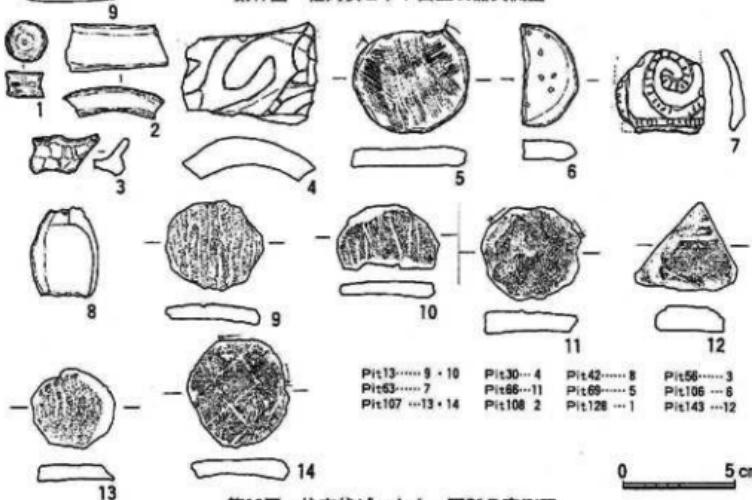
第15図 柱穴状ピット出土土器拓影図(1)



第16図 柱穴状ピット出土土器拓影図(2)



第17図 柱穴状ピット出土石器実測図



第18図 柱穴状ピット土・石製品実測図

本造構構築に使われた石の大きさは、人頭大～40cm大の扁平・柱状のもので、その石材は、石英閃綠玢岩が主体を占め、火山礫凝灰岩、緑色凝灰岩、泥質凝灰岩、凝灰質泥岩、角礫岩砂質凝灰岩、石英安山岩、安山岩、石英粗面岩が含まれる。

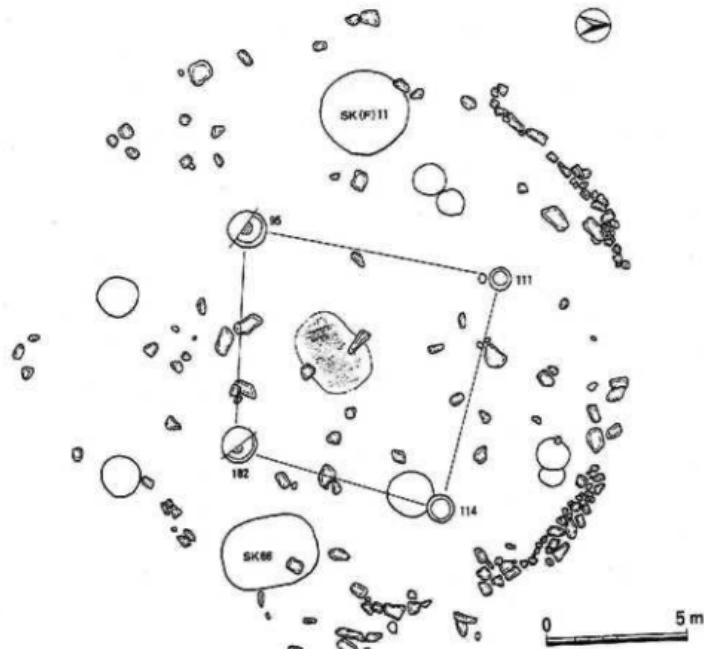
第401号環状配石造構（第24図）

本年度に追調査を実施したので、その結果を報告する。

D区北西部のYF～YC-93～95グリッドに位置する。第2号環状配石造構の南側約5mの地点に位置する。

環帶部は、径880cm、帯幅76cmで、南南東側に480cm×240cmの張り出し部を有する。配石に使用される石は、12cm～60cm大のもので、その石材は、石英閃綠玢岩が主体を占め、石英安山岩、凝灰岩等が含まれる。造構内部に3箇所の焼土が確認されている。

上記の環状配石造構の調査によって、同造構に柱穴状ビットが伴うことが判明したことから追調査を実施した。その結果、張り出し部を通る軸線を挟み2個一対の柱穴状ビット①～④を



第19図 第1号環状配石造構実測図

確認した。ピットの規模は径70cm～96cm、深さ104cm～106cm、柱痕径22cm～29cmを測る。ピット④と重複し、長軸172cm、短軸128cm、深さ53cmの土坑を確認した。

(2) 配石遺構

第5号配石遺構（第25図）

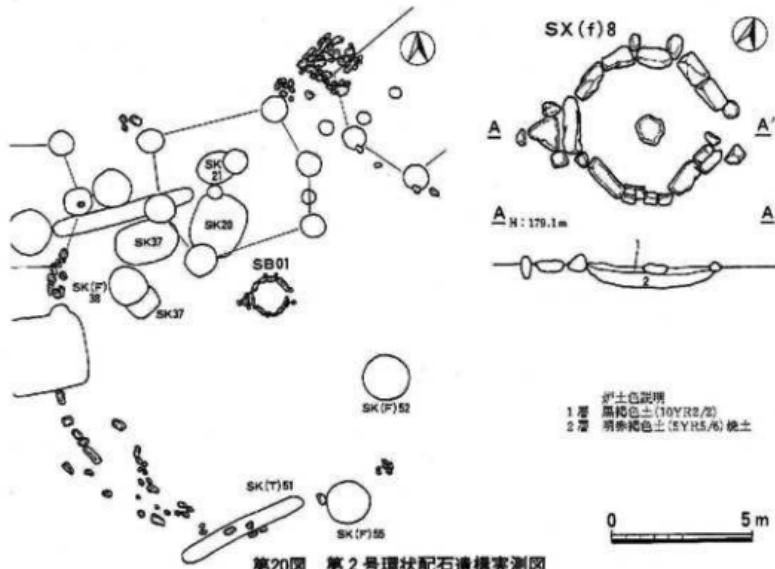
調査区西側のYN・YM-99グリッドに位置し、構築面はⅢc層である。第4号環状配石遺構と重複するが、新旧関係は不明。

配石の平面形は方形を呈し、規模180cm×170cmを測る。3辺に柱状の扁平な石を並べ、その内部に規則正しく人頭大の扁平な石を敷き並べており、環状配石遺構の張り出し部の形状に類似している。

第6号配石遺構（第25図）

調査区西側のYK-99・100グリッドに位置し、構築面はⅢc層である。第10号建物跡、第4号土坑が隣接する。

配石の平面形は円形を呈し、規模は径140cmを測る。外周に柱状の扁平な石を並べ、その内



第20図 第2号環状配石遺構実測図

部に入頭大の扁平な石を敷き並べて、配石北側に石の繋がりが見られる。環状配石遺構の張り出し部の形状に類似している。

第7号配石遺構（第25図）

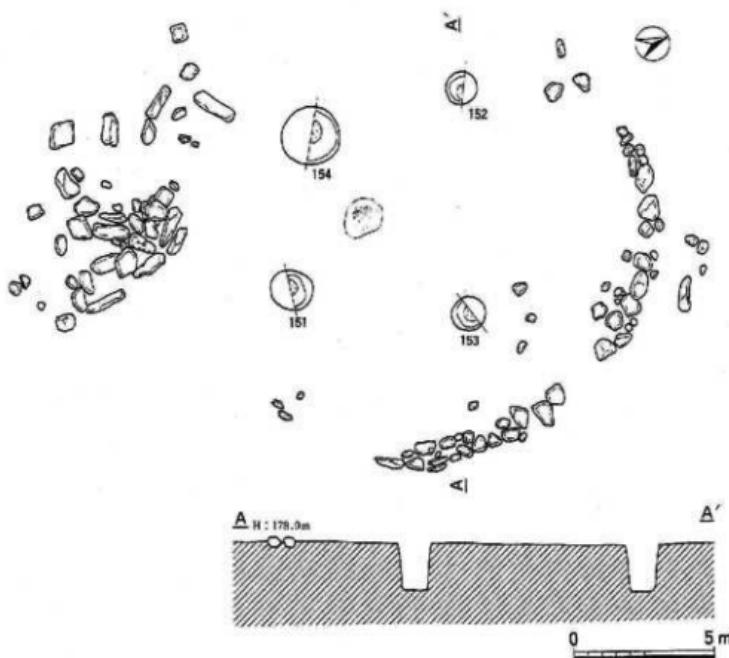
調査区東側のYE-103グリッドに位置し、遺物廃棄域に最も近い。構築面はIIIc層である。配石の平面形は梢円形を呈し、規模は径120cm×95cmを測る。石は規則的に配置され、南側に2個の石の突出が見られる。環状配石遺構の張り出し部の形状に類似している。

第8号配石遺構（第25図）

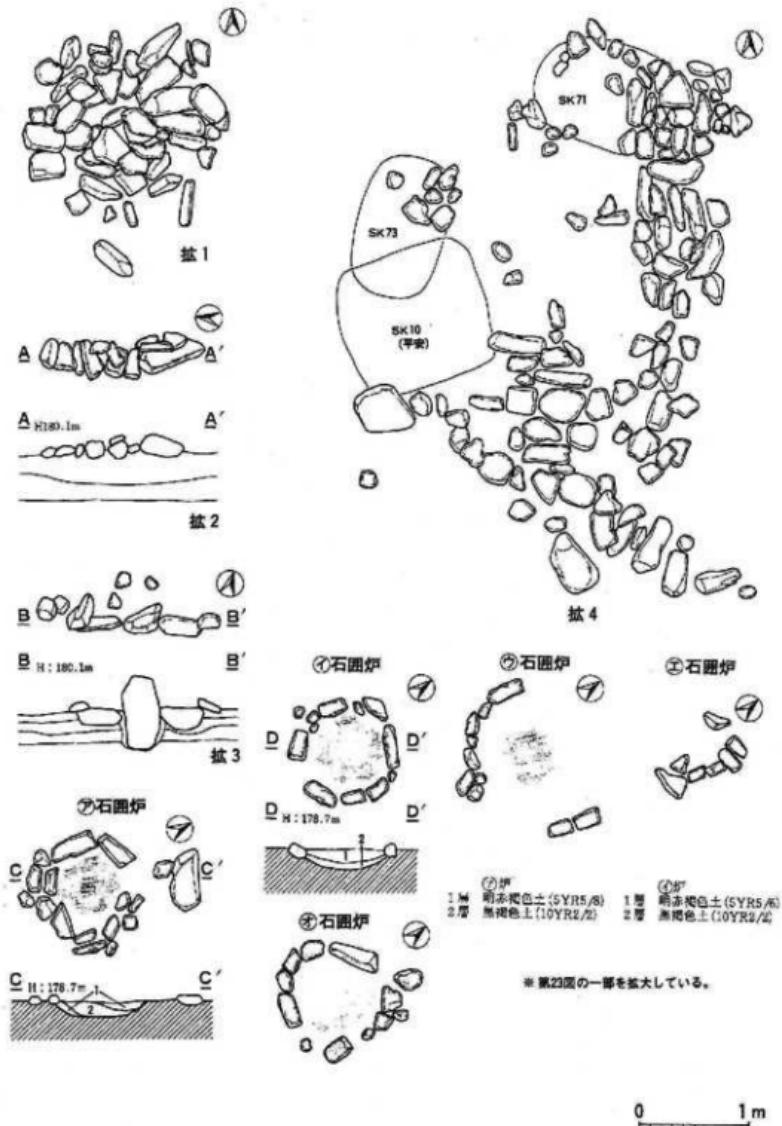
調査区中央のYM・YL-100グリッドに位置し、構築面はIIIc層である。第4号環状配石遺構と重複するが、新旧関係は不明。

配石の平面形は円形を呈し、規模は径80cmを測る。石は雄然としているが、東側に2個の石の連なりが見られる。環状配石遺構の張り出し部の形状に類似している。

第9号配石遺構（第25図）

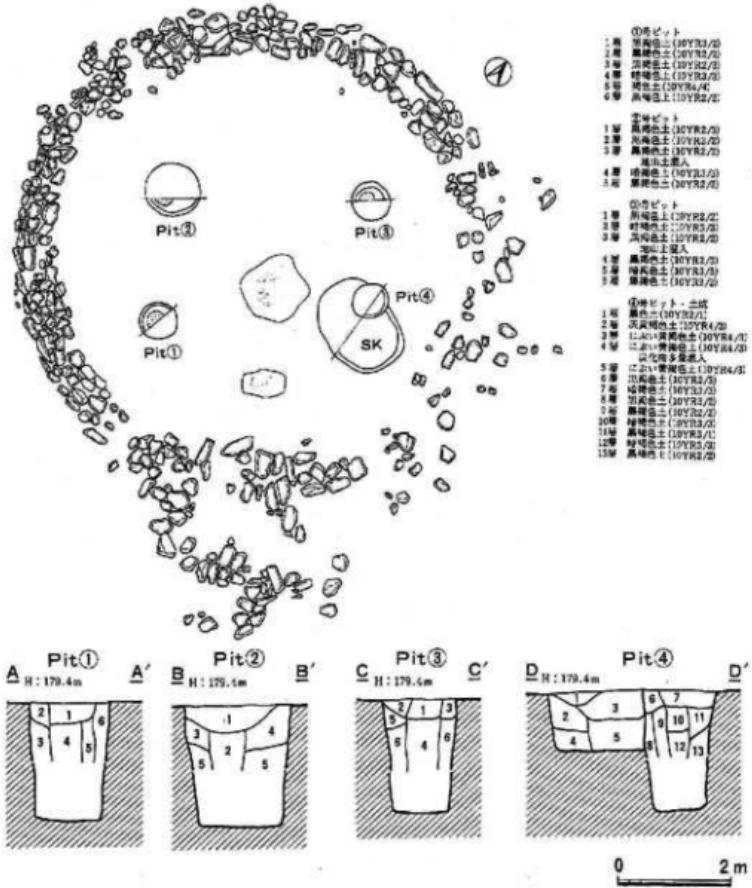


第21図 第3号環状配石遺構実測図



第22図 第4号環状配石造構実測図(1)





第24図 第401号環状配石遺構実測図

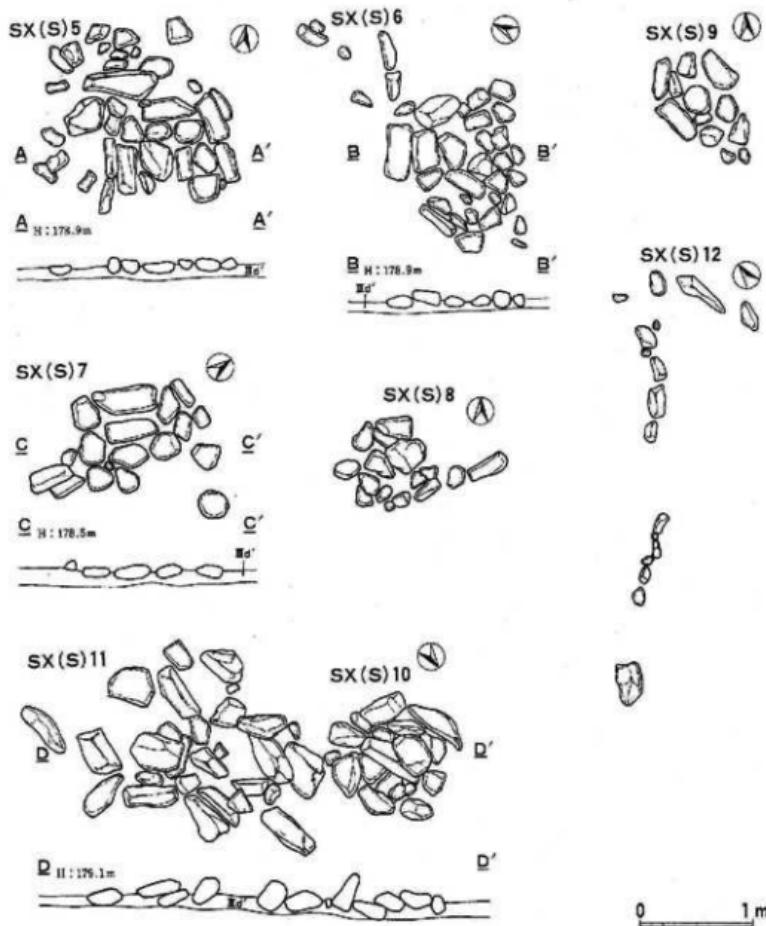
調査区東側のY G・Y F-101グリッドに位置し、構築面はⅢc層である。配石の平面形は梢円形を呈し、規模は径 120cm×75cmを測る。外周に扁平でやや大きめの石配置している。

第10号配石遺構（第25図）

調査区南西部のY K-95グリッドに位置し、Ⅲc層を構築面とする。第12号配石遺構が近接する。配石の平面形は円形を呈し、径110cm×120cmを測る。外周に大型の石を巡らし、その内部に扁平又は柱状の石を積み重ねている。

第11号配石造構（第25図）

調査区南西部のY K-95グリッドに位置し、IIIc層を構築面とする。第10号配石造構が近接する。擾乱のため配石形態は不明。位置の移動していない石を観察すると10号配石造構と同一形態と考えられる。



第25図 第5号～12号配石造構実測図

第12号配石遺構（第25図）

調査区南東部のYM-95・96グリッドに位置し、IIIc層を構築面とする。拳大～35cm大の円礫・扁平な石を列状に配置している。

（藤井安正）

3. 石圓炉

第2号石圓炉（第26図）

調査区北側のYP-104グリッドに位置し、IIId層上面を構築面とする。10cm～20cm大の円礫を径70cmの円形に配置したもので、炉内中央に径30cmの焼土を確認した。

第3号石圓炉（第26図）

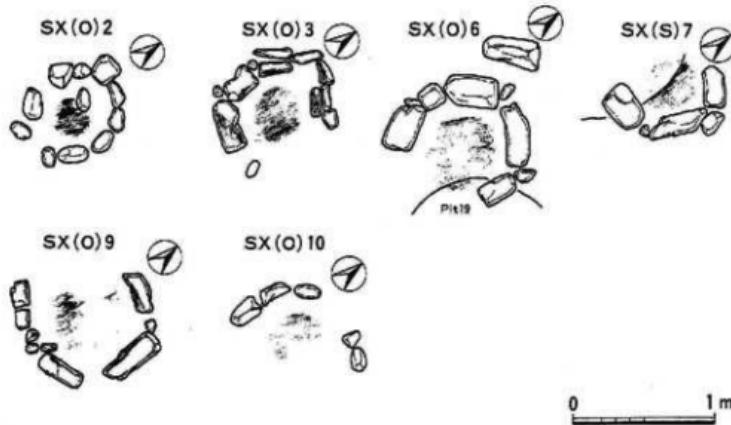
調査区北西部のYP-100グリッドに位置し、IIId層上面を構築面とする。拳大～35cm大の円礫や扁平な石を方形に配置したもので、炉内中央に30cm×40cmの焼土を確認した。

第6号石圓炉（第26図）

調査区中央よりやや北東よりのYJ-103グリッドに位置し、IIId層上面を構築面とする。ピット19と重複し、本遺構が新しい。炉南側は崩壊しているが12cm～38cm大の扁平な石を径104cmの円形に配置したもので、炉内に50cm×60cmの焼土を確認した。

第7号石圓炉（第26図）

調査区中央よりやや北東よりのYI-102グリッドに位置し、IIId層上面を構築面とする。第22号フ拉斯コ状土坑と重複し、本遺構が新しい。炉西側は崩壊しているが5cm～44cm大の円礫



第26図 石圓炉実測図

や扁平な石を径104cmの円形に配置したもので、炉内に径50cmの焼土を確認した。

第9号石圓炉（第26図）

調査区南西部のY D-99グリッドに位置し、IIIc層上面を構築面とする。炉西側は崩壊している。10cm～45cm大の扁平な石を径100cmの円形に配置し、が中央に径50cm程の焼土を確認した。

第10号石圓炉（第26図）

調査区中央より南側のY G-98グリッドに位置し、IIIc層を構築面とする。崩壊しているが30cm大の石を円形に配置している。炉中央に径40cm程の焼土を確認した。（柳沢和仁）

4. 焼土遺構

第1号焼土遺構（第27図）

調査区北西部のY Q-100グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は40cm×50cmである。

第2号焼土遺構（第27図）

調査区北西部のY P-100グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は40cm×43cmである。ピット99と重複し、本遺構が新しい。

第3号焼土遺構（第27図）

調査区北西部のY P-100グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は50cmである。ピット126、第3号土坑と重複し、新旧関係はピット126→本遺構→3号土坑である。

第5号焼土遺構（第27図）

調査区北西部のY O-99グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は74cm×85cmである。

第6号焼土遺構（第27図）

調査区西部のY N-98グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は66cm×80cmである。

第7号焼土遺構（第27図）

調査区西部のY M-98グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は95cmである。

第8号焼土遺構（第27図）

調査区北西部のY P-102グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は55cm×84cmである。

第9号焼土遺構（第27図）

調査区北部のY P-104グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は34cm×38cmである。

第10号焼土遺構（第27図）

調査区北部のY O-105グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は75cm×97cmである。

第11号焼土遺構（第27図）

調査区北部のY N-106グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は40cm×55cmである。

第12号焼土遺構（第27図）

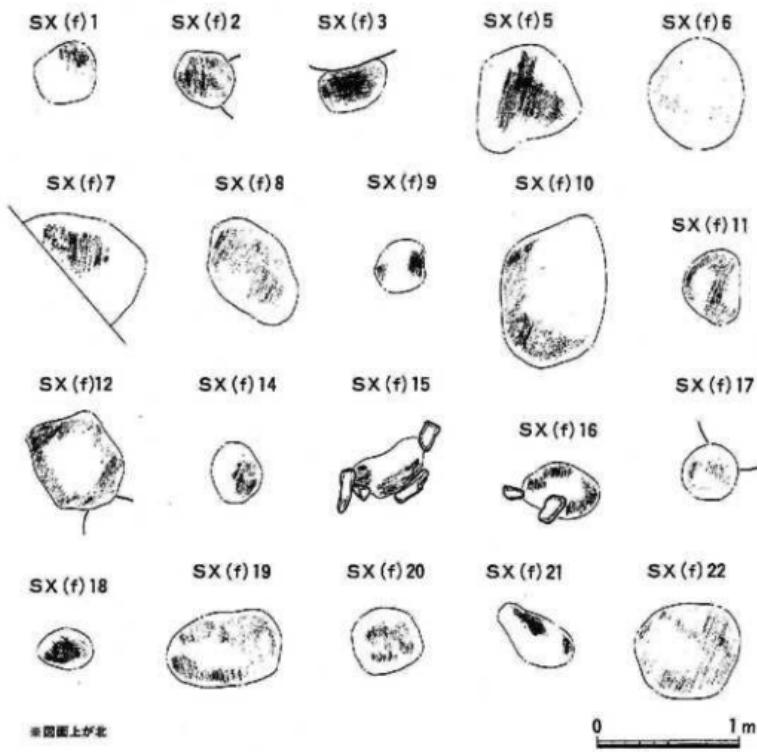
調査区北西部のY J-103グリッド、Ⅲc層で確認。焼土範囲は60cm×70cmである。ピット33と重複し、本遺構が新しい。

第14号焼土遺構（第27図）

調査区北西部のY J-102グリッド、Ⅲc層で確認。焼土範囲は35cm×45cmである。第5号建物跡と重複し、新旧不明。

第15号焼土遺構（第27図）

調査区中央部のY J-100グリッド、Ⅲc層で確認。焼土範囲は32cm×60cmである。第1号建物跡と重複し、新旧不明。



第27図 焼土遺構実測図

第16号焼土遺構（第27図）

調査区中央部のY J - 101グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は39cm×55cmである。

第17号焼土遺構（第27図）

調査区ほぼ中央のY I - 103グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は40cm×41cmである。ピット2と重複し、本遺構が新しい。

第18号焼土遺構（第27図）

調査区南側のY F - 100グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は29cm×40cmである。

第19号焼土遺構（第27図）

調査区南側のY E - 98グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は53cm×81である。

第20号焼土遺構（第27図）

調査区南側のY E - 99グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は47cm×48cmである。

第21号焼土遺構（第27図）

調査区南側のY C - 98・99グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は34cm×59cmである。

第22号焼土遺構（第27図）

調査区ほぼ中央部のY J - 100グリッド、IIIc層で確認。焼土範囲は72cm×74cmである。

(柳沢和仁)

5. 土坑

(1) Tピット

第8号Tピット（第29図、30図1・3）

調査区北西部のYO・YP - 101・102グリッド、第4号堅穴住居跡床面で確認した。第9号 フラスコ状土坑とも重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。

規模は、長軸419cm×短軸63cm、深さ156cmを測り、長軸方向はN - 5° Wである。長軸断面形はフラスコ状を呈する。

第19号Tピット（第29図）

調査区中央よりやや南側のY I・Y J - 99・100グリッド、第III d層上面で確認した。第37号土坑、ピット3と重複し、その新旧関係は本遺構が最も古い。

規模は、長軸412cm×短軸51cm、深さ88cmを測り、長軸方向はN - 64° Eである。長軸断面形は逆台形を呈する。

第29号Tピット（第29図）

調査区北西側のYP - 101グリッド、第III d層上面で確認した。遺構上面には多数の礫が乗っている。

規模は、長軸381cm×短軸117cm、深さ169cmを測り、長軸方向はN-71°Eである。長軸断面形は逆台形を呈する。遺構内より網文後期土器破片32点が出土した。

第30号Tピット（第29図）

調査区西側のYN-98・99グリッド、第Ⅲd層上面で確認した。ピット86と重複し本遺構が古い。遺構東側上面には多数の礫が乗っている。

規模は、長軸432cm×短軸87cm、深さ（推定）138cmを測り、長軸方向はN-80°Eである平面形は屈曲した長辺円形で、長軸断面形は逆台形を呈する。

第36号Tピット（第29図、30図2）

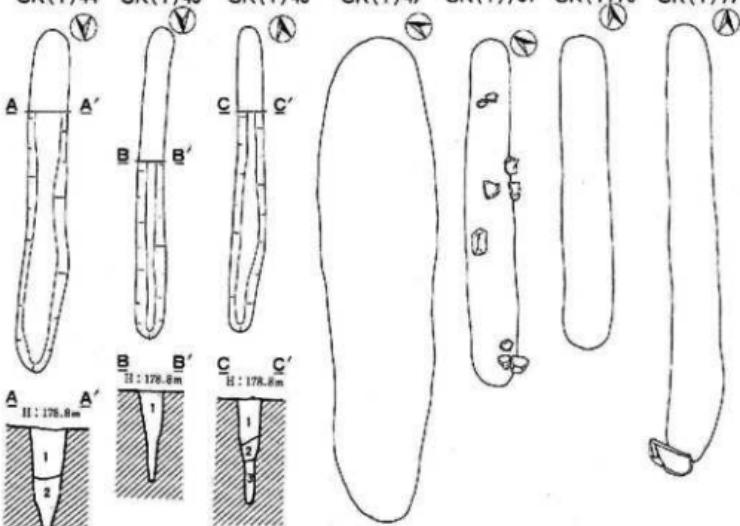
調査区西側のYM・YN-98グリッド、第Ⅲd層上面で確認した。ピット115と重複し、本遺構が古い。規模は、短軸113cm、深さ（推定）123cmを測り、長軸方向はN-81°Eである。長軸断面形は逆台形を呈する。

第43号Tピット（第29図）

調査区南西側のYK-96グリッド、第Ⅲd層上面で確認した。

規模は、長軸325cm×短軸47cm、深さ119cmを測り、長軸方向はN-19°Wである。長軸断面

SK(T)44 SK(T)45 SK(T)46 SK(T)47 SK(T)51 SK(T)76 SK(T)77



第28図 T-ピット実測図(1)

形は逆台形を呈する。

第44号Tピット(第28図)

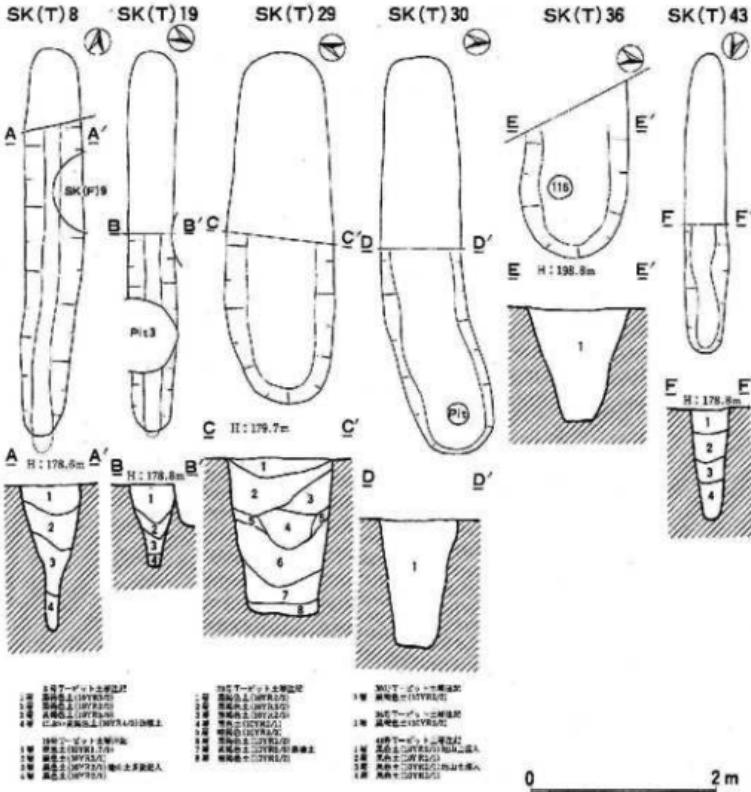
調査区南西側のY J - 96・97グリッド、第III d層上面で確認した。

規模は、長軸319cm×短軸50cm、深さ(推定)119cmを測り、長軸方向はN-8° Eである。長軸断面形は逆台形を呈する。

第45号Tピット(第28図)

調査区南西側のY J - 96・97グリッド、第III d層上面で確認した。

規模は、長軸337cm×短軸32cm、深さ95cmを測り、長軸方向はN-7° Eである。長軸断面形は逆台形を呈する。



第29図 T-ピット実測図(2)

第46号Tピット（第28図）

調査区南西側のY J-97グリッド、第III d層上面で確認した。

規模は、長軸330cm×短軸35cm、深さ113cmを測り、長軸方向はN-12° Eである。長軸断面形は逆台形を呈する。

第47号Tピット（第28図）

調査区南西側のY I-96・97グリッド、第III d層上面で確認した。

規模は、長軸520cm×短軸125cmを測り、長軸方向はN-70° Eである。長軸断面形は逆台形を呈する。

第51号Tピット（第28図）

調査区南西側のY H-98・99グリッド、第III d層上面で確認した。第3号環状配石遺構と重複し、本遺構が古い。

規模は、長軸375cm×短軸54cmを測り、長軸方向はN-55° Eである。

第76号Tピット（第28図）

調査区南西側のY K-97・98グリッド、第III d層上面で確認した。

規模は、長軸339cm×短軸54cmを測り、長軸方向はN-Sである。

第77号Tピット（第28図）

調査区南西側のY O-102・103グリッド、第III d層上面で確認した。

規模は、長軸472cm×短軸53cmを測り、長軸方向はN-Sである。

（藤井安正）

(2) フラスコ状土坑

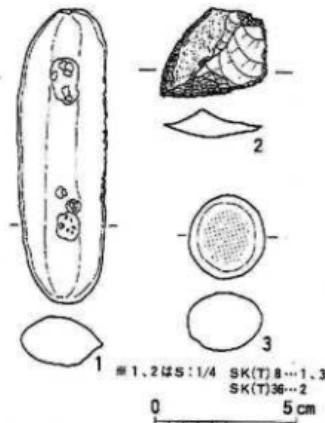
第1号フラスコ状土坑（第31図）

調査区北部のY N-108グリッド、第1号堅穴住居跡床面において確認した。重複のため遺構上半を欠く。底部径90cm、住居床面からの深さ100cmを測る。底部中央において径15cm、深さ30cmのピットを確認した。堆積土は9ブロックに区分され人為堆積である。

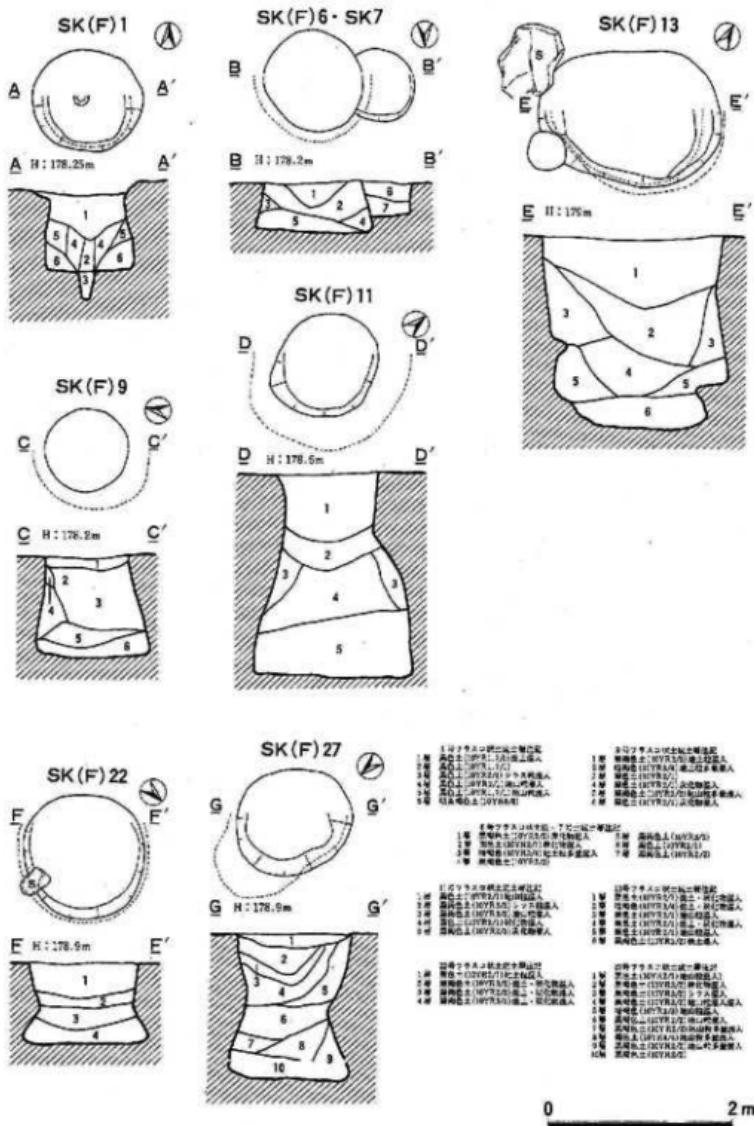
土坑内より遺物は出土しなかった。

第6号フラスコ状土坑（第31図）

調査区北西部のY O・Y P-102グリッド、第4号堅穴住居跡床面で確認した。第7号土坑とも重複しており、新旧関係は7号土坑→本土坑→4号住居跡である。重複のため土坑上半



第30図 T-ピット出土石器実測図



第31図 フラスコ状土壤実測図(1)

を欠く。底部径126cm、住居床面からの深さ53cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より遺物は出土しなかった。

第9号フラスコ状土坑（第31図、38図1）

調査区西北部のY P-102グリッド、第4号堅穴住居跡床面で確認した。第19号Tピットとも重複している。新旧関係は19号Tピット→本土坑→4号住居跡である。重複のため土坑上半を欠く。底部径127cm、住居床面からの深さ99cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より、地文を主体とした縞文後期前葉の土器破片が出土した。

第11号フラスコ状土坑（第31図、34図1・2、38図2）

調査区西部のY O-99グリッド、IIIc層上面で確認した。第1号環状配石造構と重複し、本造構が古い。

口縁部径103cm×118cm、底部径170cm、深さ220cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より、復元土器2点、後期前葉～中葉の土器破片159点、石器2点、石製品（軽石製品）1点が出土した。復元土器1は、鉢形でLR縞文が施文されている。色調はにぶい黄橙色を呈する。2は壺で、F1区・第419A号フラスコ状土坑から出土したものとの接合資料である。文様帶は、胴部下半において直線的な山形文が描かれ、沈線間にはLR縞文が充填されている。色調はにぶい黄橙色を呈する。

第13号フラスコ状土坑（第31図、38図3・14・15・21・24）

調査区中央のY J-102グリッド、IIIc層上面で確認した。第5号建物跡と重複する。出土遺物から新旧関係は、本土坑→5号建物跡である。

口縁部径146cm×197cm、底部径180cm、深さ204cmを測る。堆積土は8ブロックに区分され人為堆積である。

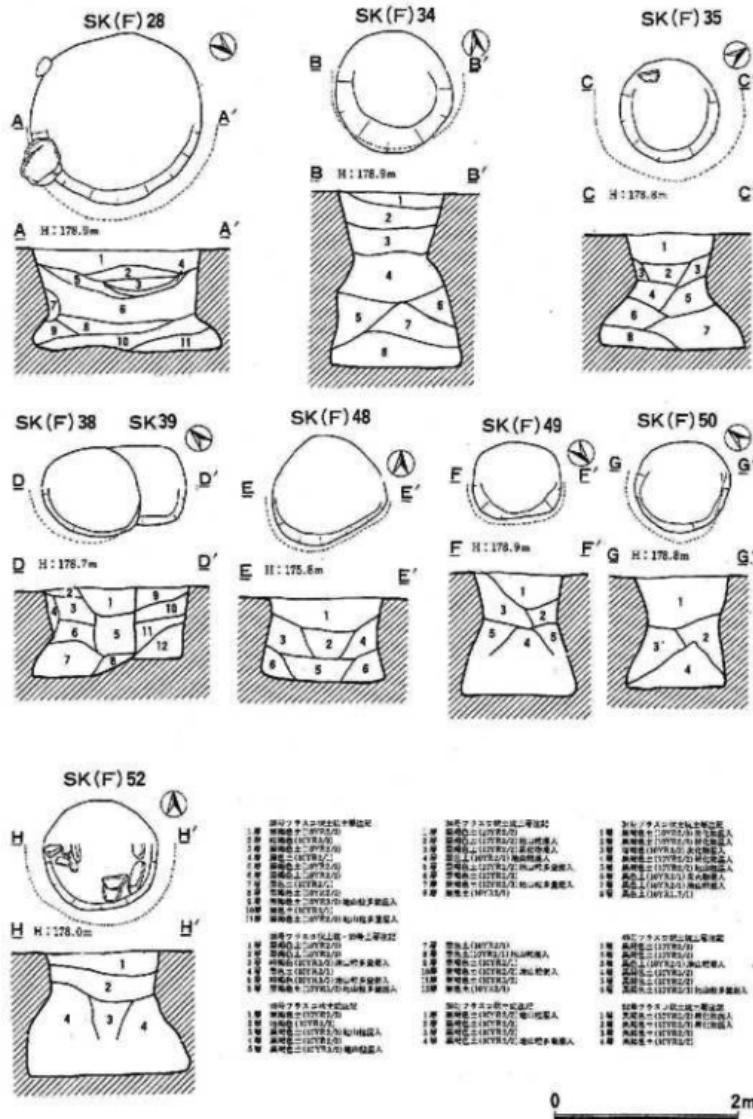
土坑内よりミニチュア土器1点、後期前葉～中葉の土器破片209点、石器3点、石製品5点（円形石製品・軽石製品）が出土した。

第22号フラスコ状土坑（第31図）

調査区中央のY J-102グリッド、IIIc層上面で確認した。第7号石窯と重複する。新旧関係は、本土坑→7号石窯である。

口縁部径130cm×133cm、底部径140cm、深さ88cmを測る。堆積土は8ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より、後期前葉～中葉の土器破片50点が出土している。



第32図 フラスコ状土壇実測図(2)

第27号フラスコ状土坑（第31図、34図3・5・7、38図4・13・17・20）

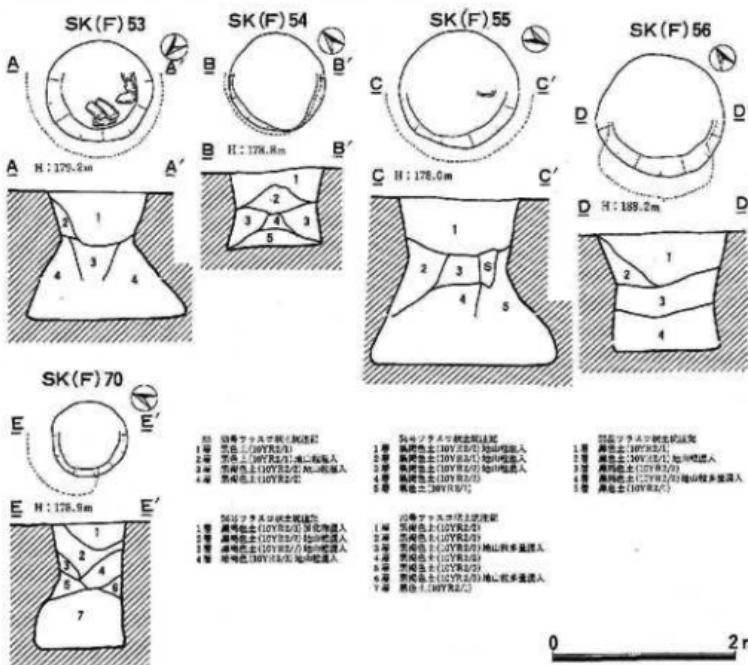
調査区中央のY I - 101グリッド、Ⅲc層上面で確認した。第2号建物跡と重複する。出土遺物から新旧関係は、本土坑→2号建物跡である。

口縁部径103cm×130cm、底部推定径126cm、深さ（推定）156cmを測る。掘り込みは歪で「長靴」状を呈する。堆積土は10ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より、復元土器2点、後期前葉～中葉の土器破片50点、石器8点、石製品1点が出土した。3は波状口縁を呈する深鉢で、文様を胴部上半に持つ。4条の沈線により区画された文様帶には橢円形文が描かれており、LR縞文・刺突文が充填されている。色調は、にぶい橙色を呈する。7は深鉢で、胴部上半に文様帶をもち、斜位の3条の沈線で山形文が施文されている。色調はにぶい黄褐色を呈する。

第28号フラスコ状土坑（第32図、38図6・16・18）

調査区東部のY H - 102グリッド、Ⅲc層上面で確認した。



第33図 フラスコ状土壌実測図(3)

口縁部径152cm×158cm、底部径205cm、深さ110cmを測る。堆積土は10ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より、後期前葉～中葉の土器破片156点、石器4点、石製品1点が出土した。

第34号フラスコ状土坑（第32図、34図68、38図5）

調査区東部のY K・Y L-103グリッド、Ⅲd層上面で確認した。

口縁部径124cm×131cm、底部径142cm、深さ178cmを測る。堆積土は8ブロックに区分され人為堆積である。堆積土上位より扁平な石2個が出土した。

土坑上位より、後期前葉の復元土器2点、土器破片263点、石器1点が出土した。6は、土坑上位より出土した頭部が極めて細い壺で、胴部過半まで文様帶がおよぶ。精円形文により区画された文様帶にはS字文・曲線文が施文されている。器前面に赤色顔料が塗布されている。8は無文の鉢で、色調はにぼい褐色を呈する。

第35号フラスコ状土坑（第32図、38図7・19・25）

調査区西部のY M-99グリッド、Ⅲd層上面で確認した。

口縁部径108cm×111cm、底部径162cm、深さ125cmを測る。堆積土は9ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片190点、石器2点、土器片利用土製品1点が出土した。

第38号フラスコ状土坑（第32図）

調査区中央より南側のY I-99グリッド、Ⅲd層上面で確認した。第37号土坑と重複し本遺構が新しい。口縁部径98cm×105cm、底部径118cm、深さ97cmを測る。堀り込みは「長靴」状を呈する。堆積土は9ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片10点が出土した。

第48号フラスコ状土坑（第32図、34図4、38図8・24）

調査区南西部のY J-95・96グリッド、Ⅲd層上面で確認した。

口縁部径112cm×123cm、底部径136cm、深さ91cmを測る。堆積土は7ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の復元土器1点、土器破片102点、石器1点、土器片利用土製品1点が出土した。

第49号フラスコ状土坑（第32図）

調査区南西部のY I・Y J-95・96グリッド、Ⅲd層上面で確認した。

口縁部径95cm×84cm、底部推定径105cm、深さ（推定）132cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片20点が出土した。



第34図 フラスコ状土壙出土土器実測図

第50号フラスコ状土坑（第32図）

調査区南西部のY H・Y I-96グリッド、III d層上面で確認した。

口縁部径100cm×103cm、底部径107cm、深さ122cmを測る。堆積土は4ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片76点、土器片利用土製品1点が出土した。

第52号フラスコ状土坑（第32図、37図48・49）

調査区南西部のY G・Y H-100グリッド、III d層上面で確認した。第3号環状配石遺構と重複し、本遺構が古い。

口縁部径117cm×123cm、底部推定径175cm、深さ（推定）132cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され人為堆積である。土坑中位から20cm～40cm大の礫9個が出土した。

土坑内より後期前葉の土器破片96点が出土した。

第53号フラスコ状土坑（第33図、37図50・51、38図9）

調査区南東端部のY D-100グリッド、III d層上面で確認した。

口縁部径107cm×115cm、底部径（推定）170cm、深さ（推定）137cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され人為堆積である。土坑中位から20cm～40cm大の礫6個が出土した。

土坑内より後期前葉～中葉の土器破片75点、石器1点が出土した。

第54号フラスコ状土坑（第33図）

調査区南西部のY I-96グリッド、III d層上面で確認した。

口縁部径104cm×108cm、底部径104cm、深さ81cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片31点が出土した。

第55号フラスコ状土坑（第33図、37図54、38図11・22・23・26）

調査区中央より南東側のY I-96グリッド、III d層上面で確認した。

口縁部径128cm×130cm、底部推定径203cm、深さ（推定）182cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され人為堆積である。

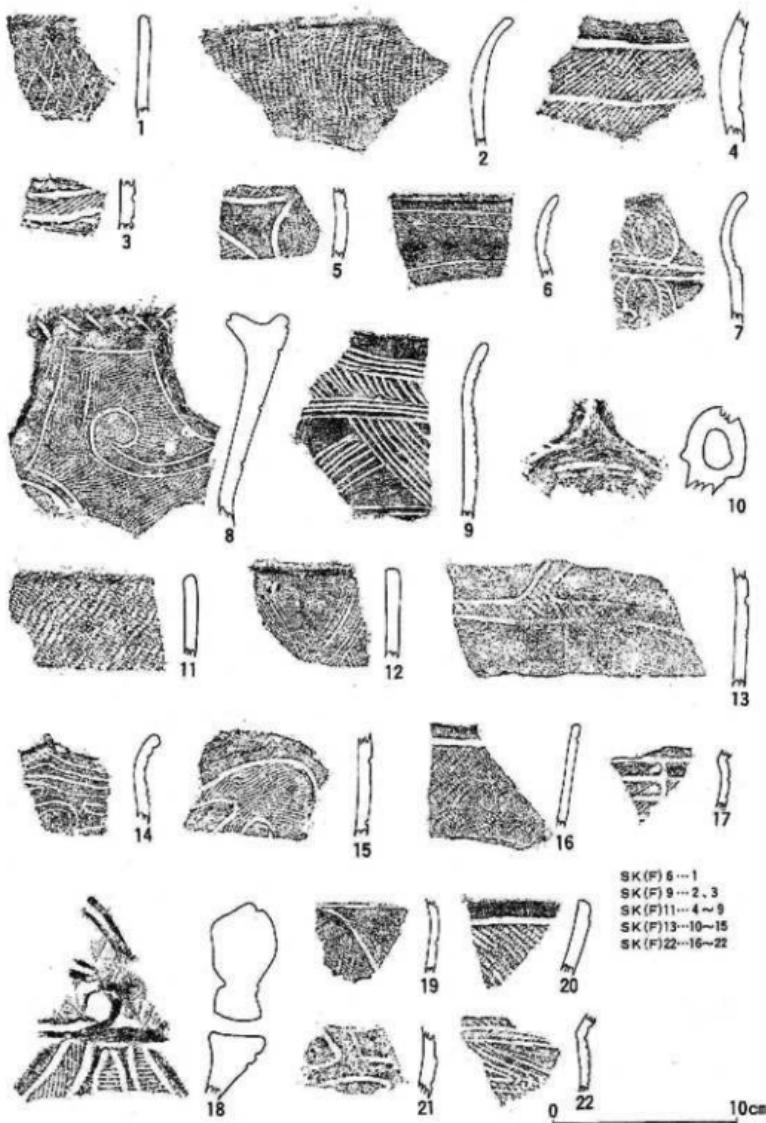
土坑内より後期前葉の土器破片149点、石器5点、耳栓1点、土器片利用土製品1点が出土した。

第56号フラスコ状土坑（第33図）

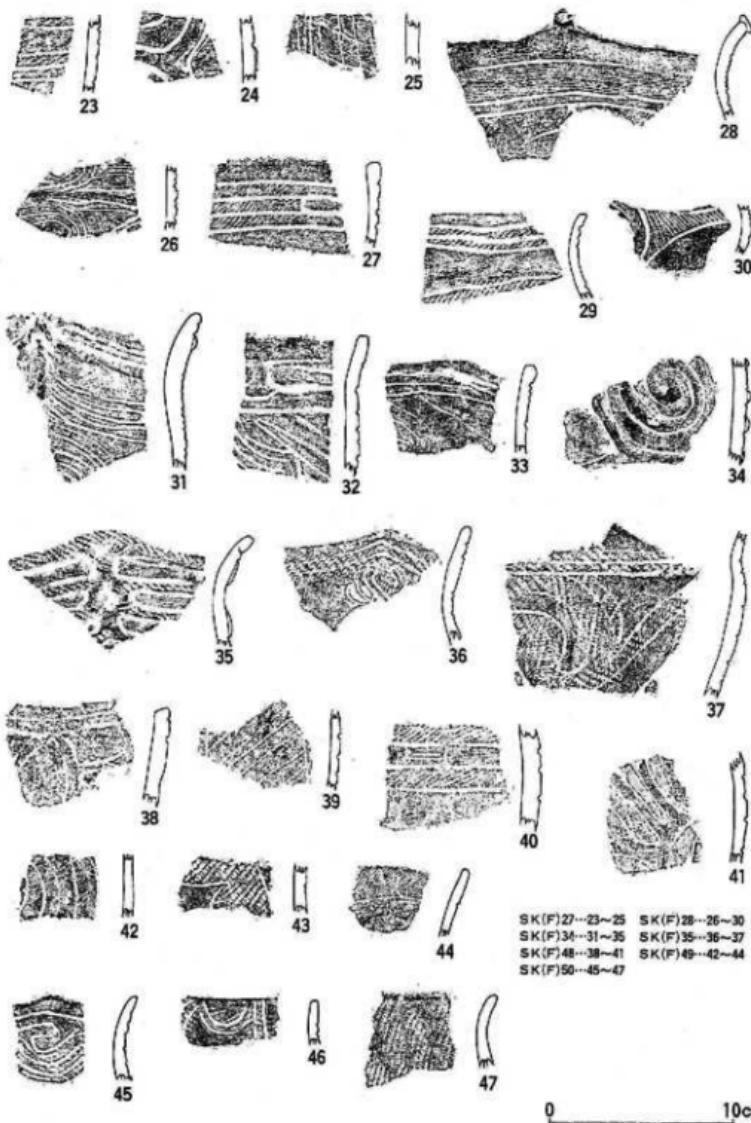
調査区南東端のY E-99グリッド、III d層上面で確認した。

口縁部径134cm×135cm、底部推定径118cm、深さ（推定）127cmを測る。堆積土は4ブロックに区分され人為堆積である。

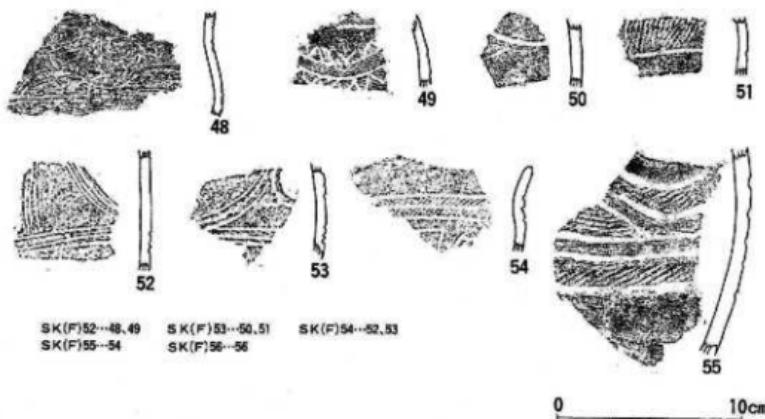
土坑内より、後期前葉の土器破片231点出土した。



第35図 フラスコ状土坑出土土器拓影図(1)



第36図 フラスコ状土坑出土土器拓影図(2)



第37図 フラスコ状土坑出土土器拓影図(3)

第70号フラスコ状土坑（第33図、38図10）

調査区南東端部のY E-99グリッド、Ⅲd層上面で確認した。

口縁部径80cm×82cm、底部推定径100cm、深さ（推定）133cmを測る。堆積土は4ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片19点出土した。

（藤井安正）

(3) 土坑

第7号土坑（第38図、41図1～2）

調査区北西部のY P-102グリッド、第4号堅穴住居跡床面で確認した。第6号フラスコ状土坑と重複し、本遺構が古い。

平面形は円形を呈し、径77cm、床面からの深さ38cmを測る。堆積土は単一である。

土坑内より後期前葉の土器破片13点、石器1点が出土した。

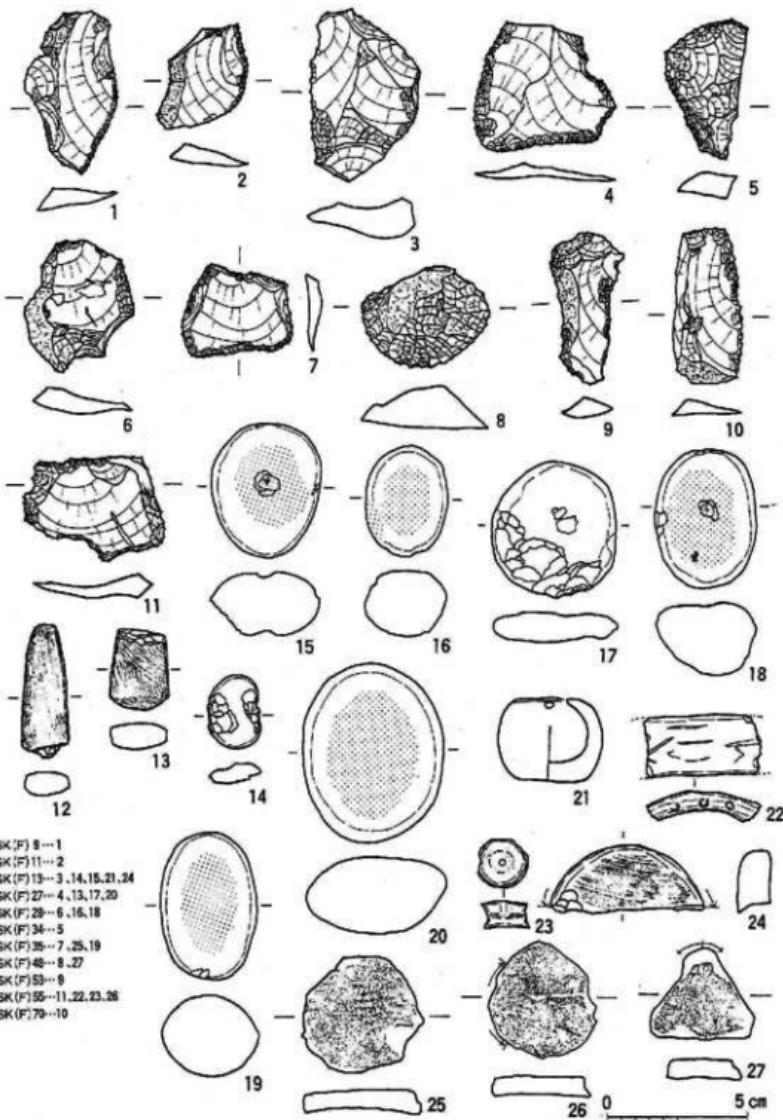
第15号土坑（第39図）

調査区中央部のY J-101グリッド、Ⅲd層上面で確認した。ピット25・47と重複し、本土坑が古い。

平面形は円形を呈し、径85cm×93cm、深さ66cmを測る。堆積土は2ブロックに区分され人為堆積である。土坑底面は方形を呈する。

土坑内より後期前葉の土器破片10点出土した。

第16号土坑（第39図、42図1）



第38図 フラスコ状土坑出土物実測図

調査区中央部のY J-101グリッド、III d層上面で確認した。ピット26・27と重複し、本土坑が古い。

平面形は楕円形を呈し、径117cm×105cm、深さ77cmを測る。土坑長軸方向はN-37°-Wである。堆積土は4ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より石鐵1点が出土した。

第20号土坑（第39図、41図5～6、42図8）

調査区中央部のY I-100グリッド、III d層上面で確認した。ピット5・190と重複し、本土坑が古い。

平面形は楕円形を呈し、径175cm×149cm、深さ70cmを測る。土坑長軸方向はN-12°-Wである。堆積土は、5ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より石皿1点が出土した。

第21号土坑（第39図、41図3～4）

調査区中央部のY I-100グリッド、III d層上面で確認した。ピット7と重複し、本土坑が古い。平面形は楕円形を呈し、径113cm×84cm、深さ60cmを測る。土坑長軸方向はN-56°-Eである。堆積土は4ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片5点出土した。

第24号土坑（第39図、41図7）

調査区中央部のY K-103グリッド、III d層上面で確認した。ピット28と重複し、本土坑が古い。平面形は楕円形を呈し、径135cm×98cm、深さ63cmを測る。土坑長軸方向はN-7°-Eである。堆積土は2ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片3点出土した。

第26号土坑（第39図、41図8）

調査区北側のY N-105グリッド、III d層上面で確認した。

平面形は楕円形を呈し、径122cm×87cm、深さ53cmを測る。土坑長軸方向はN-56°-Eである。堆積土は8ブロックに区分され人為堆積である。

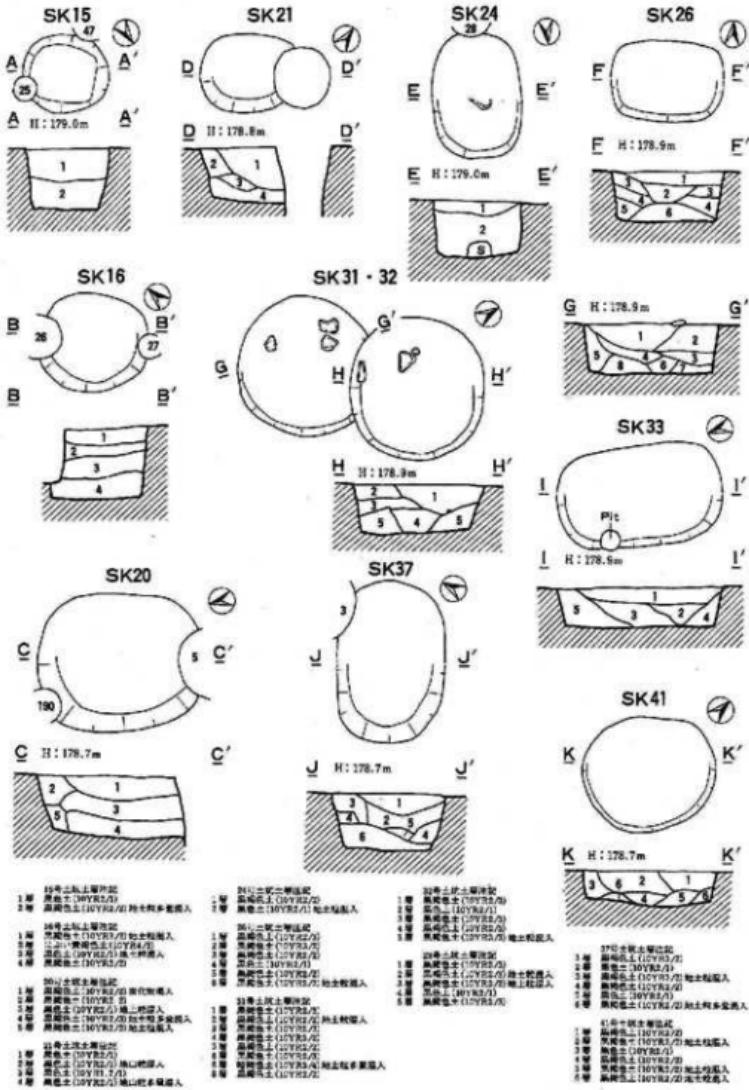
土坑内より後期前葉の土器破片3点が出土した。

第31号土坑（第39図、41図11～12）

調査区北部のY L-106グリッド、III d層上面で確認した。第32号土坑と重複し本遺構が古い。

平面形は円形を呈し、径152cm×145cm、深さ54cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片57点が出土した。



第39図 土坑実測図(1)

第32号土坑（第39図、41図13～14）

調査区北部のY L-106グリッド、III d層上面で確認した。第31号土坑と重複し本遺構が新しい。平面形は円形を呈し、径154cm×145cm、深さ54cmを測る。堆積土は8ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片28点が出土した。

第33号土坑（第39図、41図15～16、42図2）

調査区北部のY N-105グリッド、III d層上面で確認した。ピット170と重複し本遺構が古い。平面形は梢円形を呈し、径180cm×109cm、深さ43cmを測る。土坑長軸方向はN-11°-Eである。堆積土は6ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片8点、石器1点が出土した。

第37号土坑（第39図、41図17～18、42図7）

調査区北部のY I-99グリッド、III d層上面で確認した。ピット3と重複し本遺構が古い。平面形は梢円形を呈し、径157cm×117cm、深さ62cmを測る。土坑長軸方向はN-61°-Eである。堆積土は7ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片18点、石器1点が出土した。

第41号土坑（第39図、41図20・22、42図3）

調査区中央より南側のY K-100グリッド、III d層上面で確認した。

平面形は梢円形を呈し、径142cm×125cm、深さ38cmを測る。土坑長軸方向はN-43°-Eである。堆積土は7ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片54点、石器1点が出土した。

第42号土坑（第40図、41図21、42図4・9・10）

調査区中央より南側のY K-99グリッド、III d層上面で確認した。ピット116・119と重複し本土坑が古い。

平面形は梢円形を呈し、推定径115cm×91cm、深さ39cmを測る。土坑長軸方向はN-Sである。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片40点、石器1点、土器片利用土製品1点が出土した。点が出土した。

第57号土坑（第40図、41図23～24）

調査区中央より南側のY K-98グリッド、III d層上面で確認した。

平面形は円形を呈し、推定径116cm×122cm、深さ83cmを測る。堆積土は6ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片76点が出土した。

第64号土坑（第40図、41図25・26・28、42図11）

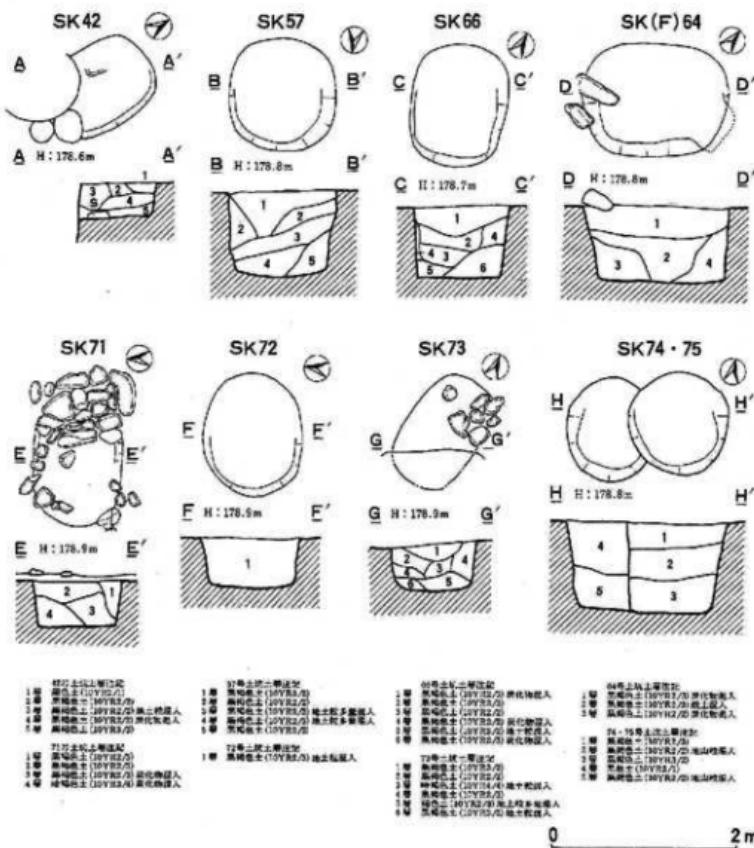
調査区中央より南側のY J・Y K-95・96グリッド、III d層上面で確認した。

平面形は円形を呈し、推定径164cm×122cm、深さ83cmを測る。土坑長軸方向はN-55°-Eである。堆積土は6ブロックに区分され人為堆積である。

土坑内より後期前葉の土器破片294点、石器7点が出土した。

第71号土坑（第40図）

調査区中央より北側のY O-104グリッド、III d層上面で確認した。第4号環状配石遺構の



第40図 土坑実測図(2)

張り出し部と重複し、本土坑が古い。

平面形は梢円形を呈し、推定径 130cm × 97cm、深さ 57cm を測る。土坑長軸方向は W-E である。堆積土は 4 ブロックに区分され人為堆積である。

第72号土坑（第40図、42図5）

調査区中央より東北側の Y K-107 グリッド、III d 層上面で確認した。

平面形は梢円形を呈し、推定径 134cm × 109cm、深さ 52cm を測る。土坑長軸方向は N-S-W である。堆積土は、單一で人為堆積である。

第73号土坑（第40図）

調査区中央より北側の Y O-104 グリッド、III d 層上面で確認した。第4号環状配石遺構の張り出し部、第10号土坑と重複する。新旧関係は本土坑→4号環状配石遺構→10号土坑である
平面形は梢円形を呈し、短軸 80cm、深さ 53cm を測る。土坑長軸方向は W-14-W である。
堆積土は 7 ブロックに区分され人為堆積である。

第74号土坑（第40図）

調査区中央より南西側の Y K-98 グリッド、III d 層上面で確認した。

平面形は梢円形を呈し、推定径 112cm × 90cm、深さ 92cm を測る。土坑長軸方向は N-S である。堆積土は單一で人為堆積である。

第75号土坑（第40図）

調査区中央より南西側の Y K-98 グリッド、III d 層上面で確認した。

平面形は円形を呈し、推定径 111cm × 109cm、深さ 96cm を測る。堆積土は單一で人為堆積である。

（藤井安正）

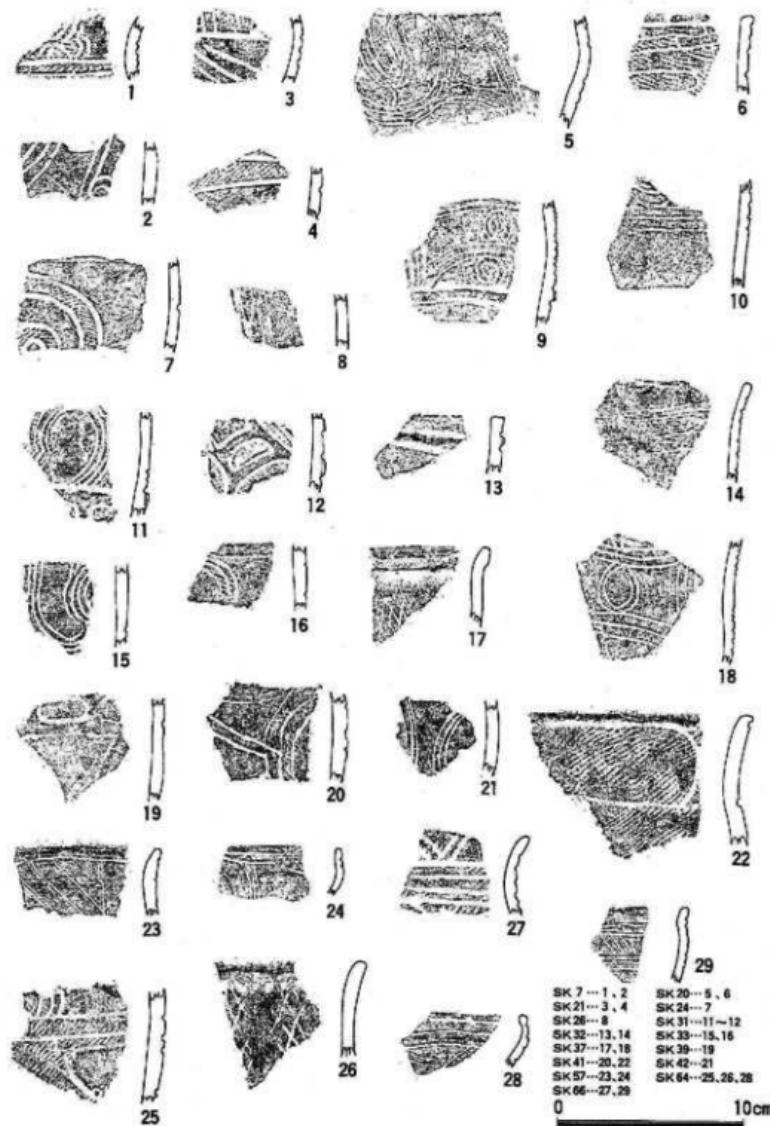
6. 埋設土器

第01号埋設土器（第43図）

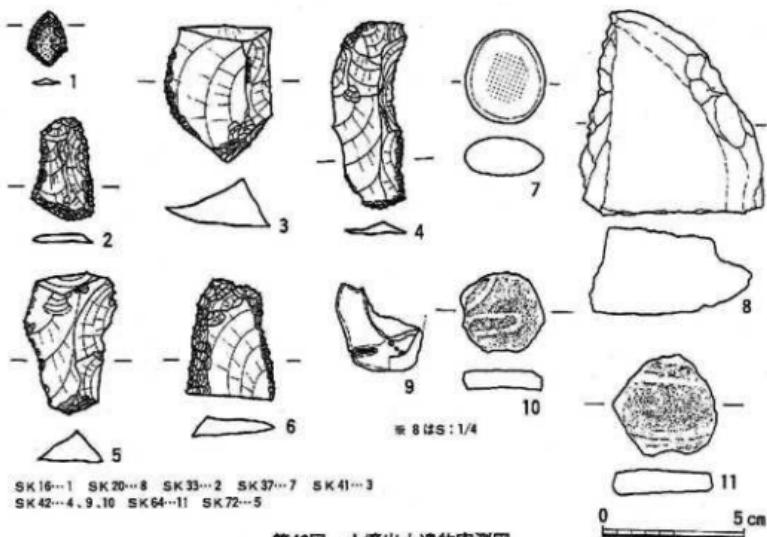
調査区の西側、Y O-101 グリッド、III d 層上面で確認した。第1号環状配石遺構と重複し本遺構が古い。

土器は、径 35cm、深さ 22cm の小土坑に正立の状態で埋設されていた。口縁部を欠く壺形土器で、胴部の最張部には、打ち欠きにより径 5cm 程の穴が開けられている。胴部 2/3 付近まで R L 繩文が施文されている。色調はにぶい黄橙色を呈する。

（藤井安正）



第41図 土坑出土土器拓影図

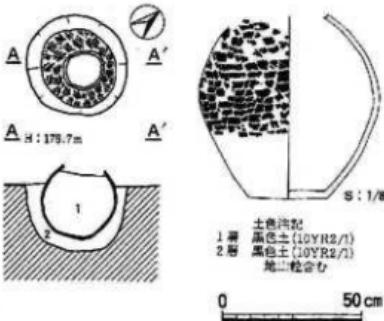


第42図 土壤出土遺物実測図

7. 造構外出土遺物

(1) 土器

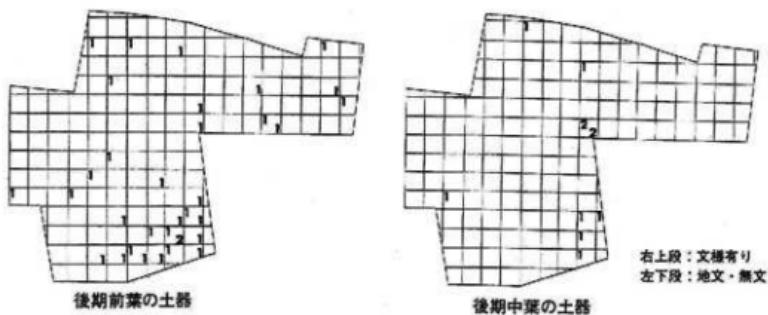
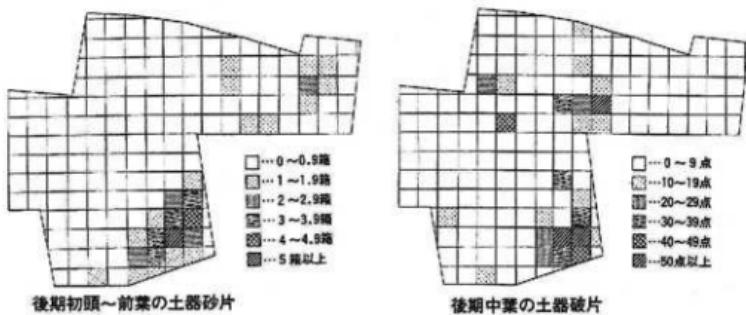
本調査区の造構外より、完形・復元土器46点、土器破片84箱（コンテナ 60×39×21）が出土した。これらの土器は、網文時代後期前葉のものが大半を占めるが、早期土器破片2点、後期中葉の土器破片2箱が含まれる。第44図・45図は、土器の出土状況を表したもので、調査区北東部（F：区隣接部）、東部（D：区隣接部）からの出土が多い。なお、Y



第43図 埋設土器造構実測図

K-104グリッド・Ⅲd層から後期中葉の土器4点が出土している。

土器の分類については、これまでと同様、時期ごとに群別し、文様・施文技法などにより細分した。なお、各群で特記事項がある時はその旨を記した。



第Ⅰ群土器 早期の土器（第52図1・2）

貝殻腹縞文と沈線の組合せにより、幾何学文を施文するもので、器形は、尖底深鉢と想定される。胎土は精選され、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色を呈する。

本群土器は、早期の物見台式に比定される。

第Ⅱ群土器 前期の土器（第52図3）

調査区内より1点出土した。破片より深鉢が想定される。器面には、結節のR L斜縞文が施文されている。色調はにぶい赤褐色を呈する。

本群土器は、円筒下唇土器の特徴を持っているが、比定される土器形式は不明である。

第Ⅲ群土器 後期初頭～前葉の土器

1類 連續状隆起文を持つ土器（第53図27）

深鉢が主体を占める。口縁部上段に連鎖状隆起文を張りついているので、胴部には帶繩文が施文されている。沈線間にはR L綱文が充填されている。焼成は良好、色調はにぶい黄褐色を呈する。

2類 地文上に沈線が施文される土器（第52図4）

深鉢が主体を占めるものと考えられる。文様帶は胴部下半まで及ぶ。主文様として弧線文、曲線文が施文されている。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色を呈する。

3類 隆縁文・隆沈線の土器（第46図1、52図5～10）

深鉢・壺が主体を占める。完形・復元土器が少なく文様帶の範囲は明確でないが、深鉢は胴部下半、壺は胴部最張部より若干下まである。深鉢・壺とも主文様として方形文、曲線文が施文されるほか、幾何学的な文様もみられる。隆線・隆沈線には繩文が施文されるものもある。1は口縁部を欠く小型の壺で、文様帶は隆線文によって2段に区画され、さらに縦位の隆線によって分割される。胎土には細砂を含み、焼成は良好である色調はにぶい橙色を呈する。

4類 沈線文の土器（第46図2～5、52図11～26）

本類は、無文研磨された器面に1～数条の沈線により文様が描かれたものを一括した。なお、隆縁文・隆沈文によって文様帶が区画されるものも本類とした。深鉢・鉢・壺が主体となる。深鉢は波状口縁を呈し、折返口縁のものもみられる。鉢は緩やかな山形口縁を呈し、装飾的な貼り付けが施されるものもある。

深鉢の文様帶は胴部3／4付近まで、鉢は胴部下半、壺は胴部最張部まで及ぶ。主文様として「S」字文、曲線文、弧線文(2)、渦巻文、梢円形文、縦位沈線文の描かれるほか、花卉状文(5)、縦位山形文(3)、円文、菱形文が施文され、刺突文が付加されるものもある。なお、1条の沈線により文様が施されるものは無方向な曲線が描かれる。本類土器は、胎土に細砂を含み、焼成は良好である。色調は黒褐色、にぶい黄橙色、灰黄褐色、灰白色を呈する。

5類 幅の狭い帯繩文の土器（第46図6～47図14、53図28～43）

幅1cm程の帯繩文によって文様が描かれるものを一括した。深鉢、鉢、壺が主体を占め、台付土器、広口壺、片口土器の破片もみられる。深鉢は波状口縁を呈するものが多く、胴部上半に最張部を有する。文様帶は胴部1／2程までに及び、主文様として菱形文(14)、階段状文、入組文、梢円形文、弧線文が施文され、円文、刺突文が付加されるものもある。この他、花卉状文、幾何学文が主文様となるものもある。鉢は平口縁・波状口縁を呈する。文様帶は器前面に及び、主文様として入組文、梢円形文、階段状文が施文されている。壺は波状口縁を呈するものが多い。文様帶は胴部上半に区画され、主文様として入組文、渦巻文が施文されるほか、6のように傾斜する帯繩文を施文するものもある。沈線間には、L R、R L綱文、無節斜綱文が充填される。本類土器は、胎土に細砂～砂粒を含み、焼成は良～良好である。色調は明褐灰

色、灰褐色、にぶい赤褐色、灰白色を呈する。

本群土器は後期初頭～前葉に位置付けられるものである。1類は後期初頭の門前式の特徴を持っている。2～3類は前十腰内式に、4～5類は十腰内I式あるいは大湯式に比定される。

第IV群土器 後期中葉の土器

1類 幅の広い帯縄文の土器（第47図15・16、48図18、54図55～57）

第Ⅲ群5類土器と比較し、帯縄文の幅が広く、縄文の細かなものを一括した。深鉢、広口壺、浅鉢が主体となる。深鉢は復元された土器がなく、形態については、不明な点があるが、数個の装飾突起を持つものや平口縁のものがみられる。口縁部は胴部より大きく「く」字状に外反する。文様帶は口縁部・胴部文様帶に区画されるが、浅鉢ではほぼ全面に及ぶ。沈線間には細かなLR縄文が充填されることが多い。広口壺は、平口縁で幅の広い帯縄文が施文されている。胴部文様帶は底部付近まで及び、主文様として蛇行した帶縄文（15）、「S」字的な懸垂文（16）が施文され、沈線間にはLR縄文が充填される。浅鉢は平口縁で、器全面に文様帶を持つ。主文様として入組文（18）が施文され、沈線間にはLR縄文が充填されている。本類土器は、胎土に細砂を含み、焼成は良好のものが多い。色調は黒褐色、灰黄褐色、にぶい黄橙色を呈する。

2類 平行沈線文の土器（第48図19、51図41、54図47～53）

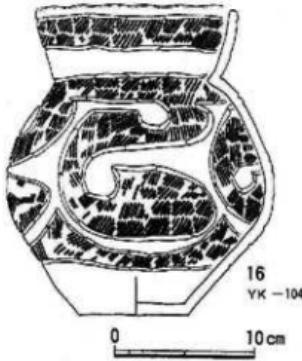
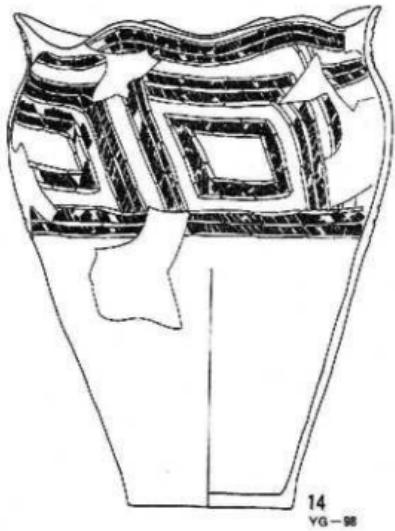
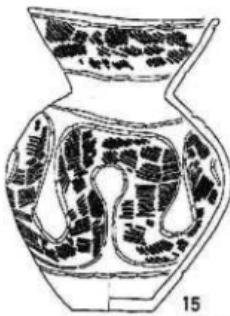
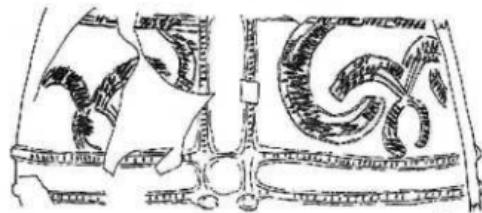
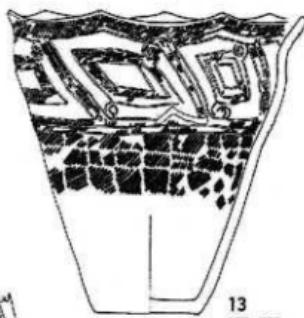
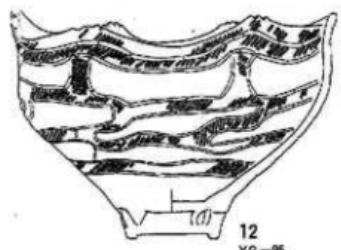
数条の平行沈線を施文した土器を一括した。深鉢が主体で、浅鉢、筒形土器がみられる。深鉢は山形口縁を呈し、胴部より内湾しながら大きく外反し、口唇部は肥大となる。また山形口縁の頂部には大小の装飾突起が付けられるものもある。施文される沈線は3～7条ほどで、「S」字文、弧状沈線、刺突文等で連続されている。沈線間にはRL・LR縄文が充填されるほか、刺突文（52）が連続施文されるものもある。浅鉢には口縁部上段に、刻目を施した隆沈文を振り付け、境界文（53）とするものもある。19は筒形を呈する土器で、4条の平行沈線が5段にわたり施文されている。沈線は弧状沈線によって連絡され、沈線間にはLR縄文が充填されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

3類 磨消縄文の土器（第48図21、54図58・59）

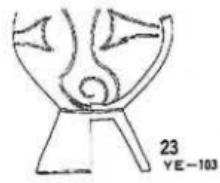
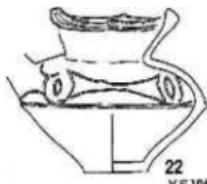
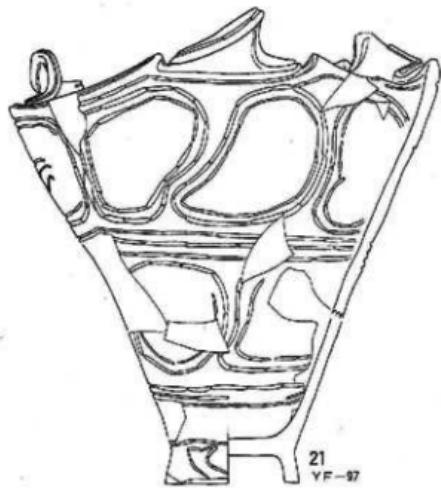
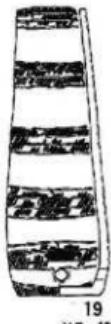
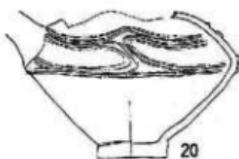
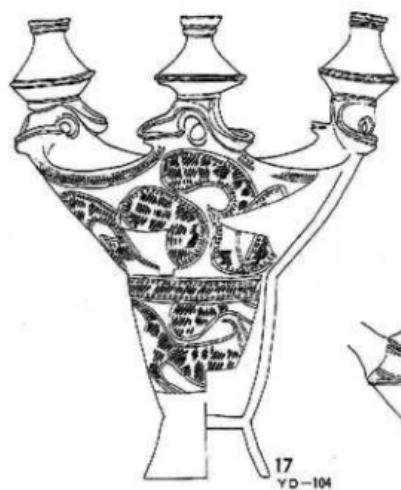
曲線的な沈線により、磨消縄文が展開する土器を一括した。台付深鉢が主体を占める。口縁部は、胴部より内湾気味に大きく立ち上がり、大きな装飾突起を有する。口唇部は肥大となる。文様帶は口縁部・胴部に区画され、底部間際まで文様が施文される。主文様として円文、幾何学文、アーマー状の文様が横位に展開されるが、本群1類のような連続性を持たない。沈線間には条の細かなLR縄文が充填されることが多い。本類土器は、胎土に砂粒を含み、焼成は



第46図 造構外出土土器実測図(1)

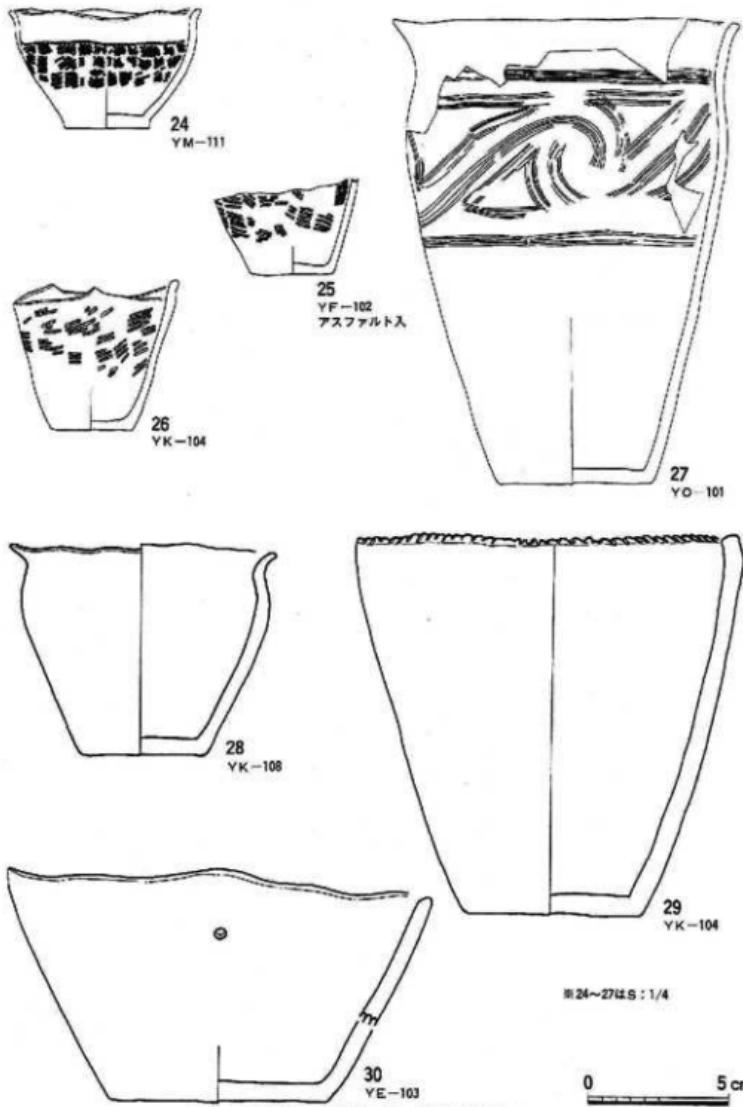


第47図 造構外出土土器実測図(2)

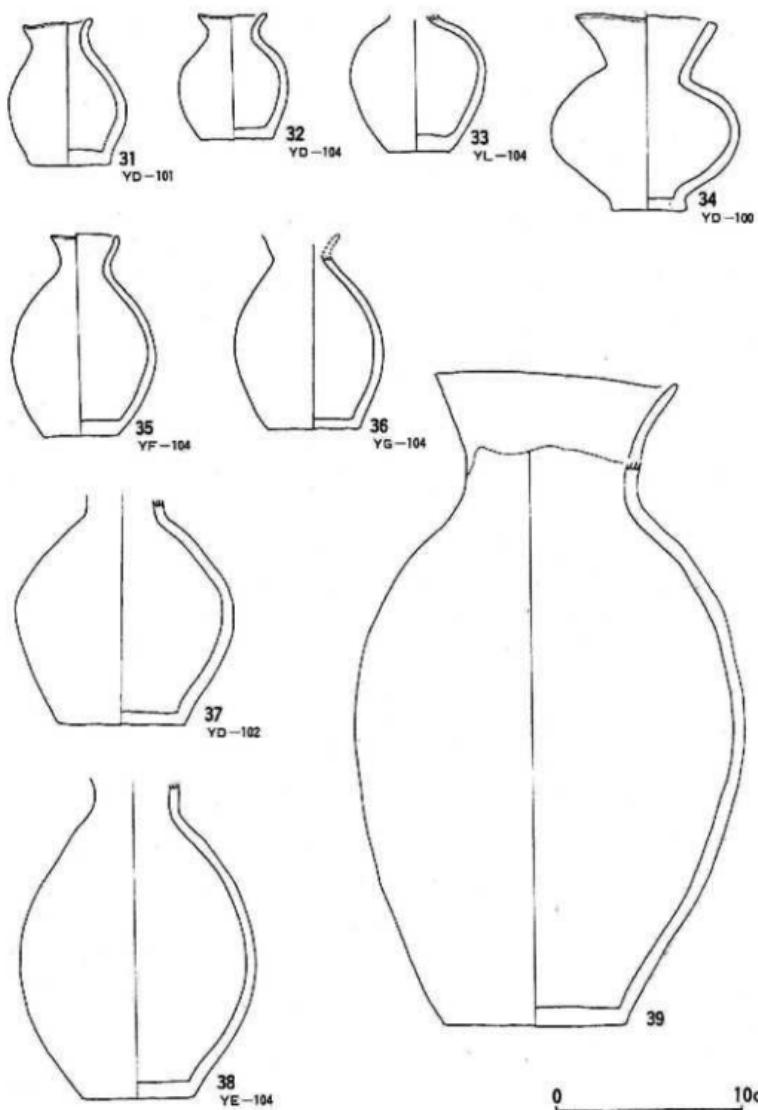


0 10 cm

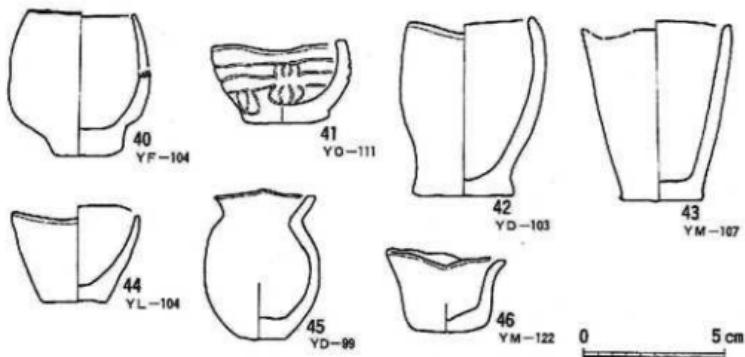
第48図 遺構外出土土器実測図(3)



第49図 造構外出土土器実測図(4)



第50図 造構外出土土器実測図(5)



第51図 遺構外出土土器実測図(6)

良好である。色調は褐色、灰黄褐色、赤褐色を呈する。

21は器形等からみて嚴密には本類に属しないものと考えられるが、各文様が本類の特徴を持っている。直線的に開いた胸部から内湾気味に付けられた装飾突起を持つ土器である。胸部文様帶は2段に区画され、アーマーバー状文・円文が施されている。沈線で描かれた各文様内は縁を残し、削ぎ落されて半浮彫的な作りとなっている。

4類 磨消繩文に刺突文が付加される土器（第48図17、55図60～64）

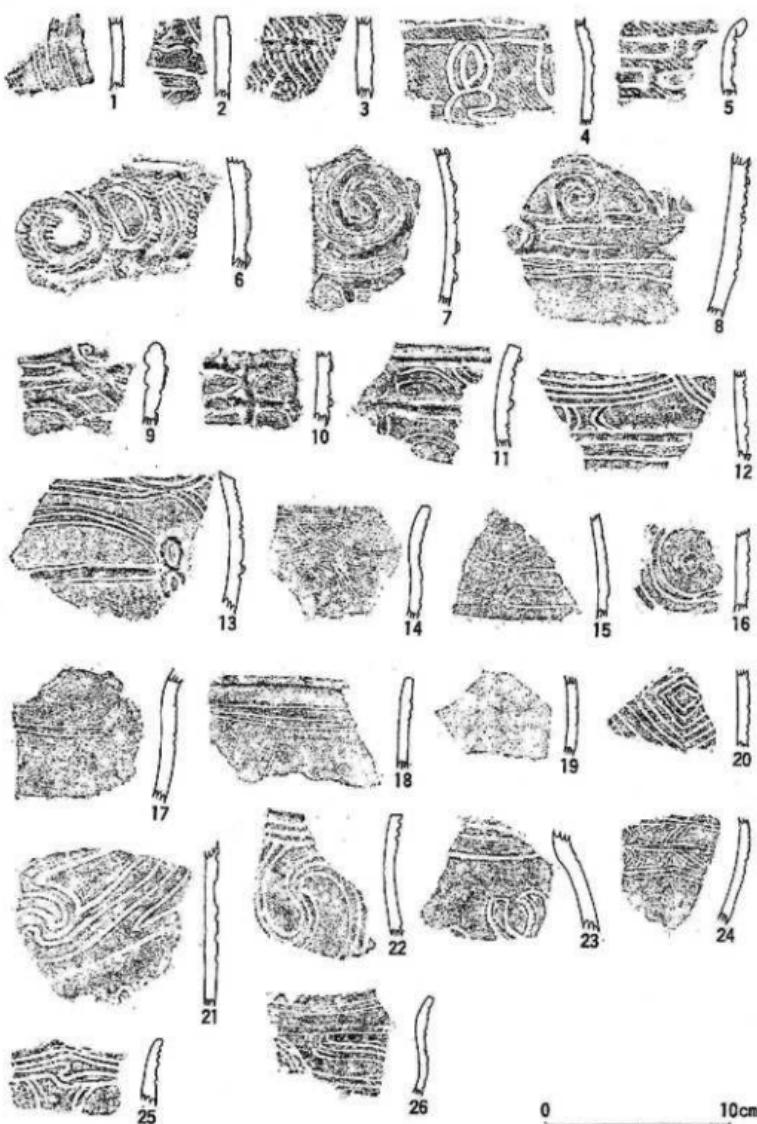
本群3類土器に類似した文様が展開するもので、連続した刺突文が付加されるものを一括した。台付深鉢が主体となり、装飾突起は3類に比べ立体的となる。刺突は竹管・棒状工具によるもので円形・三日月形を呈する。17は胸部上半の文様に添って刺突文が付加されている。本類土器は、胎土に砂粒を含み、焼成は極めて良好である。色調は黒褐色、にぼい黄褐色、明褐色を呈する。

5類 沈線文系の土器（第55図65）

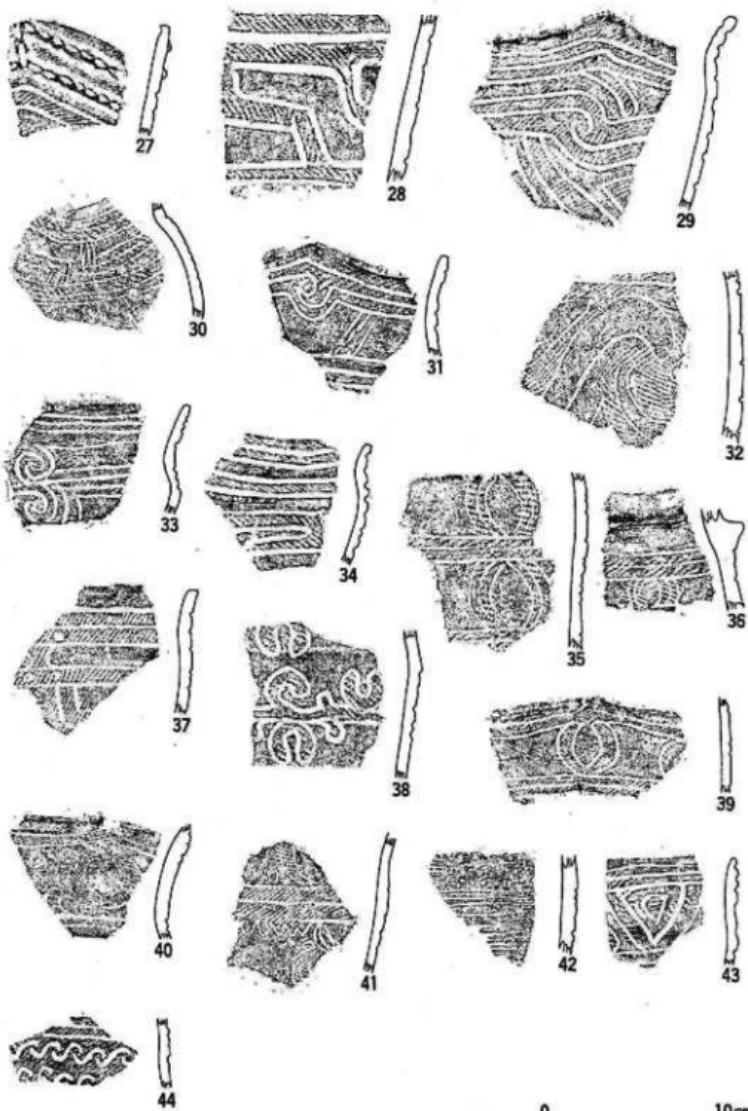
出土量が極めて少ないとから全体の器形をうかがうことは難しいが、内湾気味に大きく開いた、大波状口縁の深鉢又は鉢が想定される。斜行沈線が數条組み合って文様を描きだすもので、太い沈線は区画的な要素を持っている。細砂を含み、焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。

6類 隆線文・隆沈文の土器（第48図20、55図66・67）

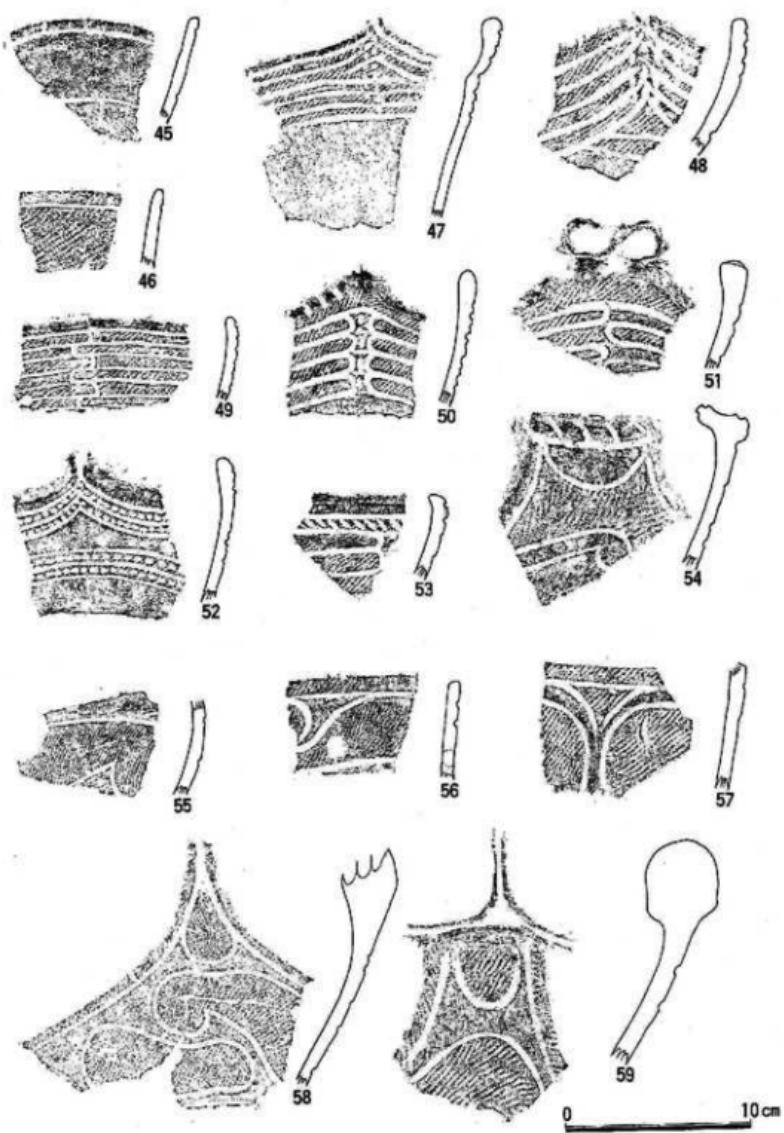
隆線文・隆沈文によって幾何学的な文様が描かれたものを一括した。注口土器が圧倒的に多い。復元土器は1点である。20は、胸部上半に文様を持つ注口土器で、隆線で梢円形文が描かれている。焼成は良で、色調は灰黄褐色を呈する。67は隆沈文上に連続した刻目が付けられている。



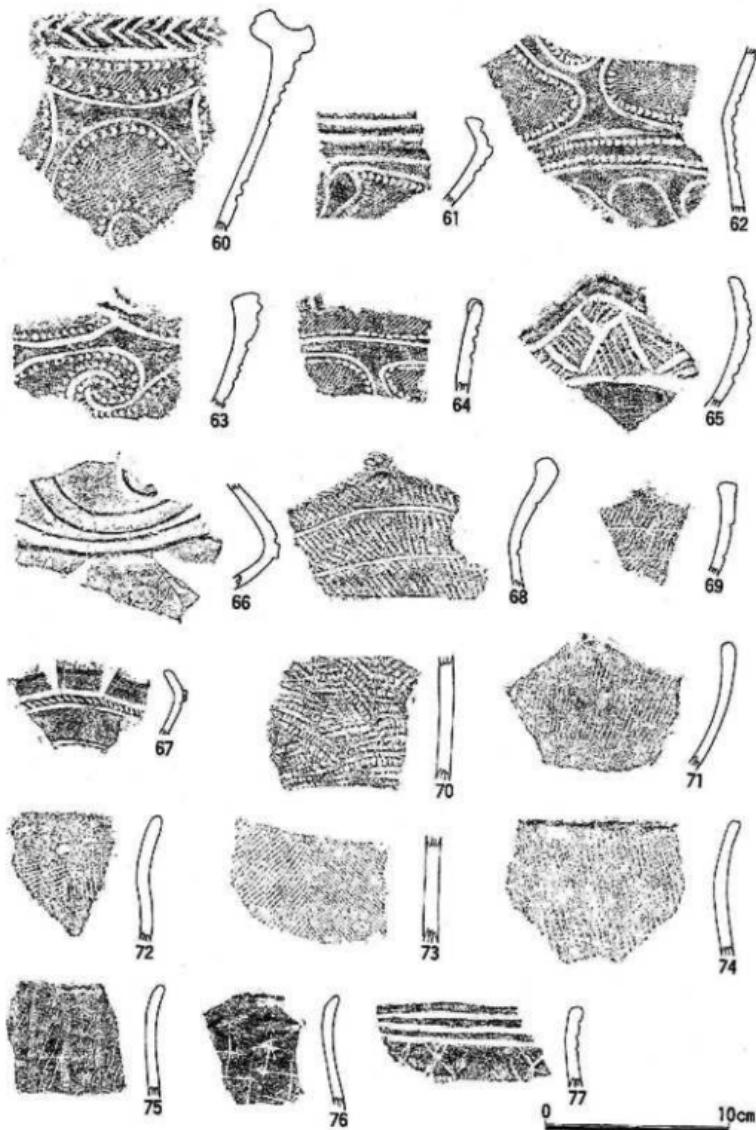
第52図 遺構外出土土器拓影図(1)



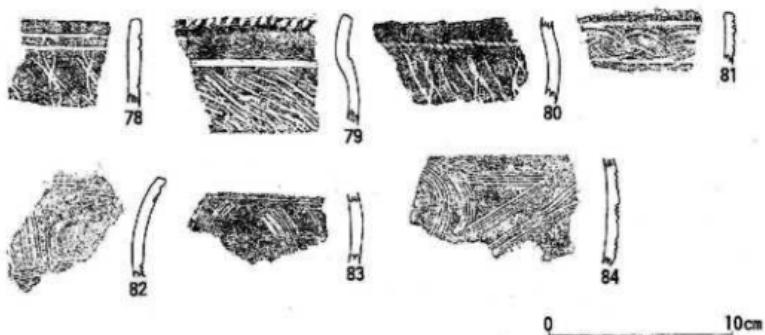
第53図 通構外出土土器拓影図(2)



第54図 造構外出土土器拓影図(3)



第55圖 遺構外出土土器拓影圖(4)



第56図 遺構外出土土器拓影図(5)

7類 沈線文の土器（第48図22・23）

沈線文によって、幾何学的な文様を描きだすものを一括した。22は注口土器で、口縁部に装飾的な小さな4つの突起を持つ。文様帶を胸部上半に持ち、弧状沈線により幾何学的な文様を描いている。注口部は欠損し、アスファルトの補修痕がみられる。焼成は良好で、色調は灰黄褐色を呈する。23は、胴部が球状を呈する台付土器で口縁部を欠く。文様は胴部全域に及ぶ。三ヶ所に「鉄アレイ」状の文様を継続方向に配置し、「凹レンズ」状の文様でそれを連結している。胎土に細砂を含み、焼成は良好である。色調は灰黄褐色を呈する。

本群土器は後期中葉に位置付けられものである。1～4類は東北地方北部の十腰内II式・III式、同南部の宝ヶ峰式、宮戸IIb式に比定されるものである。2類土器は関東地方の加曾利B I式に、5類は同B II式にみられる文様の特徴を持つものである。

第V群土器 後期初頭～中葉の土器

本群には、無文、縄文、撚糸文、条痕文の土器を一括した。量的には非常に多く、また時期別の細分が困難である。なお、器形等から時期が判明するものについては明記する。

1類 無文の土器（第49図28～51図46）

器面が無文研磨されたものを一括した。深鉢、鉢、浅鉢、壺、ミニチュア土器がある。いずれも平口縁を呈するが、極めて緩やかな波状口縁を呈するものもみられる。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄褐色、灰褐色、にぶい褐色、にぶい黄橙色を呈する。

2類 縄文が施文される土器（第49図24～26）

無節（L・R）・単節（LR・RL）の繩文が施文されたものを一括した。深鉢・鉢が主体となり、この他に縫が僅かにみられる。いずれも平口縁のものが多いが、緩やかな波状口縁、山形口縁を呈するものもある。26は、山形口縁を呈する小形の深鉢で、器全面にLR繩文が施文されている。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。後期中葉の特徴を持つ。24は緩やかな波状口縁を呈する鉢で頂部に刻目を有する。撚糸文の圧痕を境界文とし下部にLR繩文が施文されている。色調はにぶい黄橙色を呈する。

3類 撥糸文が施文される土器（第55図74、56図80）

単輪絡糸体回転文、網目状・連鎖状撚糸文が施文された土器を一括した。深鉢・壺が主体となる。いずれも平口縁を呈する。深鉢には、口縁上端に数条の平行沈線や撚糸圧痕を施文するものがあるほか、口唇部に刻目を連続するものもある。焼成は良～良好で、色調は浅黄橙色、明褐色、にぶい褐色を呈する。

4類 条痕文の土器（第49図27、56図81～84）

平口縁の深鉢が主体となる。条痕は器面に対し継位・横位方向に施文されるものが多いが、本書では規則的なものを図示した。27は、平口縁を呈する深鉢で、胴部上半に文様帶を持ち、主文様として条痕による入組文が施文されている。色調は黄橙色を呈する。81はコンパス文的な文様が施されている。

（藤井安正）

（2）石 器

F区遺構外より出土した石器は多種多様で、その数は剥片石器1,805点、礫石器245点の総計2,050点である。遺物は調査区北部から東部にかけて集中する範囲と西部付近に集中する範囲とにその出方が分けられる。なお、剥片はコントナ3箱出土した。

遺物の大半は遺物包含層Ⅲa～Ⅲbからの出土である。石器の分類については、形態別に類別細分した。石器出土分布図は第57図の通りである。

石 鋸（第58図、59図24～31）

形態から2群5類に分類した。石材は硬質頁岩が多く、珪質頁岩、黒色頁岩と続く。

1群…有茎石鋸で、基部形態から以下のように細別した。

a…平基有茎石鋸で33点出土した。剥離調整はていねいである。

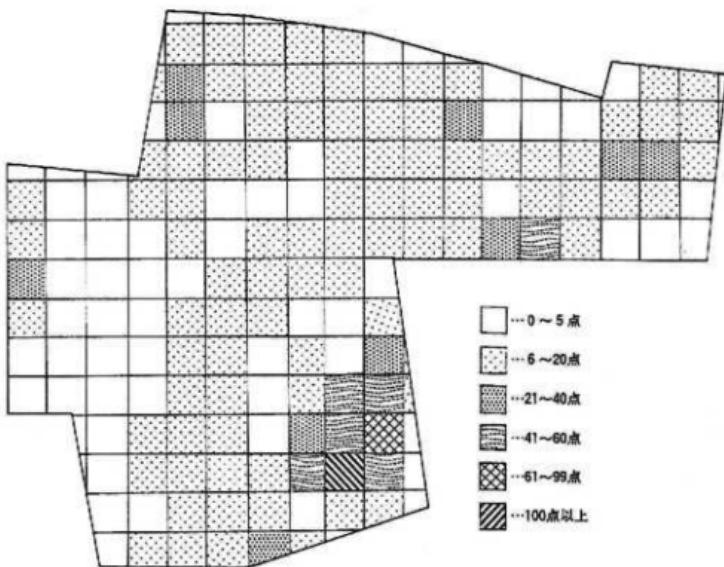
b…凹基有茎石鋸で32点出土した。刃部はaに比べ細長である。

c…凸基有茎石鋸で30点出土した。基部は長めで、全体的に厚みがある。

2群…無茎石鋸で、基部形態から以下のように細別した。

a…凹基石鋸で8点出土した。全体的に薄く、剥離調整はていねいである。

b…円基石鋸で12点出土した。剥離調整はやや粗い。



第57図 石器出土分布状況

c…尖基石錐で15点出土した。厚みがあり、剥離調整はややていねいである。

石 錐（第59図32～60図43）

形態から3群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩である。

1群…つまみ部と錐部の境が明確なもので、25点出土した。錐部は細く、破損しているものや、磨耗しているものが多くみられる。

2群…つまみ部と錐部の境が明確でないもので、14点出土した。錐部のみばかりでなく、つまみ部にも比較的ていねいな剥離調整がなされている。

3群…刃片の一部に錐部を作り出しているもので、17点出土した。錐部は比較的細めに作られているため、破損品が多い。

石 鍔（第60図44～61図64）

形態から2群に分け、さらにつまみ部を上にして主要刃部が作り出される位置から、5類に細分した。なお、未完成品と思われるものが7点出土した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩で、凝灰岩が1点出土した。

1群…縦型石匙である。

a…主要刃部が左、右、先端部、一側縁に作り出されるもので、36点出土した。

b…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、55点出土した。

c…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、15点出土した。

2群…横型石匙である。

a…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、18点出土した。

b…主要刃部が周縁全域に作り出されるもので、7点出土した。

石 箕 (第61図65~68)

形態別に2群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩である。

1群…基部に対し刃部の幅が広くなる、撥状のものである。15点出土した。

2群…基部に対し刃部の幅がやや広くなる、台形状のもので、3点出土した。

搔 器

打面を上にして、主要刃部が作り出される位置および、刃部の形態別に6群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩が多く、黒色頁岩、赤色頁岩と続く。また、黒曜石、緑色片岩等も数点みられる。

1群…主要刃部が左、右、いずれか一側縁に作り出されるもので、390点出土した。

2群…主要刃部が先端部に作り出されるもので、183点出土した。

3群…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、400点出土した。

4群…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、74点出土した。

5群…主要刃部が周縁全域に作り出されるもので、103点出土した。

6群…刃部に抉れをもつもので、317点出土した。

三脚石器 (第61図69・70)

調査区中央部Y L-99、北部YM-110グリットより2点出土した。剥離調整はやや粗く、三叉状に形作られている。なお、70は形態的に三脚石器と同様のものと判断した。性格については、木の皮を剥ぐためのものとか、祭司用のもの、などと色々な考え方方がなされている。米代川流域の遺跡でその出土が目に付くことから、漁労に関連した道具の可能性も考えられる。

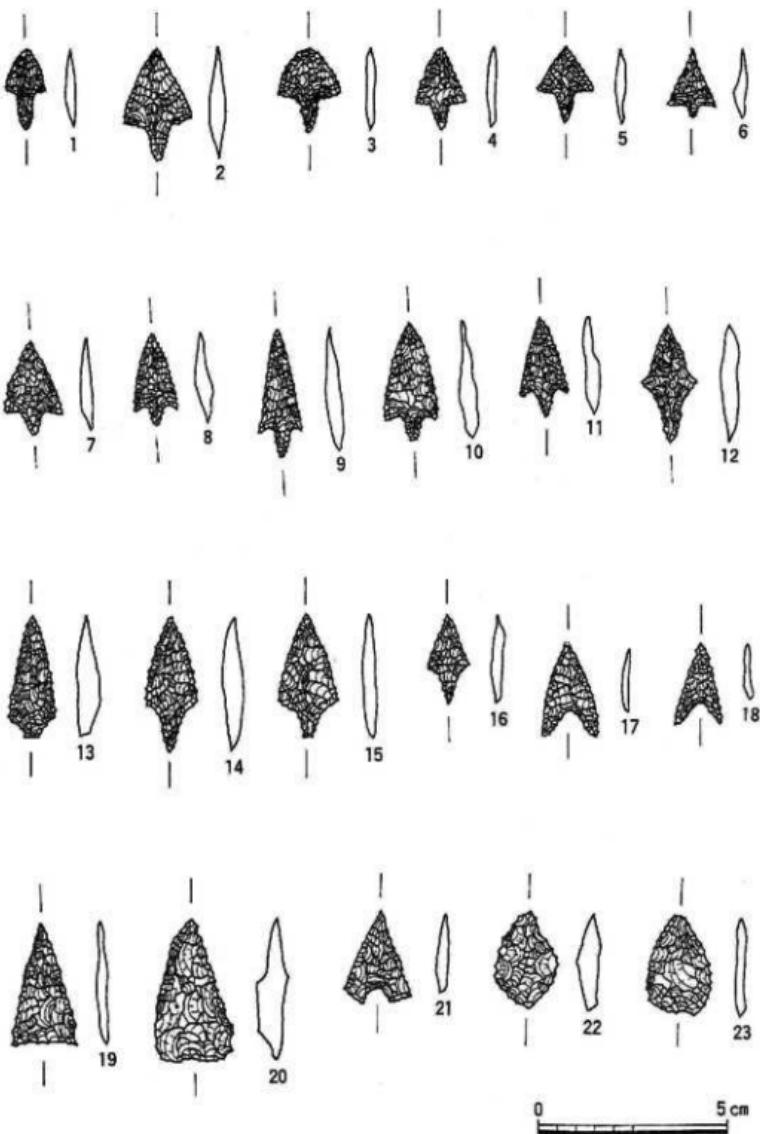
石材は硬質頁岩である。

石 斧 (第61図71~76)

形態別に2群に分類した。

1群…打製石斧である。調査区中央部Y I-100グリットより1点のみ出土した。剥離調整は粗く、石材は黑色片岩である。

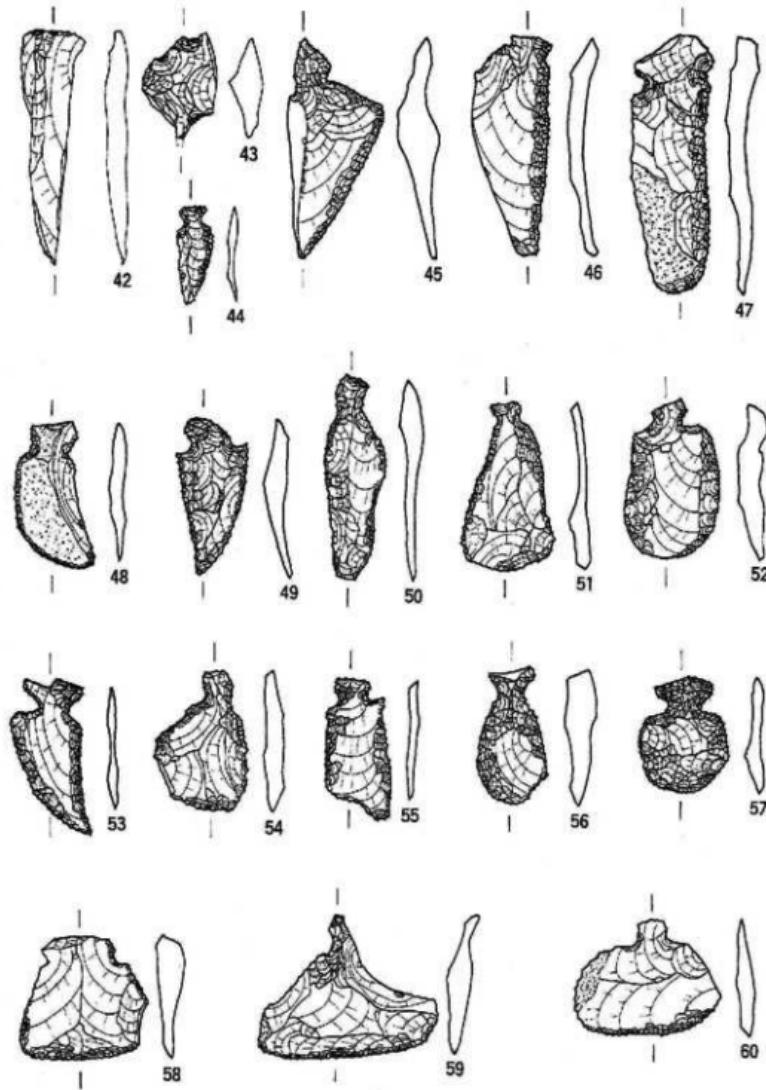
2群…定角式磨製石斧である。34点出土し、刃部には使用痕が観察される。石材は緑色凝灰



第58図 遺構外出土石器実測図(1)

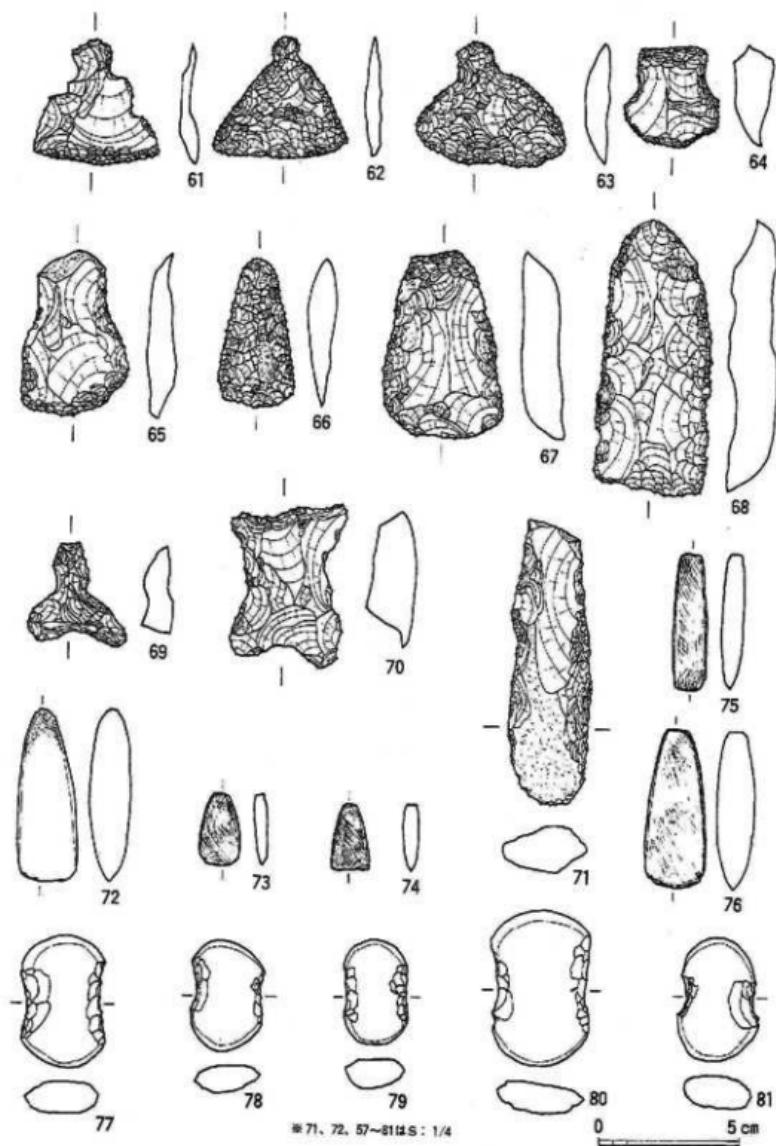


第59図 遺構外出土石器実測図(2)

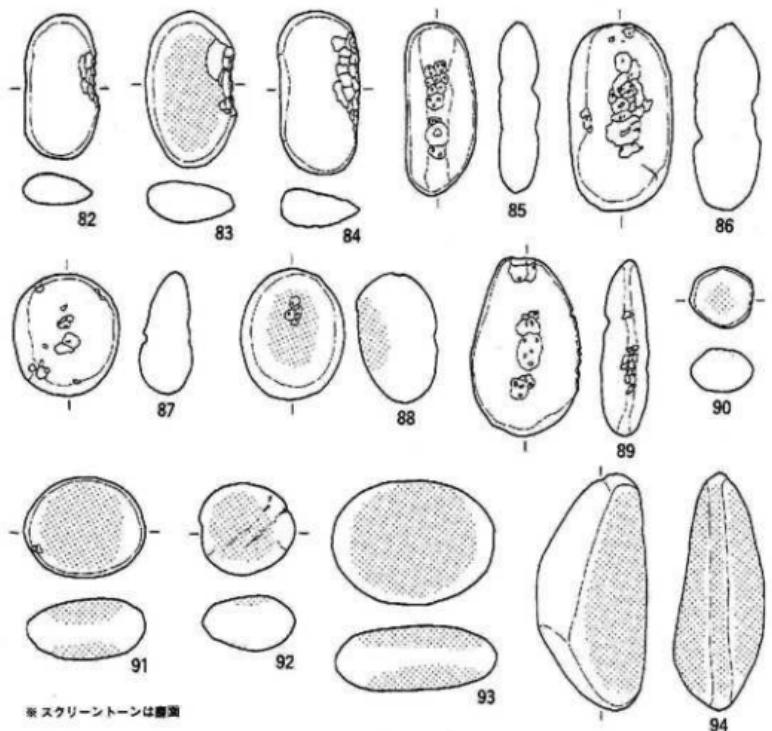


第60図 造構外出土石器実測図(3)

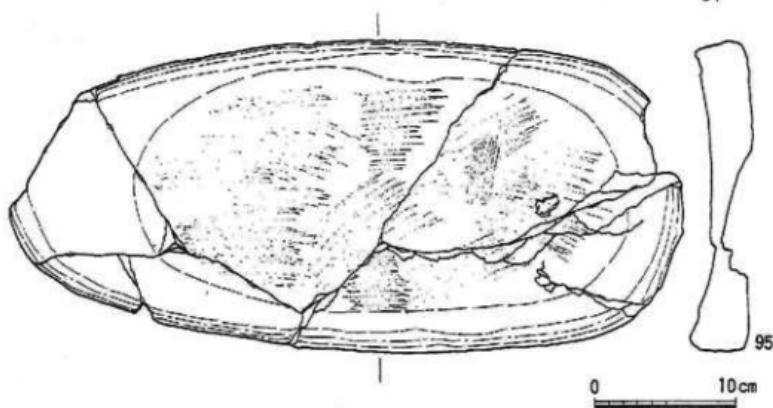
0 5 cm



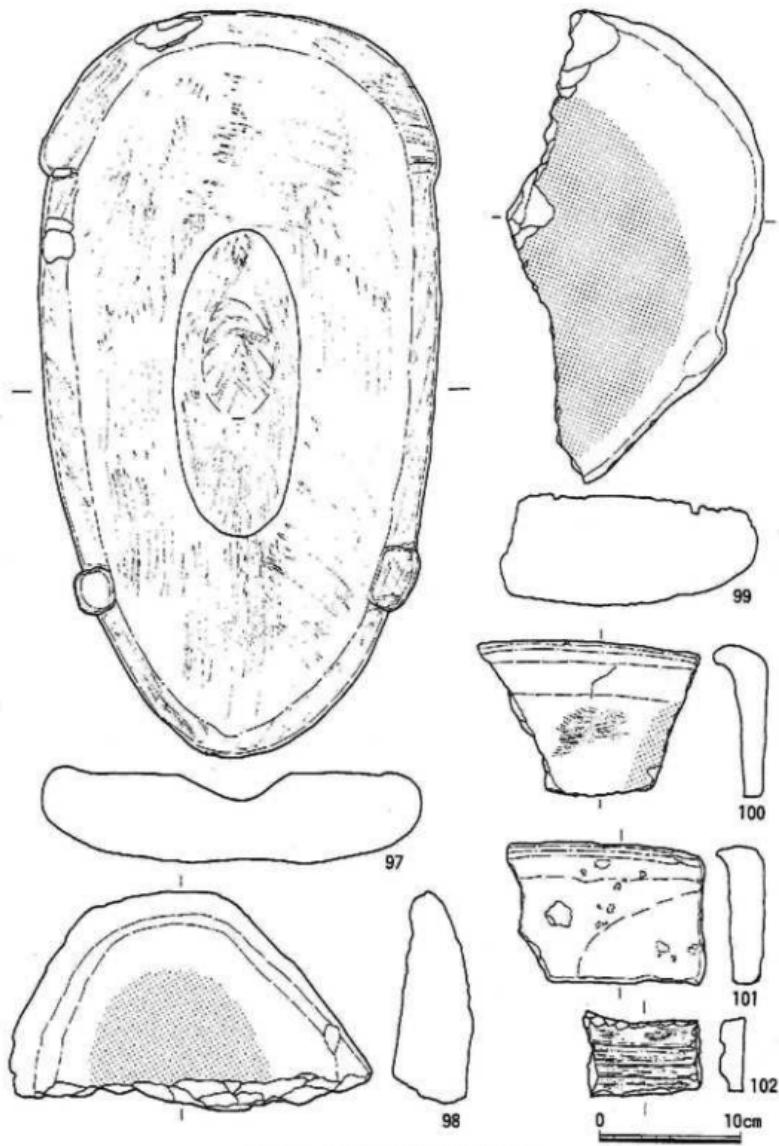
第61図 遺構外出土石器実測図(4)



* スクリーントーンは塗面



第62図 造構外出土石器実測図(5)



第63図 遺構外出土石器実測図(6)

岩、石英玢岩、緑色片岩、安山岩である。1点のみ蛇紋岩がみられ、このあたりでは岩手県の早池峰山で採取できるようである。

石 錘 (第61図77~81)

扁平な川原石の両側縁を打ち欠いているもので、19点出土した。石材は緑色凝灰岩、緑色片岩、安山岩、玄武岩、石英閃綠玢岩である。

敲 石 (第62図82~84)

扁平な川原石の一側縁が打ち欠かかれているもので、33点出土した。石材は砂質凝灰岩、凝灰質泥岩、緑色凝灰岩、安山岩である。

凹 石 (第62図85~89)

円錐、棒状の縊、扁平な川原石に使用痕として凹が観察されるもので、87点出土した。両面を使用しているものがほとんどである。石材は砂質凝灰岩、凝灰質泥岩、緑色凝灰岩、緑色片岩、石英閃綠玢岩である。

磨 石 (第62図90~94)

円錐や扁平な縊に磨痕が観察されるもので、48点出土した。石材は凝灰岩、安山岩、粘板岩、石英閃綠玢岩である。

石 盔 (第62図95、63図101)

22点出土した。欠損品が多く、ほとんどが縁をもつものである。97は四隅に脚をもつもので中央部分は梢円形にくぼんでいる。また、裏面にも浅い凹がみられる。石材は凝灰岩、スコリア状安山岩、砂質凝灰岩、軽石質凝灰岩である。

砥 石 (第63図102)

1点のみ出土した。石材は砂質凝灰岩である。

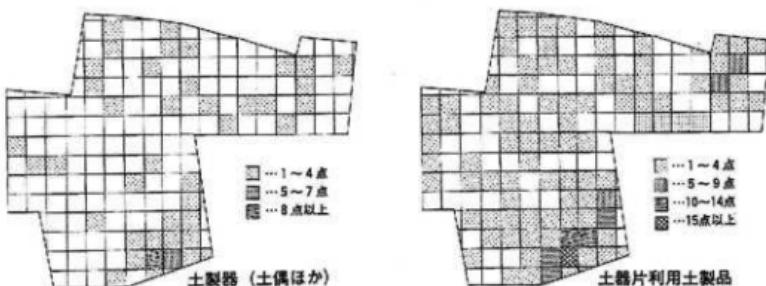
(花海義人)

(3) 土製品

F区遺構外より出土した土製品は、土偶24点、装飾品12点、舞形土製品18点、土鍤3点、葺形土製品9点、三脚土製品2点、その他の土製品7点、土器片利用土製品が245点の総計320点が出土した。土製品の出土分布状況は第64図の通りであるが、大半は調査区東側に集中している。特に出土量の多い土器片利用土製品も調査区ほぼ全域に分布してはいるが、調査区東側に集中する傾向がみられる。

土 偶 (第65図1、66図11)

1~8、10は土偶の胸部で、13点出土した。全て女性像で、11と4は妊娠を表現している。沈線文と刺突文によりいわゆる「パンツ」の文様を描き出している。3、5~7、10は板状土偶で、5点出土した。3、5は肩部分に孔を有し、特に3は腹部がくぼんでいる。6、10は沈



第64図 土製品出土分布状況

線文により縦目状の文様を描いている。9は頭部である。本報告書では1点のみの出土であるが、遺物発掘場を一部保存したため、その数は増えることと予想される。首から胴部にかけては刺突文による文様で描きだされ、髪は結ったように表現され、目鼻立ちはやさしく、縄文時代の人々の温かさがうまく表されている。11は脚部で破損品である。大型の土偶と予想され、5本指と爪がはっきりと表現されている。腕部の破損品と合わせて計6点出土した。

装飾品（第66図12～18、23）

12、13は耳栓で、4点出土した。12は孔を有し、赤色顔料が塗られている。14～18、23は全て孔を有し、首飾りとして使われたものと思われる。15、16は刺突文、17は刺突文と細い沈線により、文様が描かれている。23はやや大きめで、2つ並んで孔を有している。18は中央部になにかをはめたような凹みが観察される。

舞形土製品（第66図19～22）

破損品も合わせ、計18点出土した。19は刺突文と沈線により、21は沈線により文様がそれぞれ描かれている。21は文様を描く途中で終わっている。

土 麵（第67図30～32）

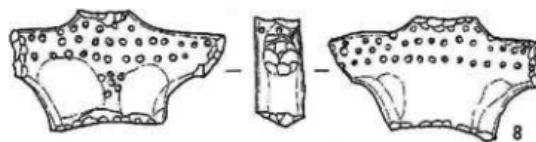
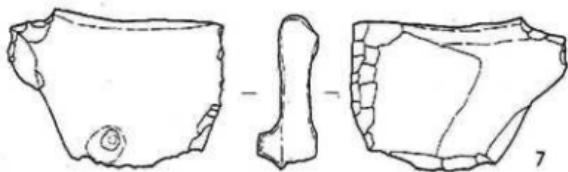
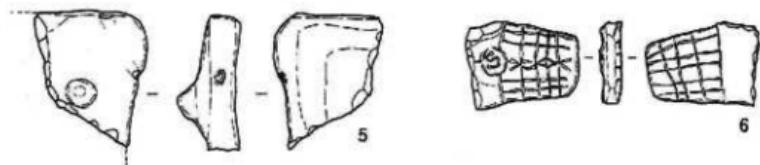
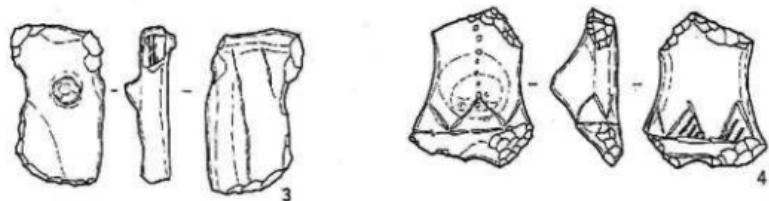
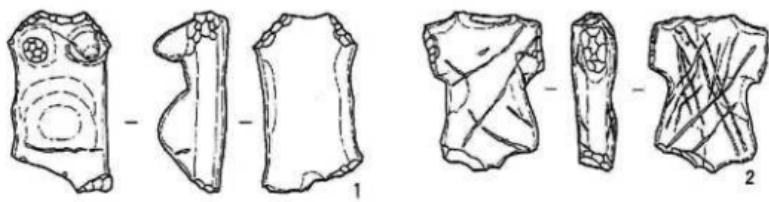
調査区東部のYD-102グリットより、まとまって3点出土した。側面および短軸方向を一周するように、沈線が巡らされている。また、側縁には、貫通孔がみられる。

三脚土製品（第67図28・29）

調査区北部のYL-110・YK-109グリットより、2点出土した。28は脚部と胴部に沈線が巡らせられ、図面上左の脚には「O」字上の文様が描かれている。

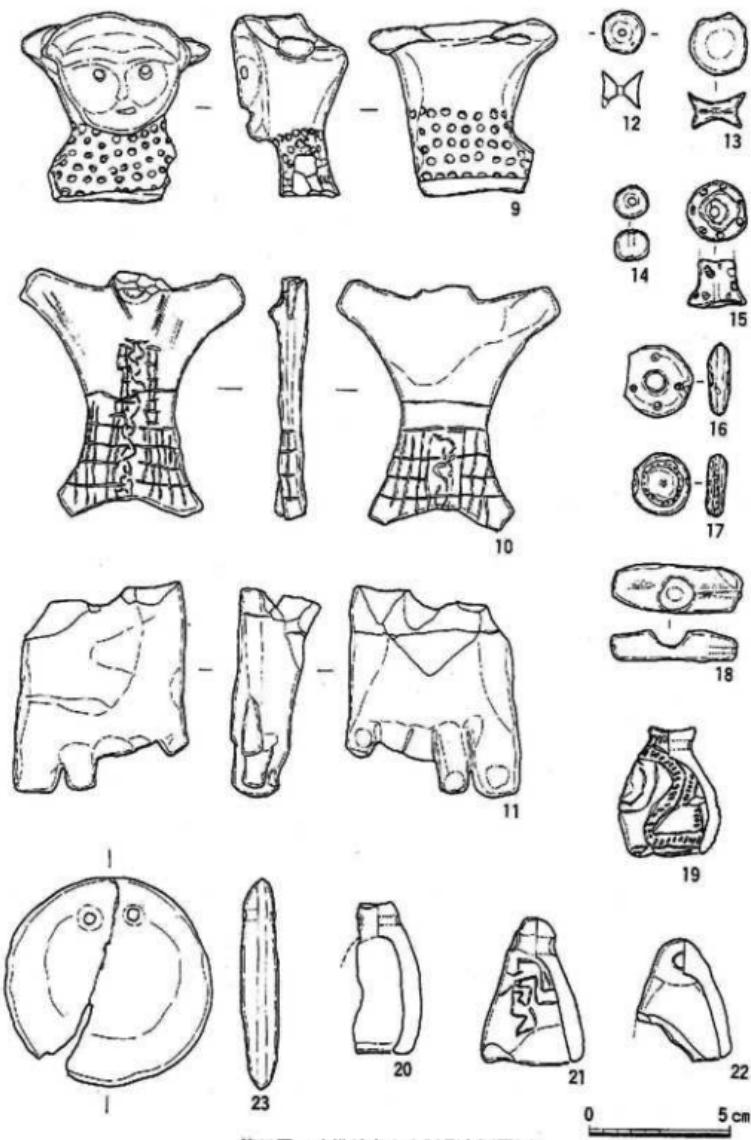
莺形土製品（第67図24～27）

様々な種類の莺を模した土製品で、9点出土した。

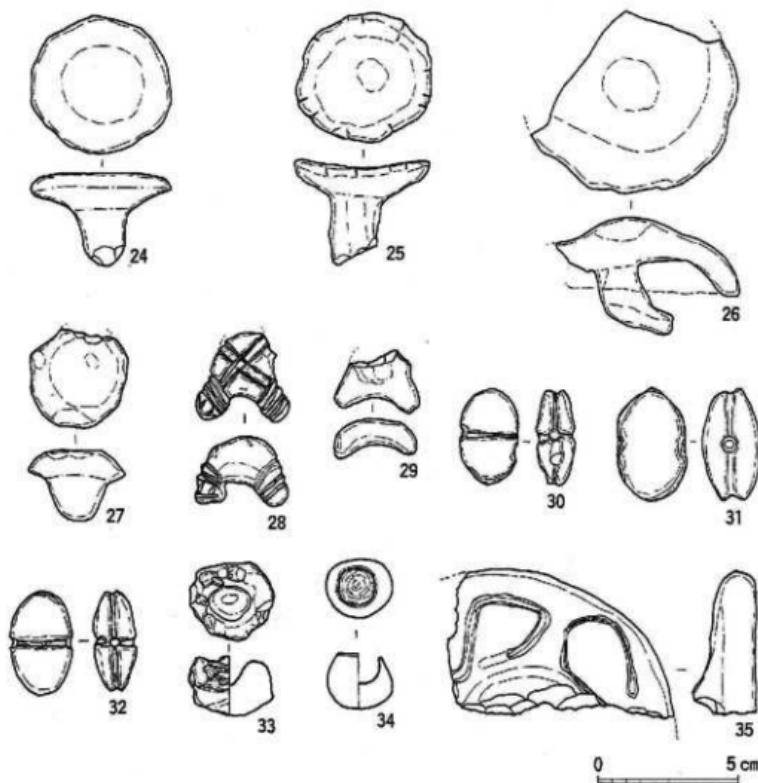


0 5 cm

第65図 造構外出土土製品実測図(1)



第66図 造構外出土土製品実測図(2)



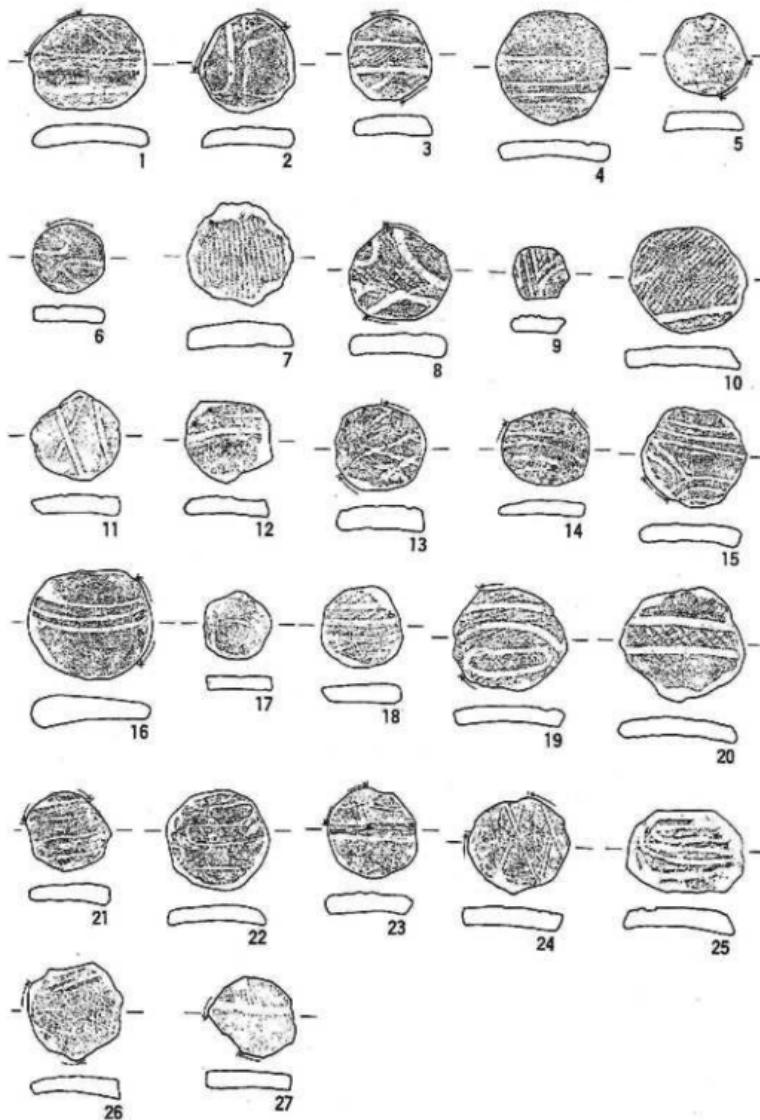
第67図 遺構外出土土製品実測図(3)

その他の土製品（第67図33～35）

破損品で形状の不明なものを含め、6点出土した。33、34はミニチュアと考えられ、33の口縁部は花弁のような形状をし、34は凹みに螺旋状の線が観察される。35は土板に沈線により文様が描かれ、中央部分は隆起している。

土器片利用土製品（第68・69図）

土器破片を打ち欠いて研磨（→で表現）により、それぞれ円形（162点）、三角形（74点）、方形（95点）に整形したもので、調査区全域に分布している。円形のものが圧倒的に多く、三角形のものに研磨されているものが多い。

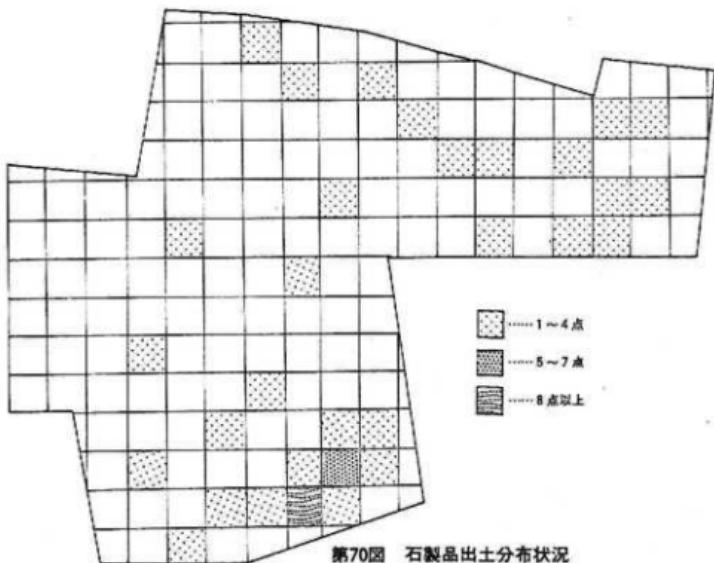


0 5 m

第68図 造構外出土土製品拓影図(1)



第69図 遺構外出土土製品拓影図(2)



第70図 石製品出土分布状況

(4) 石製品

F区辺境外より出土した石製品は、石刀12点、三角石製品1点、有孔石製品1点、イモガイ状石製品1点、板状石製品30点、軽石製石製品29点の総計74点が出土した。土製品と同様、調査区北部から東部にかけて遺物は集中している。石製品出土分別状況は第70図のとおりです。

石刀（第71図1～6）

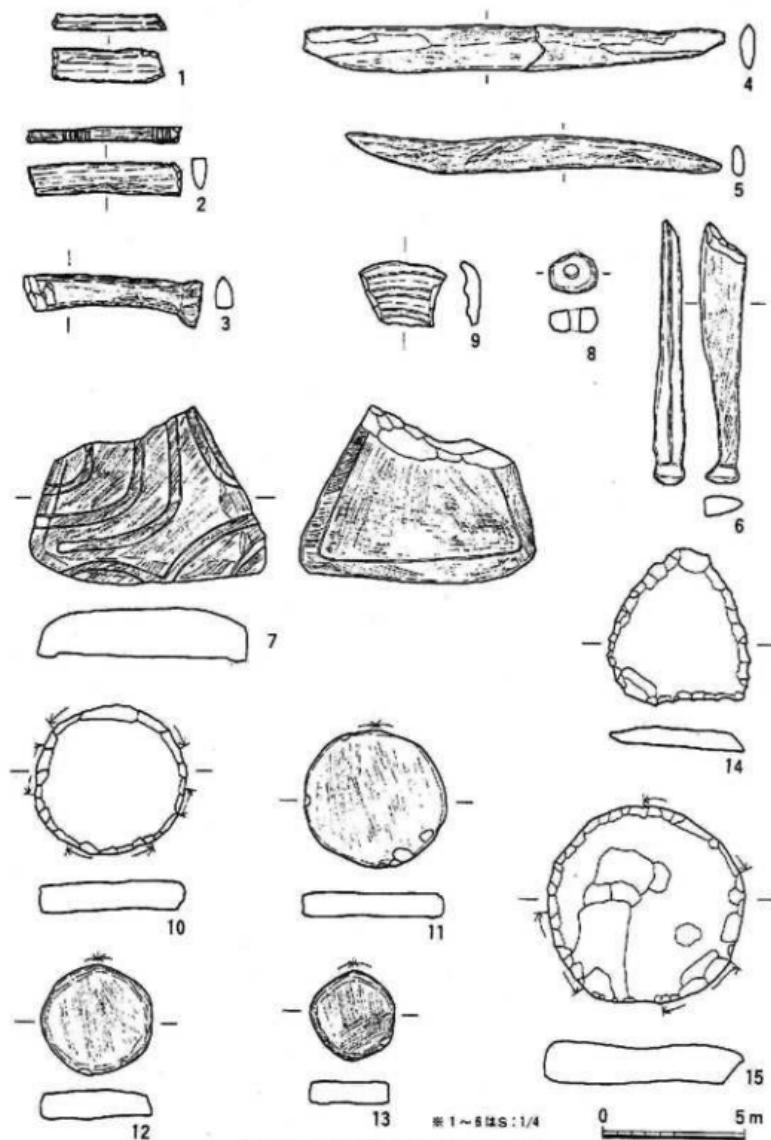
12点出土し、いずれも丹念な研磨により整形されている。4、5は比較的簡素に作られている。3、6は柄の部分まで表わし、3は背刃部分に数本の刻陰が施され、6は背刃部分に一条の溝をもっている。石材は片岩である。

有孔石製品（第71図8）

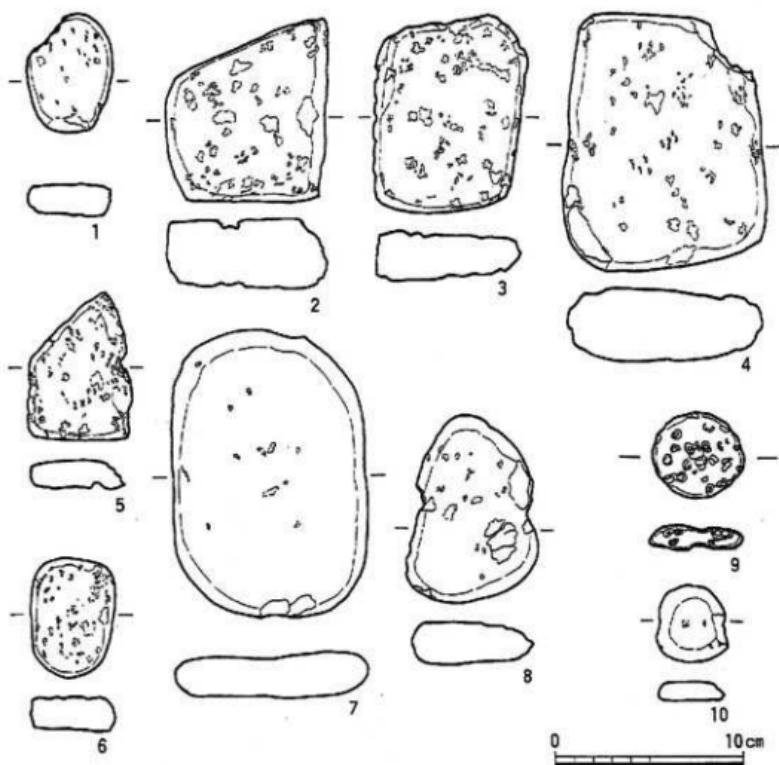
調査区中央部YM-104グリットより、1点出土した。丹念な研磨により整形され、貫通孔が穿孔されている。石材は翡翠であるが、かなりの労力をかけて作成された製品であると思われる。

三角形石製品（第71図7）

調査区東側中央寄りのYF-103グリットより、1点出土した。凸レンズ状に整形された表面には強状の線刻により文様が描かれている。裏面は平らで、三角形を縁取るように線刻されている。石材は泥質凝灰岩である。



第71図 造構外出土石製品実測図(1)



第72図 造構外出土石器実測図(2)

イモガイ状石製品（第71図9）

調査区東部YD-103グリットより、1点出土した。軽石を円形に整形し、表面には渦巻き状の刻陰がなされている。

板状石製品（第71図10～15）

調査区北部から東部にかけて、まばらに30点出土した。打ち欠き、研磨により三角形、円形に整形された、板状の石製品である。用途的には、土器片利用土製品と同様のものと考えられる。石材は砂質凝灰岩である。

軽石製石製品（第72図1～10）

軽石（軽石質凝灰岩）を研磨によって円形、隅丸方形、方形に整形したものである。81は両側縁を打ち欠き、うきとして使用されたものと思われる。（花海義人）

第IV章 歴史時代の検出遺構と出土遺物

F区において検出された歴史時代の遺構は、堅穴住居跡13軒、土坑11基、焼土道構3基、溝状遺構1条である。これらの遺構はちょうど台地縁辺部からあまり離れず、縁辺部を取り囲むように分布している。縄文時代の遺構はこれらと重複するものが多い。特大の環状配石について考察する上で、特に苦慮した。

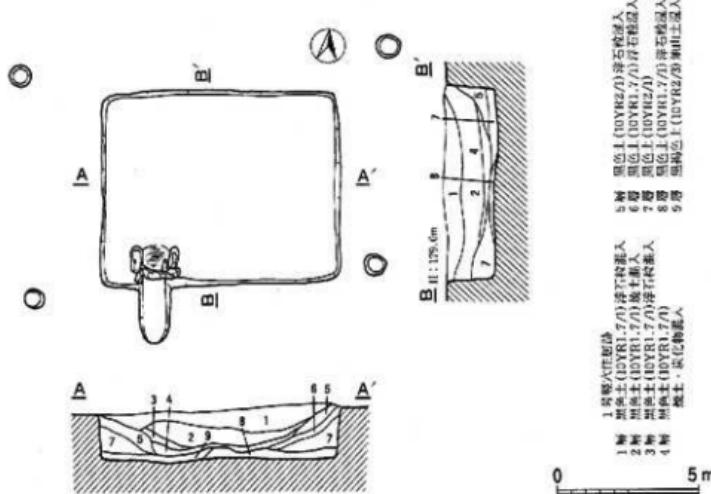
1. 堅穴住居跡

第01号堅穴住居跡（第73図、82図12・14）

調査区北部中央寄り、Y N-107を中心としたグリットで確認した。

平面形は方形で、規模は長軸425cm、短軸345cmを測る。主軸方向はN-0°である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは90cmを測る。床面には貼り床が施され、平坦で堅く踏みしめられていた。柱穴は住居外の各隅に位置し、径は30cm前後である。住居内には確認できなかった。堆積土は7層に分層され、自然堆積である。堆積上中程一帯から、炭化物が大量に確認されたことから、焼失家屋と考えられる。

カマドは南壁中央よりやや西側に設置されている。袖部・天井部はセメント板平な石を芯材とし、これに粘土を張りつけて構築している。前庭部は梢円形に掘りくぼまれており、焼土が堆



第73図 第1号堅穴住居跡実測図

積していた。

住居内より土器破片80点、剥片4点、柱穴状ピットより剥片2点が出土した。土師器には窓削りと窓なでが施されている。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第02号窓穴住居跡（第74図、82図13）

調査区北西端、Y P-103グリットで確認した。なお、住居西側は調査区外に延びるため未発掘である。

平面形は方形と推定され、規模は、短軸268cmを測る。主軸方向はN-33°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは40cmを測る。床面には貼り床が施され、平坦で堅く踏みしめられていた。柱穴は住居内には確認できなかった。堆積土は3ブロックに分層され、焼土が混入していた。人為堆積と考えられる。

カマドは南西壁中央よりやや北側に設置されている。袖部・天井部は扁平な石を芯材とし、これに粘土を張りつけて構築している。前庭部は椭円形に掘りくぼまれており、焼けた跡が観察された。

住居内より土器破片108点、石匙1点、搔器3点が出土した。土師器には窓削りと窓なでが施されている。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第03号窓穴住居跡（第75図、82図15）

調査区北西端、Y P-101グリットを中心に確認した。なお、本住居はF1区調査時にその一部が確認されているもので、発掘調査区の境界部分は未発掘である。

平面形は方形で、規模は長軸680cm、短軸670cmを測る。主軸方向はN-5°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは90cmを測る。柱穴は住居内の各隅とその中間に位置し、径は四隅の柱穴は34cm前後、中間のものが25cm前後と中間に位置しているものがやや小さい。堆積土は7層に分層され、自然堆積である。カマドは南壁中央よりやや西側に設置され、崩壊していた。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第04号窓穴住居跡（第76図、82図16）

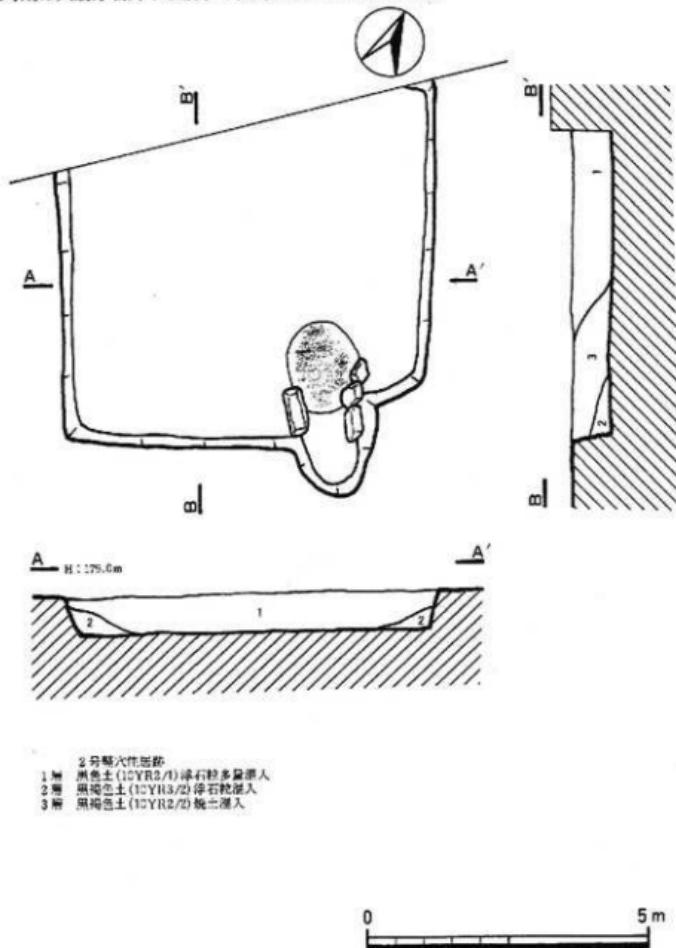
調査区北西端、Y P-102グリットを中心に確認した。第06、07、08フラスコ状土坑、第09Tピットと重複し、本住居がいずれより新しい。

平面形は方形で、規模は、長軸432cm、短軸356cmを測り、主軸方向はN-12°-Wである。壁はやや外傾するように立ち上がり、高さは45cm前後を測る。柱穴は第03号と同様、住居内の各隅とその中間に確認され、径は28cm前後を測る。堆積土は5層に分層され、自然堆積である。

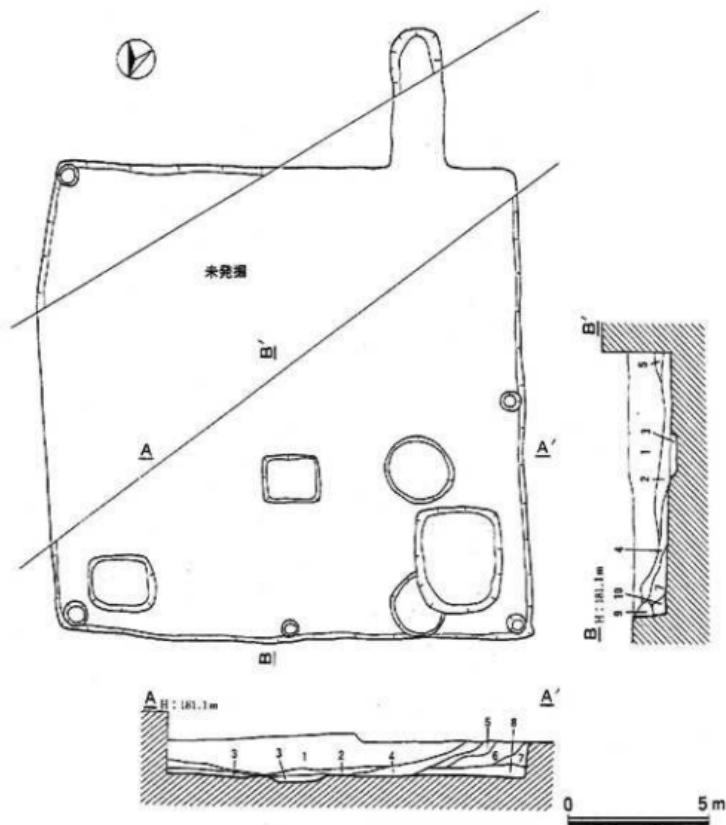
カマドは南壁中央よりやや西側に設置され、扁平な川原石を芯材に粘土を張りつけ、袖部・天井部を構築している。前庭部は楕円形に掘りくぼまれており、焼けた跡が観察された。

住居内より土器破片61点、搔器1点、凹石2点が出土した。土器には箆削りと窓なでが施されている。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。



第74図 第2号竪穴住居跡実測図



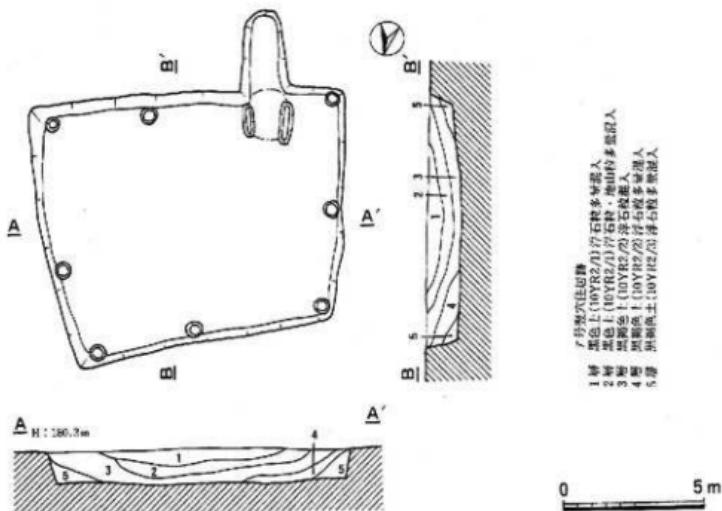
第75図 第3号竪穴住居跡実測図

第05号竪穴住居跡（第77図、82図17～19、25）

調査区中央部、Y I - 98グリットを中心確認した。

平面形は方形で、規模は、長軸460cm、短軸430cmを測り、主軸方向はN-13°Wである。壁はやや外傾するように立ち上がり、高さは65cm前後を測る。柱穴は、住居内には確認できなかつた。堆積土は3層に分層され、自然堆積である。カマドは北壁中央よりやや東側に設置され崩壊しているが、袖部分の芯材として使用された川原石が残っていた。

住居内よりフイゴ羽口1点、土器破片90点、接器1点、凹石1、点剥片2点が出土した。土器には箇削りと箇なでが施されている。



第76図 第4号竪穴住居跡実測図

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第06号竪穴住居跡（第78図）

調査区中央部、Y L-102グリットを中心に確認した。

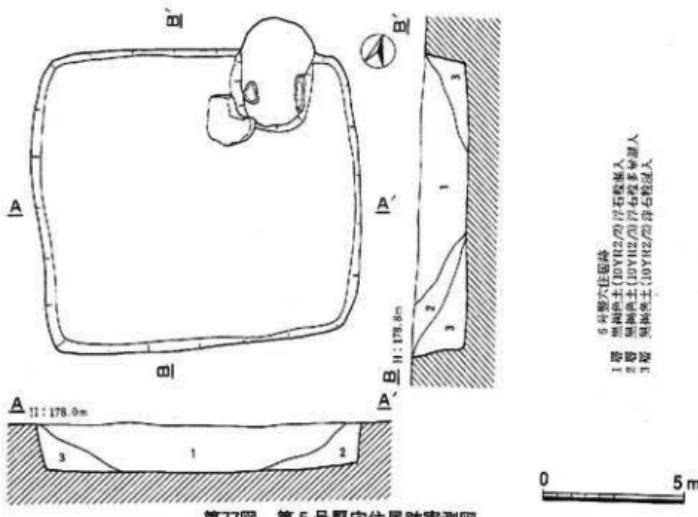
平面形は方形で、規模は、長軸470cm、短軸390cmを測り、主軸方向はN-15°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは40cm前後を測る。柱穴は、住居内には確認できなかった。壁際には周溝がめぐらされ、床面からの深さは10cm前後である。住居内北西隅に土坑をもつていて堆積土は5層に分層され、自然堆積である。床面よりやや上でスギの炭化材が一面に観察されたため、焼失家屋と考えられる。カマドは南壁中央よりやや西側に設置され崩壊しているが、袖部分の芯材として使用された川原石とセンが残っていた。

住居内より土器破片42点、搔器2点が出土した。土器には箇削りと磨なでが施されている
構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第07号竪穴住居跡（第79図、82図1~11、20~24）

調査区北西端部、Y P-105グリットを中心に確認した。なお、住居北側は調査区外に延びるため未発掘である。

平面形は方形と推定され、確認される規模は短軸720cmを測り、主軸方向はN-25°-Wであ



第77図 第5号竪穴住居跡実測図

る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは90cm前後を測る。柱穴は、住居内の隅と中程に5個確認した。壁際には周溝がめぐらされ、床面からの深さは西壁際が10cm前後、東壁際が30cm前後である。堆積土は7層に分層され、自然堆積である。住居内東部に土坑をもち、3層に分層される。東壁南寄りに出入り口と考えられる落ち込みを確認する。カマドは南壁に2基確認された。扁平な川原石を芯材に袖部と天井部が作られている。

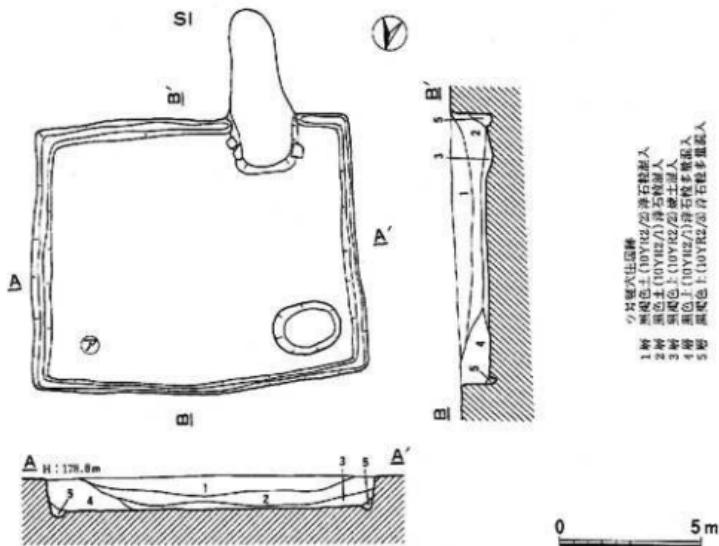
住居内より完形復元土器11点、鉄器3点、須恵器破片2点、土器破片134点、搔器4点回石2点、敲石1点、剥片2点が出土した。1~8は壺、9~11は壺形の土師器で外面には削り、内面には箇などの調整がそれぞれ施されている。23は鉄鎌である。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第08号竪穴住居跡（第80図）

調査区中央部、Y J-100グリッドを中心に確認した。

平面形は方形で、規模は、長軸430cm、短軸410cmを測り、主軸方向はN-15°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは50cm前後を測る。柱穴は、住居内の北東隅に1個確認された。壁際には周溝がめぐらされ、床面からの深さは10cm前後である。住居内南東隅に土坑が確認された。堆積土は5層に分層され、自然堆積である。カマドは南壁中央よりやや西側に設置され崩壊しているが、袖部分の芯材として使用された川原石が数個残っていた。



第78図 第6号竪穴住居跡実測図

住居内より遺物は出土しなかった。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第9号竪穴住居跡（第81図）

調査区西南部、Y L - 95グリットを中心確認した。本住居はDゾーン調査時でその一部が確認されているものである。本調査区では、プラン確認のみとした。

平面形は軸長550cm前後の方形と推定される。主軸方向はS-84°Wである。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第10号竪穴住居跡（第81図）

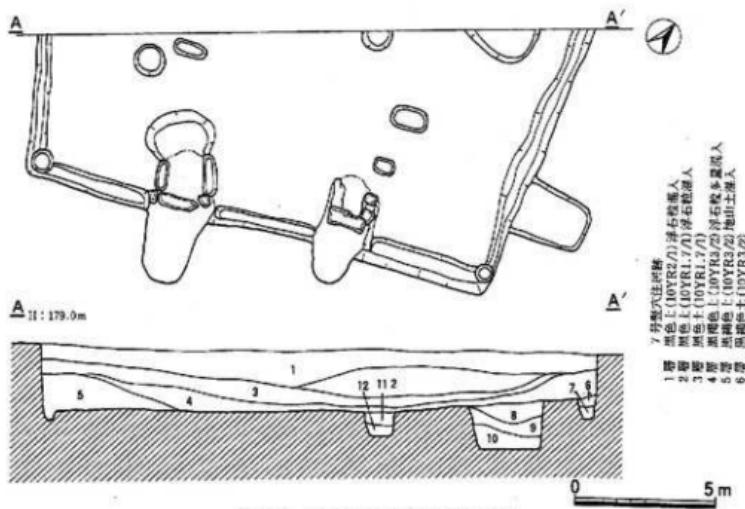
調査区南東部、Y F - 103グリットを中心確認した。平面プランのみの確認である。

平面形は長軸520cm、短軸500cmの方形と推定される。主軸方向はN-21°Wである。カマドは2基あるものと想定される。

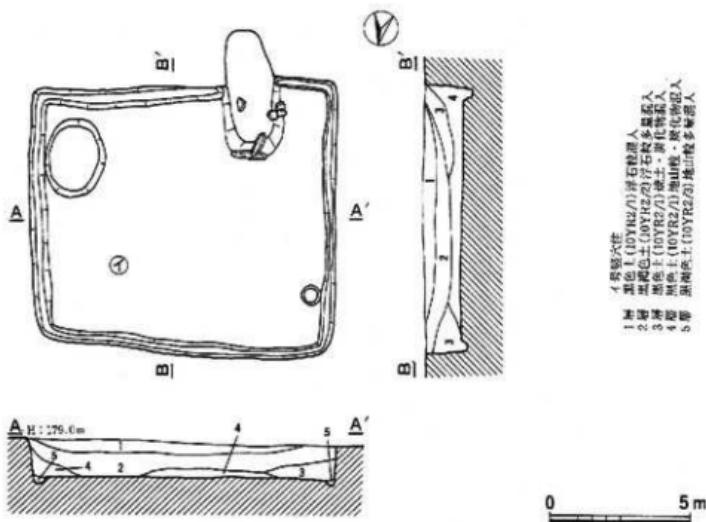
構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第11号竪穴住居跡（第81図）

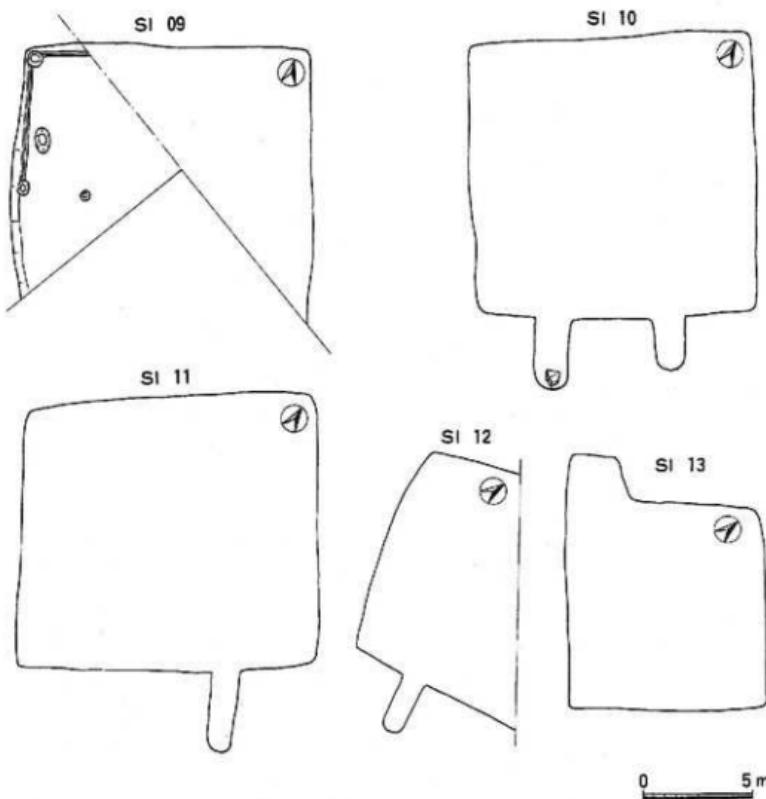
調査区南東部、Y G - 98グリットを中心確認した。平面プランのみの確認である。



第79図 第7号竪穴住居跡実測図



第80図 第8号竪穴住居跡実測図



第81図 第9～13号竪穴住居跡平面図

平面形は長軸540cm、短軸510cmの方形と推定される。主軸方向はN-30°-Wである。カマドは南壁中央寄りやや東側に位置している。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第12号竪穴住居跡（第81図）

調査区南東部、Y F-105グリットを中心に確認した。平面プランのみの確認である。

平面形は東側半分が調査区外におよぶため確認できなかったが、長軸540cm、短軸510cmの方形と推定される。主軸方向はN-33°-Wである。カマドは南壁中央寄りやや東側に位置している。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第13号堅穴住居跡（第81図）

調査区南部、Y C - 100グリットを中心確認した。平面プランのみの確認である。

平面形は長軸380cm、短軸360cmの方形と推定される。主軸方向はN-51°Wである。カマドは東壁中央寄りやや南側に位置している。

構築時期は大湯浮石降下以降、中世と考えられる。

（花海義人）

2. 土坑

第02号土坑（第83図）

調査区西部中央寄り、Y O - 101グリットで確認した。平面形は橢円形で、規模は長軸110cm、短軸92cmで深さは33cmを測る。長軸方向はN-78°Wである。底面は平坦で、壁は底面より外傾して立ち上がる。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

第03号土坑（第83図）

調査区西部、Y P - 100グリットで確認した。平面形は隅丸方形で、規模は長軸212cm、短軸187cmで深さは78cmを測る。長軸方向はN-31°Wである。底面は平坦で、壁は底面より外傾して立ち上がる。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。

鉄製品1点が出土した。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

第04号土坑（第83図）

調査区西端部、Y P - 99グリットで確認した。平面形は隅丸方形で、規模は長軸173cm、短軸123cmで深さは35cmを測る。長軸方向はN-25°Eである。底面は平坦で、壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

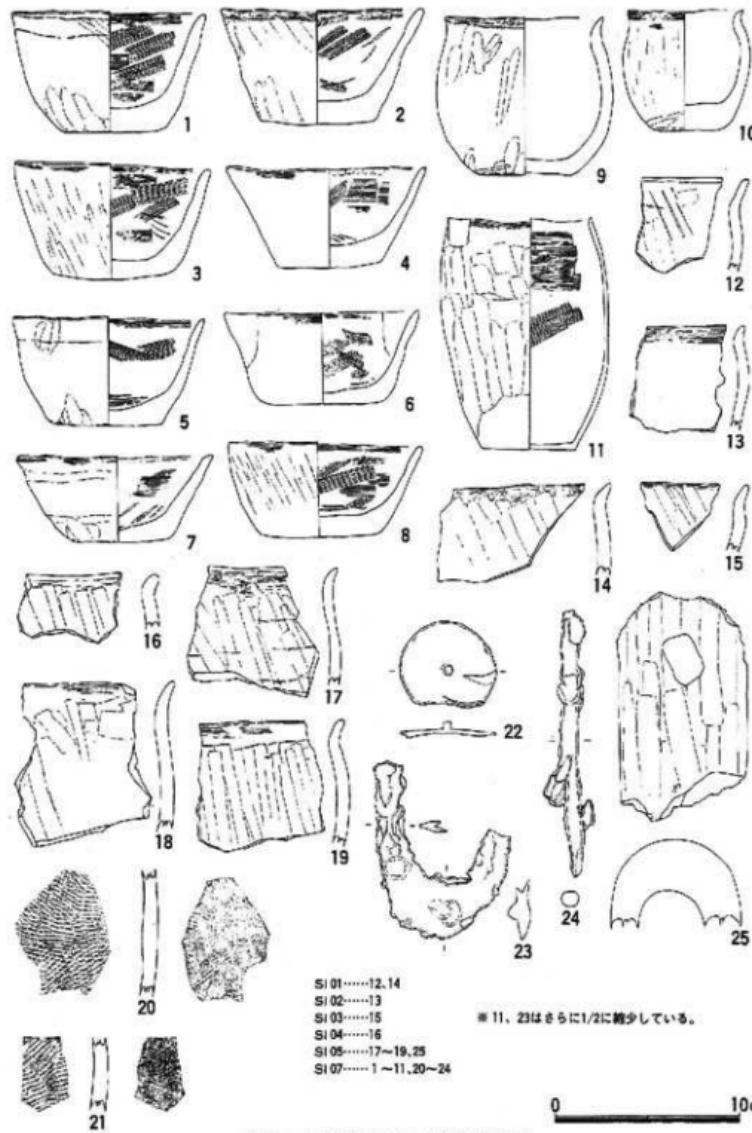
第05号土坑（第83図）

調査区西端部、Y P - 99グリットで確認した。平面形は隅丸方形で、規模は長軸173cm、短軸123cmで深さは35cmを測る。長軸方向はN-25°Eである。底面は平坦で、壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

第10号土坑（第83図）

調査区北部中央寄り、Y O - 104グリットで確認した。本遺構は特大環状配石張り出し部と重複し、本土坑が新しい。平面形は方形で、規模は長軸136cm、短軸135cmで深さは81cmを測る。長軸方向はN-60°Eである。底面はやや平坦で、壁は底面より外傾して立ち上がる。堆積土



第82図 穂穴住居跡出土遺物実測図

は5ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より刀子1点、土師器破片1点が出土した。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

第12号土坑（第83図）

調査区中央部、YO-102グリットで確認した。本遺構はピット165と重複し、本土坑が新しい。平面形は円形で、規模は長軸175cm、短軸169cmで深さは91cmを測る。底面は平坦で、壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より刀子1点、土師器破片1点が出土した。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

第17号土坑（第83図）

調査区中央部、YJ-99+102グリットで確認した。本遺構は第43号Tピットと重複し、本土坑が新しい。平面形は円形で、規模は長軸107cm、短軸105cmで深さは44cmを測る。底面は平坦で、壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より土師器破片1点が出土した。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

第18号土坑（第83図）

調査区中央部、YJ-99グリットで確認した。本遺構は第9号建物跡と重複し、本土坑が新しい。平面形は円形で、規模は長軸131cm、短軸120cmで深さは32cmを測る。底面は平坦で、壁は底面よりやや外傾しながら立ち上がる。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

第67号土坑（第83図）

調査区南部、YF-97グリットで確認した。

平面プランのみ確認し、推定される規模が長軸149cm、短軸145cmの円形のものと思われる。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

第68号土坑（第83図）

調査区南部、YF-97グリットで確認した。

平面プランのみ確認し、推定される規模が長軸112cm、短軸108cmの円形のものと思われる。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

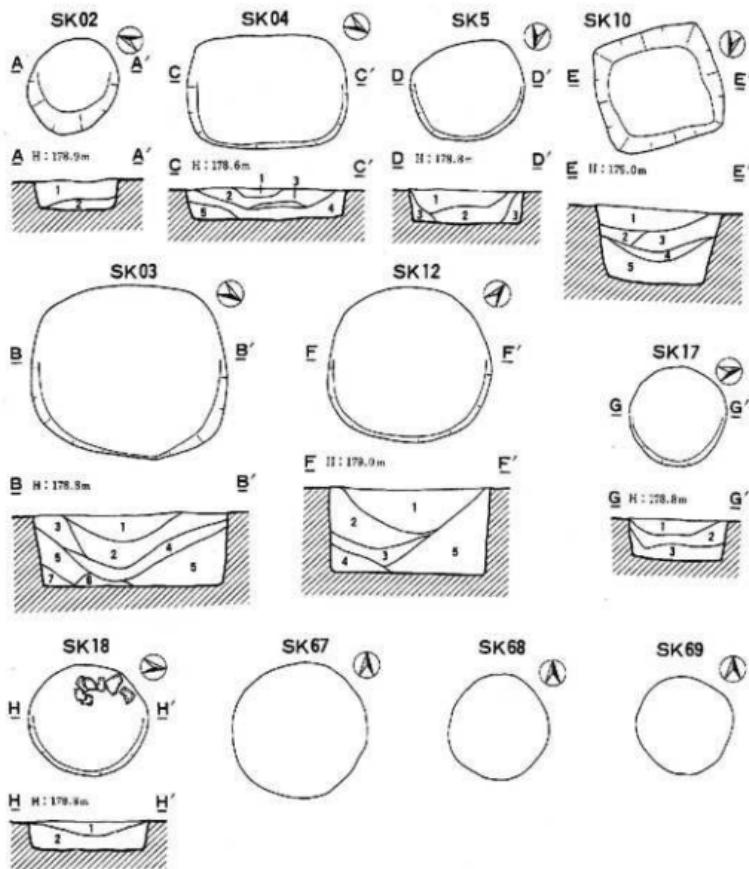
第69号土坑（第83図）

調査区南部、YF-97グリットで確認した。

平面プランのみ確認し、推定される規模が長軸133cm、短軸104cmの梢円形のものと思われる。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

（花海義人）



平安時代 土坑

1号土坑
1. 砂質粘土(10YR3/0)地面上多量流入。
2. 砂質粘土(10YR3/0)砂質多量流入。
3. 黄土(10YR2/2)砂質多量流入。
4. 黄土(10YR2/2)砂質多量流入。
5. 黄土(10YR2/2)砂質多量流入。
6. 黄土(10YR2/2)砂質多量流入。

2号土坑
1. 砂質粘土(10YR3/0)砂質多量流入。
2. 砂質粘土(10YR3/0)砂質多量流入。
3. 黄土(10YR2/2)砂質多量流入。
4. 黄土(10YR2/2)砂質多量流入。
5. 黄土(10YR2/2)砂質多量流入。

3号土坑
1. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
2. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
3. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
4. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
5. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。

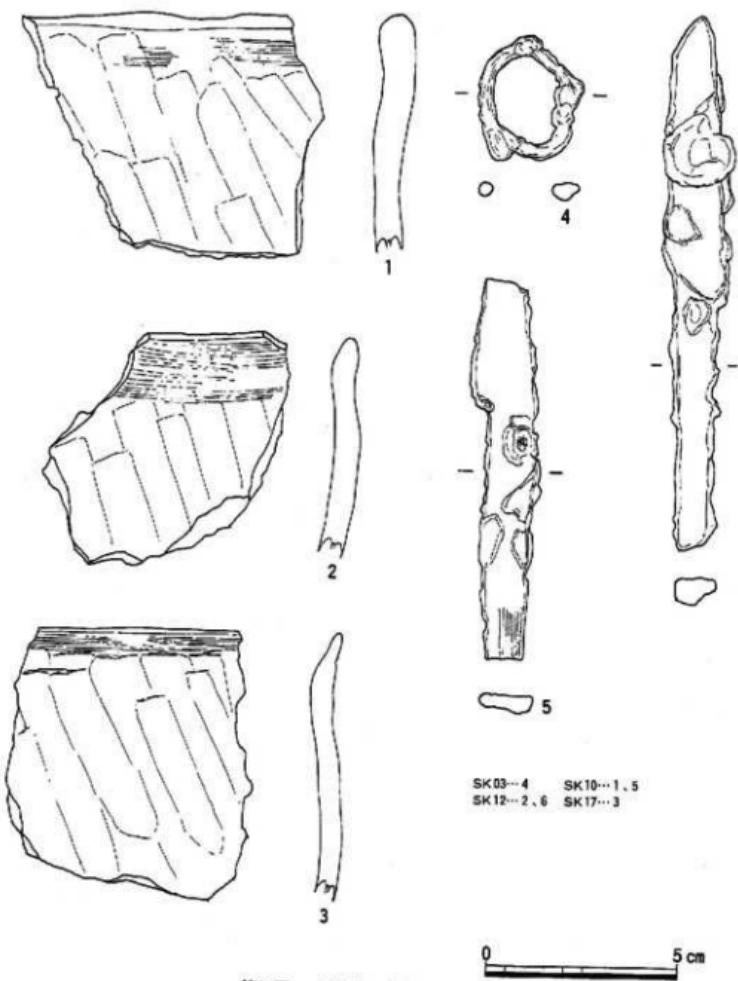
12号土坑
1. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
2. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
3. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
4. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。

4号土坑
1. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
2. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
3. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
4. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
5. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。

17号土坑
1. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。
2. 黄土(10YR2/0)砂質多量流入。

0 2m

第83図 土坑実測図



第84図 土坑出土遺物実測図

3. 焼土遺構

第01号焼土遺構（第85図）

調査区中央部、Y K - 105グリットで確認した。焼土は隅丸方形で、その規模は52cm×34cmを測る。

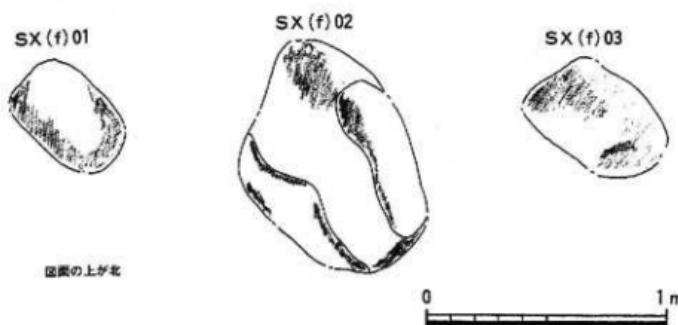
第02号焼土遺構（第85図）

調査区中央部、Y K - 105グリットで確認した。焼土は不定形で、その規模は100cm×74cmを測る。

第03号焼土遺構（第85図）

調査区南東部、Y F - 103グリットで確認した。焼土は不定形で、その規模は60cm×40cmを測る。

（花海義人）



第85図 焼土遺構実測図

4. 溝状遺構（第4図）

調査区北部中央寄り、Y P - 109グリットからY K - 105グリットにかけて確認された。

幅25cm、深さは30cm前後を測る。堆積土は黒褐色土中に大湯浮石粒が混入する1層で、人為堆積である。

構築時期は大湯浮石降下以前、平安時代以降と考えられる。

（花海義人）

第V章 自然科学的調査

鹿角郡小坂町立十和田小中学校 成田 典彦

1. 出土した植物遺体と炭化材について

51号ピットからは、直径1.71cm・短径1.32cmの楕円形の炭化している堅果類、19号ピットからは、イネ科の炭化した茎が出土した。堅果類はカシワで、植物遺体はススキと思われる。さらに、SK-34、SI-01、SI-05より、炭化材が出土している。ここでは、炭化材について詳しく述べることにする。

(1) 炭化材処理と樹種について

① 実体顕微鏡による木口面（横断面）の観察

針葉樹、広葉樹（環孔材、散孔材、放射孔材）の区別

② アルコール脱水

100%エチルアルコールに2時間浸す。その後風乾する。（十分乾いている場合は省略する）

③ パラフィン包埋

60°Cくらいで溶かしたパラフィンの中に30分浸す。

④ プレパラート作成

パラフィンの浸透した炭化材を冷却し、徒手によって切片を取りプレパラートにする。
切片崩壊防止のためキシレン等で脱パラフィンは行わず、そのまま観察し、写真撮影をする。静かに暖め、固定する。（木口面、柾目面）

⑤ プレパラートを観察し、樹種の解剖学的記載を行っている文献（島地・伊東1982、林1991）を参考にして同定を行う。

(2) 鑑定結果（PL）

① SK-34

環孔材で、年輪に沿って大きな道管が2、3列並び、そこから順次径を減じていき、夏材部では小道管が配列する。道管の穿孔は單一であることから、クリ材である。

② SI-01

垂直、水平の樹脂道がなく、分野壁孔はスギ型の特徴（柾目で見たとき、仮道管が放射柔細胞と交差してできる長方形の接触面に見られる壁孔の形が楕円形である）を表し、1分野に2個あることから、スギ材である。

③ SI-05

スギ材が多数出土。数は少ないが、広葉樹の炭化材も見られ、散孔材で道管が単独あるいは2、3個複合して年輪内に均一に分布し、柔細胞は多少波打ちながら網状組織を作りオニグルミ材の特徴を示している。

第VI章 分析と考察

この章では、土坑と建物跡、フラスコ状土坑、環状配石造構について考察する。

1. 土坑と建物跡

(1) 土坑について

F₁区において22基の土坑を確認した。土坑は、後述する建物跡が作り出す円環内に位置し、建物跡と有機的な結びつきを示している。これら土坑を第12次調査報告書（対象資料 190基）で行なった分析と照らし合わせて考察とする。なお、分析対象資料は、楕円形土坑に限った。

第86図⑥は、万座環状列石隣接部（D₁区～D₄区）に分布する土坑の長軸方向と、同列石中央より放射された求心線とのズレを図化したものである。部分的に集約する傾向を示すが顕著ではなく、言い換えれば八方へとそのズレは広がっている。同様に、第86図①、同②は、F₁区で確認された土坑を磁北と求心線からの各々の長軸方向のズレを図化したもので、いずれもズレは偏ることはない。第12次調査までの分析と考察のなかで、万座周辺の楕円形土坑の長軸方向は、同列石中央を意識した配置であるとしたが、この図から訂正しなければならない。

近年、栃木県寺野東遺跡、群馬県天神原遺跡、青森県小牧野遺跡を初めとして、太陽の運行に関連した遺跡の報告例が増加している。

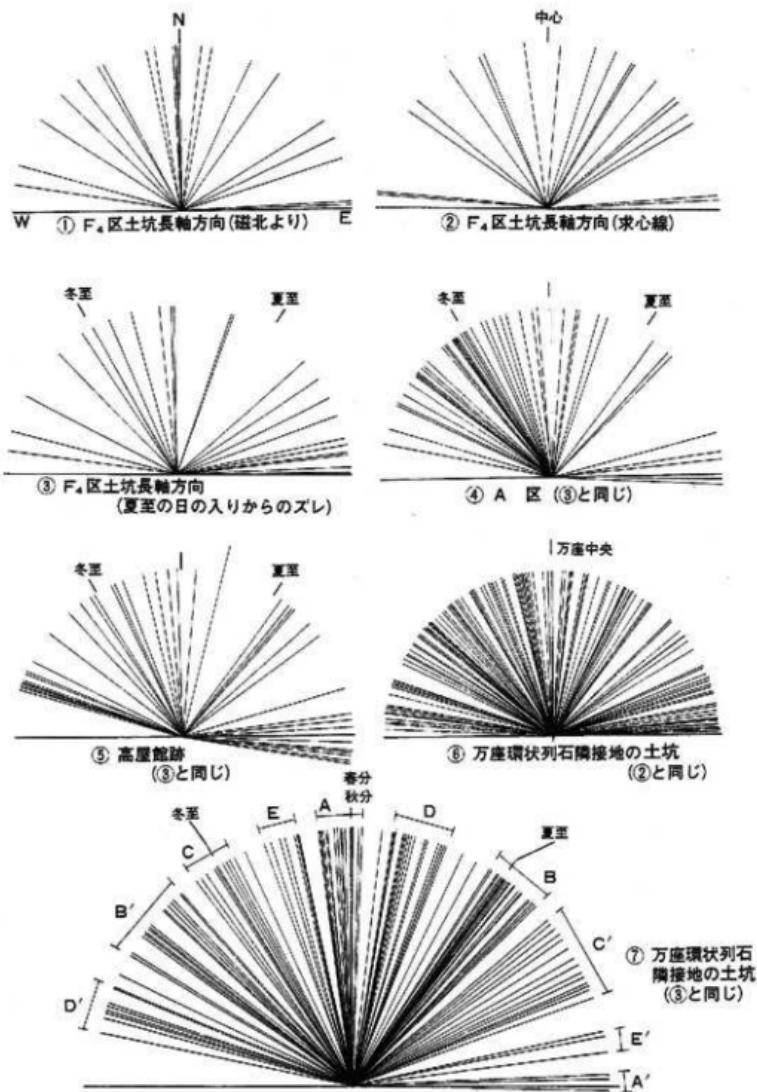
第86図⑦は、両環状列石・両日時計状組石を通る夏至の日の入りラインを軸として、万座環状列石隣接部（D区）に分布する土坑の長軸方向を図化したものである。この図から楕円形土坑の長軸は、春分・秋分の日の入りを挟んで夏至～冬至間に5グループ（A～E：74基）と、各々から90度振れた位置に5グループ（A'～E'：47基）が分布し、第86図①、②、③と比較すると、その長軸方向には集約性が認められる。

同様の方法で、第86図⑧：F₁区・F₂区の十坑、④：A区配石幕の下部土坑と土坑、⑤：高麗跡環状列石に伴う土坑の長軸方向を図化したもので、⑦と同様に集約性が認められた。

これは、土坑構築の際に、当日の日の入りを意識していたものと想定される。

土坑の性格については、これまで判断しかねていたが、いずれも(1)：埋葬可能な規模をもつこと。(2)：堆積土は人為に埋め戻されていること。(3)：副葬品と考えられる土製品、石製品、完形・復元土器が出土する例があること。(4)：第86図⑦から土坑構築の際は日の入りを意識していることから、万座環状列石周辺及びF₁区・F₂区で確認された楕円形土坑については、「土坑墓」と認定して良いと考えられる。円形土坑についても、墓域に分布し、(1)～(3)の条件を満たすものもあり、土坑墓として認定できるものと想定される。

土坑長軸方向は、極端な見方をすると（A～E）と（A'～E'）は、双方の関係にも見える。



第86図 楕円形土坑の長軸方向

各グループごとの土坑数		合計(1)+(2)	百分率
A 春分・秋分=17基	A' 春分・秋分= 4基	21基	17%
B 夏至 =22基	B' 夏至 =17基	39基	33%
C 冬至 =12基	C' 冬至 =14基	26基	21%
D 立夏・立秋=15基	D' 立夏・立秋= 9基	24基	20%
E 立春・立冬= 8基	E' 立春・立冬= 3基	11基	9%
小計 74基 61%	小計 47基 39%	121基	100%

※椭円形土坑で長軸方向が判明するもの

第6表 土坑の長輪分布

しかし、双分=男女の性差と見た場合、その比率は1:1に近い数字を示さなければならぬ。平成9年2月の鹿角市の男女の比率は0.9:1.0で、74:47(47:74)=1.57:1.0(1.0:1.57)では数値に開きがある。後述する大湯環状列石(2つの環状列石)を作り出す2つの系統に、夏至～冬至の間に納まるもの(A～E)、それに対し90度振れたもの(A'～E')が対応すると仮定できるとすれば、前者より妥当性を増すものと想定される。さらに、この図から土坑構築時期(季節)が推定できる。

(2) 建物跡について

第12次調査までに建物跡は、55棟が確認された。その内50棟については、万座環状列石を取り囲むように分布し、同列石外帯を構成する配石遺構の小塊と対応することが明らかとなつた一方、同列石を離れた地域(F区)にも、4棟の建物跡が存在することが平成元年の調査で明らかにされている。本調査区(F区)で、新たに10棟の跡物跡を確認した。ここでは、万座環状列石の建物跡配置を参考に、F・F区の14棟を主体に分析する。

確認された建物跡は、これまでのものと同一形態を示す4本柱・6本柱建物跡である。建物跡は、長軸方向を連ね円周54mの円環を作り出している。環内側に4本柱建物跡(3棟)、環外側に6本柱建物跡(9棟)が分布する。建物軸長は、環中央より放射された求心線に対し直行した配置を示しており、構築に際しては、万座環状列石隣接の建物跡と同様に、円環の中心を意識していたことが明らかとなった。

建物跡の規模(第87図)は、4本柱建物跡で長軸210cm～415cm、短軸220cm～315cm、6本柱建物跡は軸長440cm～500cm、短軸230cm～395cmを測る。この規模は、万座環状列石周辺で確認された中型(長軸4m前後)の建物跡の規模に近い。

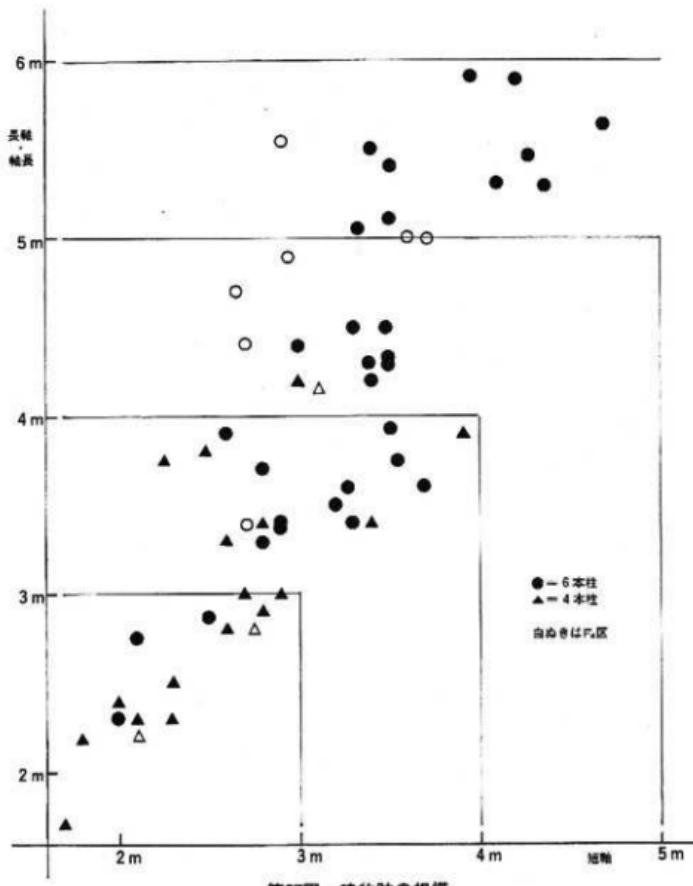
建物跡と重複する土坑が多く、その場合、建物跡が新しい。土坑と建物跡の位置を観察すると、建物跡の円環内及び周辺に分布する。本調査区の8号建物跡と26・33・71・73号土坑の位

置関係は、万座環状列石外帯の配石遺構群（小塊）と建物跡の配置に類似している。

性格については、近年、住居跡・倉庫ではないかという見解も出されている。しかし、F区にはほぼ同時期の住居跡が存在すること、土坑墓との強い関連性や第14図で図示した赤色顔料を塗布した特異な壺、線刻のある碗状石製品の出土から、「祭祀施設」と想定される。

建物の構造を考えていくと、

- ① 4本・6本の柱をもつ建物である。6本柱建物跡については、軸長方向に棟持ち柱を持



第87図 建物跡の規模

つ、切妻式のものと想定される。

② 柱穴によって囲まれた範囲は、踏み固められ、床面として使用された形跡が見当らず、

また、炉等の生活施設も無く、遺物の出土頻度も低いことから、高床式と考えられる。

③ 第4号建物跡ピット19出土の炭化植物から屋根又は壁があったものと想定される。

なお、F₁区・F₂区の建物跡は、万座環状列石と密接に結びつく竪穴住居跡によって切られている。新旧関係はF₁区・F₂区建物跡+土坑→F₃区竪穴住居群（万座環状列石）という遺構の流れ（第88図）を確認できる。

（3）土坑と建物跡について

F₃区建物跡（F₁区を含む）とこれに伴う土坑の構築時期は、遺構内出土遺物・構築面から後期前葉である。上記の分析から、土坑については「土坑墓」と、建物跡は土坑墓との有機的な関係等から「祭祀施設」と判断された。2つの遺構から構成された、しかも両環状列石・A区配石遺構群とは若干の趣を異にした「墓域」が存在していたことが明らかとなった。

この3つの相違点を観察すると、第7表のとおりである。

本調査区の遺構配置は、万座環状列石の円環構造に類似しているが、異質な点として土坑上部に墓標的な意味合いを持った配石がないことが指摘される。

一方、A区の配石遺構群は、建物跡を有しないという点を除くと、配石形態やその配置からこれもまた同列石の円環構造に類似している。構築時期は、出土遺物や配石形態等から、同列

万座 ・ 野 中 堂 環 状 列 席 の 特 徴	①配石墓の集合体で環状を意識する。 ②外帶配石は小塊を構成し、建物跡群と対応する。 ③建物跡は万座環状列石を取り囲む。 ④両環状列石の構築に夏至の日の入りが関連する。 ⑤列石周辺の土坑の長軸方向は日の入りを意識する。	A 区 の 特 徴	☆配石墓の集合体である。 ☆配石墓は小塊を作り、環状配置となる。 ☆配石形態が類似する。 ☆配石下土坑・土坑の長軸は日の入りを意識。 ★建物跡は確認できなかった。 ★時期的に古い。（F4区と同時期か）
		F 区 の 特 徴	☆遺構の配置が環状となる。 ☆建物跡と土坑が対応関係を示す所がある。 ☆建物跡の形態が同一である。 ☆土坑の長軸は日の入りを意識。 ★土坑上に墓標的な配石が伴わない。 ★時期的に古い。（A区と同時期か）

☆=環状列石との類似点

★=環状列石との相違点

第7表 環状列石との類似性

石より若干古く、F区遺構群とほぼ同時期と想定される。ということは、大湯環状列石が作られる以前に、同じ台地上約400mを隔て、列石の要素を兼ね備えた2つの墓域（A区・F区）が存在していたことになる。

富権泰時氏は、秋田県能代市杉沢台遺跡の住居跡の配置を例に上げ、「高い所を中心にして東西線には住居跡やその他の遺構はほとんどありません。このラインを境にして杉沢台の縄文ムラは南北二群にわかれ、この二群で一つのムラを形成していた」と考え、「大湯の環状列石に同時に二つの環状列石があるということは、そういう集落の二つの系統が、ここにお墓として典型的に表したものではないだろうか」としている。

富権氏の説を借りると、A区配石遺構群とF区・G区・H区遺構群は、若干の相違点を有した系統から発生した墓域であった可能性が高い。列石の原型とも言えるA区配石遺構群・F区の墓域が融合し、環状列石を作り出し、系統の違いが2つの環状列石に反映されたものと想定される。

2. フラスコ状土坑

フラスコ状土坑は、これまでの調査で164基、本調査で新たに20基を確認した。性格については、岩手県二戸市上里遺跡の人骨の出土、青森県青森市小牧野環状列石のフラスコ状土坑の脂肪酸分析の事例から、土坑墓への転用ということを考慮しながらも、これまで「貯蔵穴」と捉えてきた。F区やG区のように、同一遺構が微高地に群を成している地域については、これまでと同様「貯蔵穴」と捉えて良いであろう。しかし、D区のフラスコ状土坑は、万座環状列石を中心として形成された墓域・祭祀域内に分布し、形態的に貯蔵穴と判断しがたい歪な形態のものが存在する事から、性格については不安を感じていた。

○ フラスコ状土坑の形態

1類：科学的実験で使用する、一般的な「三角フラスコ」を呈するもの（161/184=87%）

2類：「長靴」のような、歪な形態を呈するもの（23/184=13%）

2類を観察すると、他遺跡と比較してもその割合が高い。構築状態をみると、途中で中止した状況ではない。仮に、1類のフラスコ状土坑を実際に構築しようとすれば、末広がりに掘り下げていくことによって、土坑内での行動範囲が広くなっていく。それに対し、2類のものは精査時に感じるよう、埋土の排土に苦慮することが多い。フラスコ状土坑は、口縁部を狭くし、外気を遮断し、坑内の温度・湿度を一定に保ち、長期的な貯蔵を目的としたものであって2類のものはその条件を満たしているとは思えない。

○ 出土遺物からの観察

①：土製品・石製品が出土するもの。 (28/184=15%)

②：完形・復元土器が出土するもの。赤色顔料塗布の土器2例 (35/184=19%)

(③) 炭化堅実類が出上するもの。 (4 / 184 = 2 %)
食料が消費されず残されたとしても、酸性土壤という条件から、腐敗し痕跡は残らないとい
うマイナスの要因があるが、「ハレ」の道具である土製品・石製品の出土率は高いものと考え
られる。②については、堆土とともに遺物も一緒に廃棄されたという見解も成立するが、遺物
廃棄域の存在を考慮しなければならない。

埋土の状況を見ると、万座周辺と F₁ 区では違いが見られる。F₁ 区のものは、地山ブロック
が多量に入り込み、人為的に投げ込まれてものが多い。これに対し、万座周辺のものは、地山
粒を少量に含んだ黒色土や黒褐色土が投げ込まれているものがほとんどである。この違いは何
らかの意味合いを持っていたものと考えられる。

このような観点から、大湯環状列石で確認されたラスコ状土坑の一部には、類例は少ない
にせよ、土坑墓への転用や当初より墓穴として構築されたものが存在していたものと考えられ
る。

3. 環状配石遺構

これまでの調査で環状配石遺構を 9 基、本調査で新たに 4 基を確認し、合計 13 基となった。
構築時期は、遺構の重複・構築面から繩文後期中葉である。構築時期を異にするが、類似する
事例として、岩手県松尾村釜石環状列石や同宮古市近内中村遺跡がある。

環状配石遺構については、環帶部と張り出し部から構成された特異な形態の配石遺構で、遺
構中央に堆土遺構を持った「平面的な施設」と考えてきた。本調査の 1 号・2 号環状配石遺構
や追調査を実施した D₁ 区・407 号環状配石遺構によって、柱穴状ビットが伴うことが明らかと
なり「立体的な施設」であることが判明した。

のことから、前年度までに確認された 8 基（407 号環状配石を除く）を再度観察すると、
D₁ 区・第 220 号環状配石遺構と第 211 号建物跡の柱配置、D₁ 区・602 号環状配石遺構と 615 号建
物跡の柱配置（ただしビット 983・D を除くが伴う）、D₁ 区・3 号環状配石遺構と 3 号建物跡
という、環状配石と建物跡の組合せが出来た。

規模は、特大（径 28m・1 基）・大型（14m・1 基）・中型（6.6m～8.8m・9 基）・小型
(4.6m～5.4m・2 基) に分ける。調査が遺構内外に及んでいるものは、半数程であるが、
それらの小～中型（前述）のものには、柱穴状ビットが伴っている。特大とした F₁ 区・4 号
環状配石遺構については追調査を必要とするが、現時点で、遺構軸線上に石圓炉が位置するこ
と、同規模の柱穴状ビットが遺構西側に 2 列・当間隔に確認されていることから、本遺構には、
石圓炉と柱穴状ビットが伴うものではないだろうかと考えている。

本調査によって、環状配石遺構においても特大（4 号環状配石）から小～中型（1 号環状配

石)へという新旧関係があることが判明した。

この造構の性格については、関東地方で確認されている數石住居跡との類似性から住居跡ではないかという意見も聞かれる。しかし、当該時期の竪穴住居跡は、鹿角市赤坂A遺跡や小坂町中小板遺跡で確認されており、2つの住居形態の同時存在は考えにくい。また3号環状配石造構に伴った石囲炉の形態は、これまでに確認されたものと趣を異にしており、性格についてはこれまでどおり「祭祀施設」と考えている。
(藤井安正・花海義人)

第VII章 調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市の北東部、大湯川と豊真木沢川によって形成された標高180m程の舌状台地、通称「風張台地」のほぼ中央に位置する。

第13次発掘調査で確認された縄文時代の遺構は、建物跡10棟、柱穴状ピット155個、環状配石遺構4基、配石遺構8基、石圓炉12基、焼土遺構20基、T-ピット12基、フラスコ状土坑20基土坑22基である。これらの遺構と共に縄文土器（完形土器・復元土器54点、土器破片89箱）、石器（石礫他12種：2,081点）、土製品（土偶他8種：326点）、石製品（石刀他6種：50点）、剥片（コンテナ3箱）、自然遺物として天然アスファルト、炭化堅果類、炭化植物が出土している。

上記の他に、平安時代の住居跡13棟、土坑11基、焼土遺構3基、溝状遺構1条を確認した。

縄文時代の遺構は、出土遺物や重複関係から、T-ピット→建物跡・土坑→（万座環状列石と関連の強い竪穴住居跡）→特大の4分環状配石遺構→小～中型環状配石遺構という遺構の流れを確認できた（第88図）。

建物跡は、4本柱・6本柱の建物で、万座環状列石隣接地から確認された建物跡と形態を同じくする。建物跡は、軸長方向を連結させるように連なり、F₁区南西端の2棟の6本柱建物跡へと続き、径54mの円環を作り出している。

建物跡と同時期の土坑（後述）は、建物跡によって作られた円環内やその周辺に分布（一部小塊を作るものもある。）し、建物跡と有機的な繋がりを持っている。分析の結果、建物跡は「祭祀施設」と、土坑は「土坑墓」と認定され、2つの遺構で墓域を構成している。

万座環状列石とF₁区遺構群・A区配石遺構群を比較したところ、F₁区は、土坑上に墓標的な意味を持った配石遺構が構築されないこと。A区配石遺構群は、建物跡を持たないこと。という点で万座環状列石と相異するが、3者間の類似点（第7表）は非常に多い。

F₁区・A区遺構群（墓域）は、ほぼ同一時期と考えられる。これは、多くの類似点を持つた2つの葬制（墓域）が、同時期、同じ台地上にあったことを示している。富樫氏の提言している「2つの系統」の存在を示すものと想定される。この2つの系統を「大湯環状列石の原型」と考え、系統の融合によって環状列石が構築され、2つの系統の表れとして両環状列石が作られたものと想定したい。

石圓炉は、径1m余りを測る大型のものが存在する。3号環状配石遺構に付設された石圓炉は、四方に三角形状の張り出し部を持ち、これまでのものと趣を異にしている。環状配石遺構が祭祀施設であることを、強く示唆している。

T-ピットは、確認された遺構の中で、構築時期が最も古い。位置関係から2基または数基

で塊を構成している。当時の狩獵形態を考える上で貴重な資料である。

フ拉斯コ状土坑は、出土遺物から後期前葉と前葉～中葉の2つの時期に分けられる。後者は4号環状配石造構の外側隣接部に分布しており、同造構との関連性が想定される。前者は、万座環状列石から北西方向に延びた造構群に隣接し、同列石との関連が強い。造構内より石・土製品や赤色顔料を塗布した土器が出土するものや、「長靴状」の歪な形態を呈するものがあり、「貯蔵施設」のほかに、墓穴への転用や当初より墓穴として作られた例が含まれているものと想定される。

土坑は、建物跡と強い関連性を持っている。8号建物跡とその南側に分布する土坑群の配置は、万座環状列石外帶配石と建物跡の配置に類似している。椭円形土坑については、土坑墓として認定されたほか、円形土坑についても、その可能性が強いものと判断された。再度分析した各区の椭円形土坑の長軸方向の決定は、土坑構築時の日の入りを意識したものであった。その向きは、2つの環状列石をつくりだした各々の葬儀の流れをくんだ系統に由来し、その向きから埋葬時期を想定できるものであった。

環状配石造構は、特大～小型の4分類することができた。前調査までは「平面的な造構」と捉えてきたが、本調査により、規模が小～中型のものには、柱穴状ピットが伴い「立体的な施設」であることが判明した。一方、特大とした4号環状配石造構については、追調査を必要とするが、現時点では、当間隔・弧状に配置された柱穴状ピットが確認されおり、本造構に伴うものと考えている。

造構と共に出土した土器・石器・土製品・石製品の量は非常に多い。

土器は、縄文時代後期前葉～中葉のもので、後期前葉のものが主体を占める。出土地点をみると造構密集地域からの出土は少なく、調査区東側、同北東側に集中し、東側のものはD区の遺物廃棄域へと繋がっている。19号柱穴状ピットから出土した赤色顔料の塗布された壺は、口縁部が削った位置に作り出され、異質な感じを受ける。また、YK-104グリッドから中葉の土器4点が出土しており4号環状配石に伴うものと考えられる。

石器は、剥片石器・礫石器とも多種多様である。出土地点を観察すると、建物跡が分布する地域と、調査区東側、同北東側の遺物廃棄域からの出土が多い。三脚石器の出土は、鹿角地方での類例が少ないが、その分布が米代川上流域まで広がっていることを意味するものである。しかし、米代川本流域の大館市塚の下遺跡、鷹巣町伊勢堂岱遺跡とは比べようもない程に少量であり、この違いは地域差や遺跡の性格によるものだろうか。

土製品・石製品も多種多様で、遺物廃棄域からの出土が多い。土壙3点は、遺物廃棄域・YD-102グリッドからまとまって出土し、廃棄にあたっても何らかの意識を持っていたようである。また、ヒスイを材料とした石製品の出土は初例である。

時代	区分	野中堂環状列石とB区	万座環状列石とD区	F区	A区	G区
縄文時代後期前葉(縄文時代後期中期)	I期	上坑・フ拉斯コ	Tピット 土坑・フ拉斯コ	F4建物跡 土坑	F2ピット	配石 遺構群
	II期	環状列石	環状列石 建物跡	F1 住居跡	F2 フ拉斯コ	
	III期			F4環状 列石遺構 (特大)		
	IV期		D1-7 環状列石 (小・中型)	F4環状 列石 (小・中型)		

注1:D区・F区の遺構重複を参考にI~IV期に便宜的に区分した。

二重線: 確実なもの
実線: 想定されるもの

第88図 遺構の移り変り

石器・石製品の材料としてヒスイ・黒曜石・蛇紋岩、自然遺物としてアスファルトが出土している。いずれも鹿角地方では産出しないもので、当時の交易の広さを物語るものである。

炭化堅果類・植物の山土は、当時の食性や建物跡等の構築材を知る上で、貴重な資料である。平安時代の遺構は、本調査によって台地の縁辺部から差程広がらないことが判明した。構築時期は、出土遺物や遺構堆積土への大湯浮石の混入状況から10世紀前半と考えられる。遺構の配置を見ると、住居跡は、溝状遺構によって区画され、住居跡1棟に対し土坑1基が伴うようである。この組合せは、同時期の鹿角市下乳牛遺跡でも確認され、当該時期の一般的な形態であったと想定される。7号住居跡内の小土坑より、土師器壺が多量に出土している。器形・法量ともほぼ均一で、ヘラナデにより形成されている。鹿角地方の当該時期の土師器壺は、ロクロ使用のものが一般的であり、地域独自なものなのだろうか。

(藤井安正)

参考文献

- 文化財保護委員会 『大湯町環状列石』 1953年
- 青森市教育委員会 『小牧野遺跡発掘調査報告書』 1996年
- 岩手県教育委員会 『西田遺跡』 1980年
- 岩手県埋蔵文化財センター 『岩手の遺跡』 1985年
- 岩手県博物館 『岩手県の土器 県内出土資料の集成』 1982年
- 大槌町教育委員会 『崎山弁天遺跡発掘調査報告書』 1974年
- 大追町教育委員会 『立石遺跡発掘調査報告書』 1979年
- 秋田県教育委員会 『中小坂遺跡発掘調査報告書』 1988年
『高屋館跡発掘調査報告書』 1988年
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書1～6』 1985～1990年
『大湯環状列石発掘調査報告書7～12』 1991～1996年
『赤坂A遺跡発掘調査報告書』 1994年
- 阿部義平 『日時計の考察—大湯環状列石の配石類型の意味』
『よねしろ考古 第2号』よねしろ考古学研究会 1986年
- 小林達雄 『縄文人の世界』 朝日選書557 朝日新聞社 1996年
『縄文時代の自然の社会化』『季刊考古学・別冊6』 雄山閣 1995年
- 富樫泰時 『秋田県大湯遺跡』『季刊考古学・別冊6』 雄山閣 1995年
『日本の古代遺跡 24 秋田県』 保育社 1985年
- 林謙作 『II 縄文時代 3 マツリと記念物』
『発掘が語る日本史1 北海道・東北編』 新人物往来社 1986年
『縄文期の村落をどうとらえるか』『考古学研究第26巻3号』 1976年
『縄文期の葬制—第II部・遺体の配列、とくに頭位方向』
『考古学雑誌第63巻3号』 1977年
- 戸沢充則 『縄文時代研究事典』 東京堂出版 1994年
- 成田滋彦 『青森県の土器』『縄文文化の研究 4』 雄山閣 1984年
- 小畠 岩 『高屋館跡の環状列石』
『よねしろ考古 第2号』よねしろ考古学研究会 1986年

上記の他に、多くの研究論文・報告書、調査説明会資料を活用させていただいた。

報告書抄録

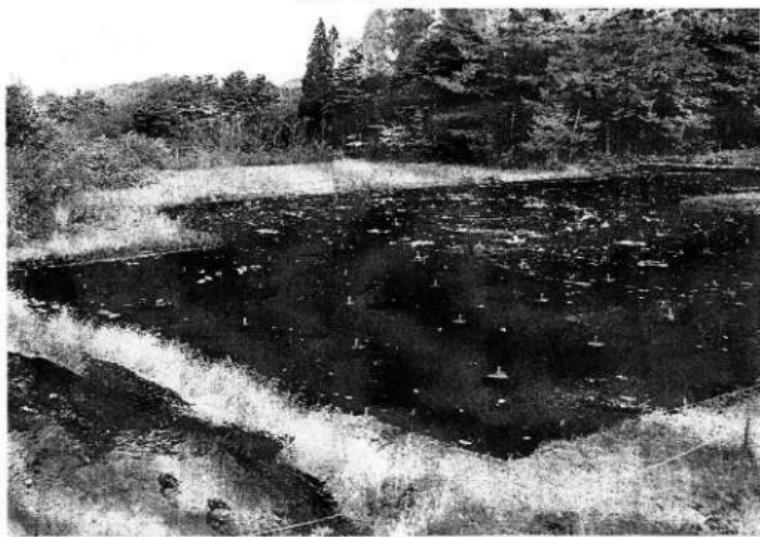
ふりがな	とくべつしじせき
書名	特別史跡 大湯環状列石第13次発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料
シリーズ番号	58
編著者名	鹿角市教育委員会 生涯学習課（藤井安正・花海義人）
編集機関	鹿角市教育委員会
所在地	〒018-52 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1 ☎0186-30-1111
発行年月日	西暦 1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市 十和田大湯 字万座 字野中堂 字一本木 後口	05209	123	40度 16分 21秒	140度 48分 47秒	1997.06.03 ～ 1997.11.26	3,878m ²	史跡整備 に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特別事項
特別史跡 大湯環状列石	集落跡	縄文時代 後期	※縄文時代 掘立柱建物跡 土坑 Tピット フラスコ状土坑 埋設土器遺構 石圓炉 環状列石遺構 配石遺構 焼土遺構 平安時代 堅穴住居跡 土坑 焼土遺構 溝状遺構	織文土器 (後期) 石器 土製品(土偶ほか) 石製品(石刀ほか) 自然遺物 土器 須恵器	大湯環状列石を中心広がる集落跡である。 本調査で、列石の原型とも言える遺構の配置を確認した。また、環状配石遺構は立体的な施設であることが判明した。



調査区全景 (E ▶ W)



調査区全景 (S ▶ N)

P L 1 調査区全景



SB01



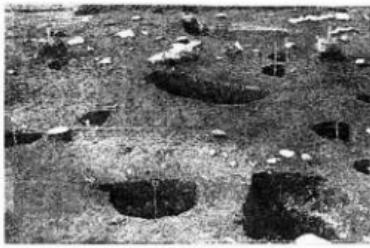
SB02



SB03



SB04



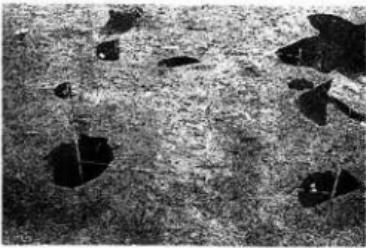
SB05



SB06



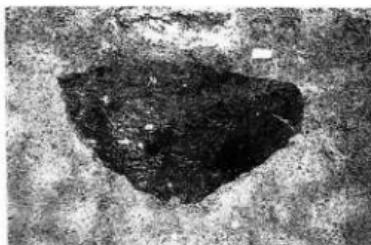
SB07



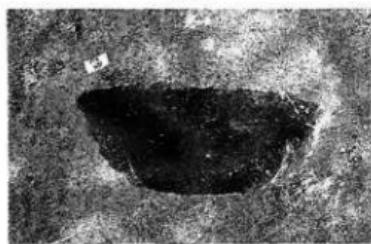
SB08



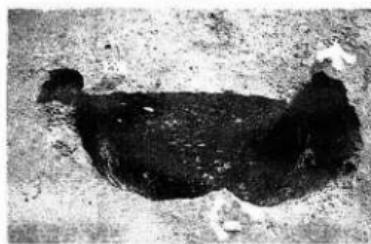
Pit3



Pit30



Pit38



Pit41



Pit42



Pit155

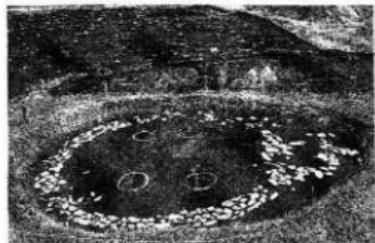


SX(S)01



SX(S)02

PL 3 柱穴状ピット、環状配石造構(1)



SX(S) 401



SX(S) 04の一部



SX(S) 04の一部



SX(S) 04の一部



SX(S) 04張出部



SX(S) 03張出部

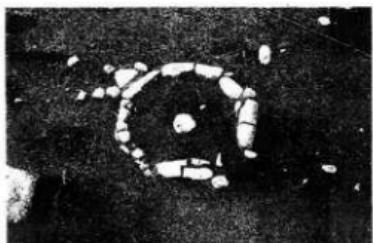


SX(S) 04 炉



SX(S) 04 炉

P L 4 環状配石造構(2)



SX(S)03 炉



SX(S)05



SX(S)6



SX(S)10



SX(S)12



SX(O)2



SX(O)3



SX(O)6

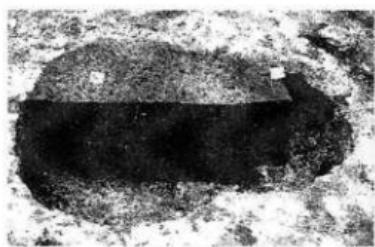
P L 5 環状配石造構、配石造構、石囲炉



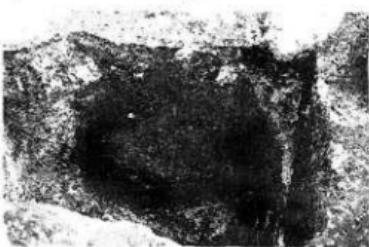
SK(T)19



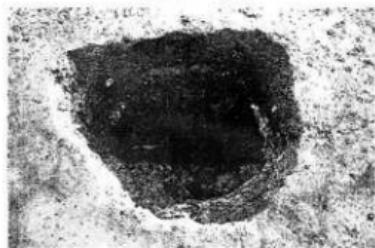
SK(T)29



SK6, SK(F)7



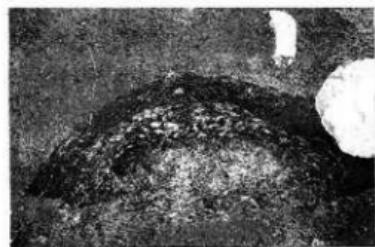
SK(F)9



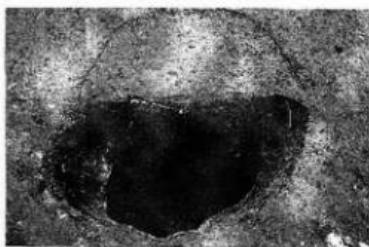
SK(F)11



SK(F)22



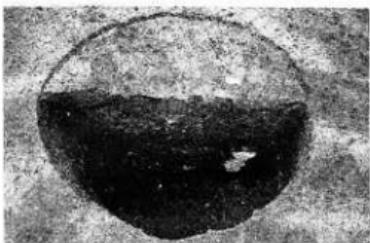
SK(F)28



SK(F)34



SK(F) 52



SK(F) 55



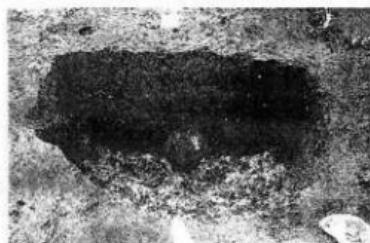
SK16



SK20



SK21



SK24



SK26



SK42



SX(U)01



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



SI 01 (N▶S)



SI 01 カマド



SI 03 (E▶W)

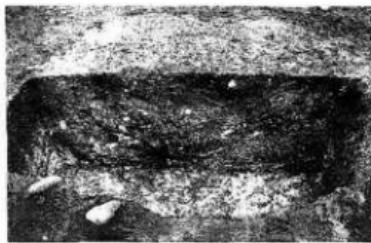


SI 04 (N▶S)

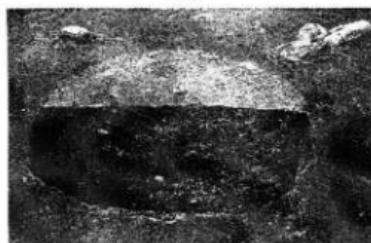
PL 8 埋設土器、竪穴住居跡



SK02



SK03



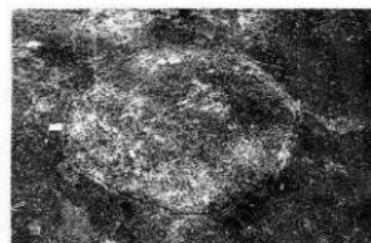
SK12



SK17



SK18



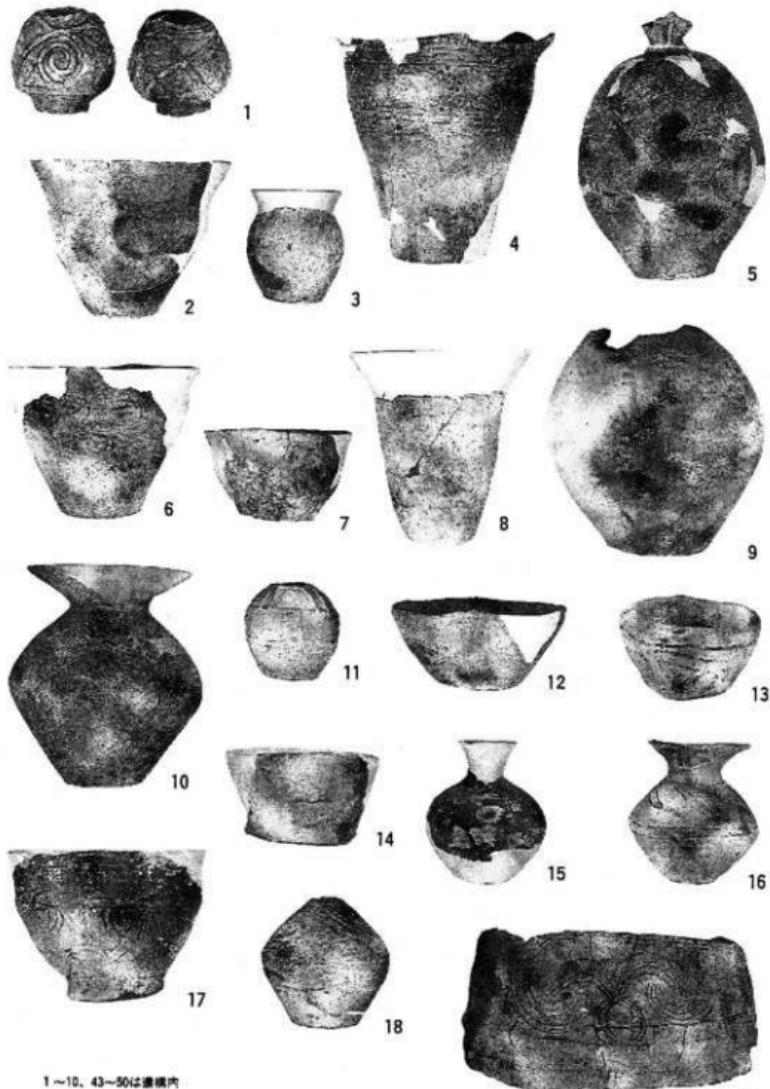
SK17 確認状況



SK67 確認状況



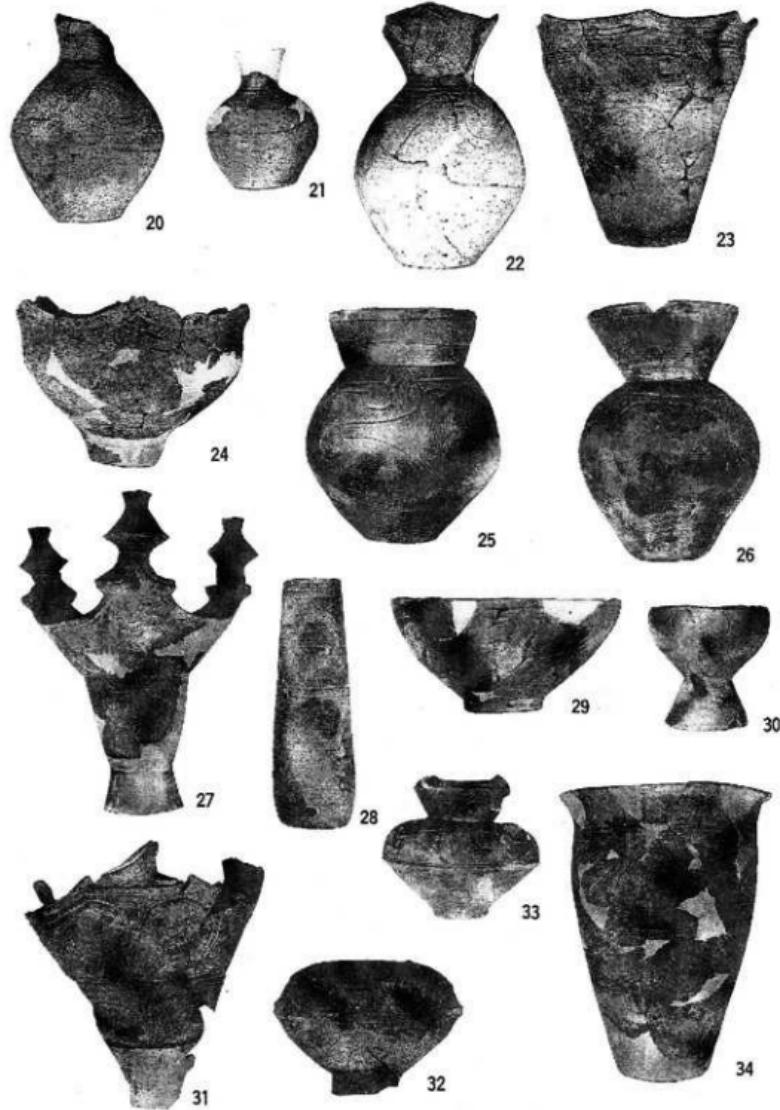
SK68・69 確認状況



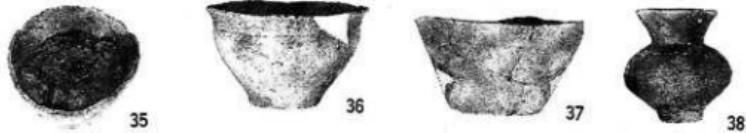
1～10、43～50は塗模内

19

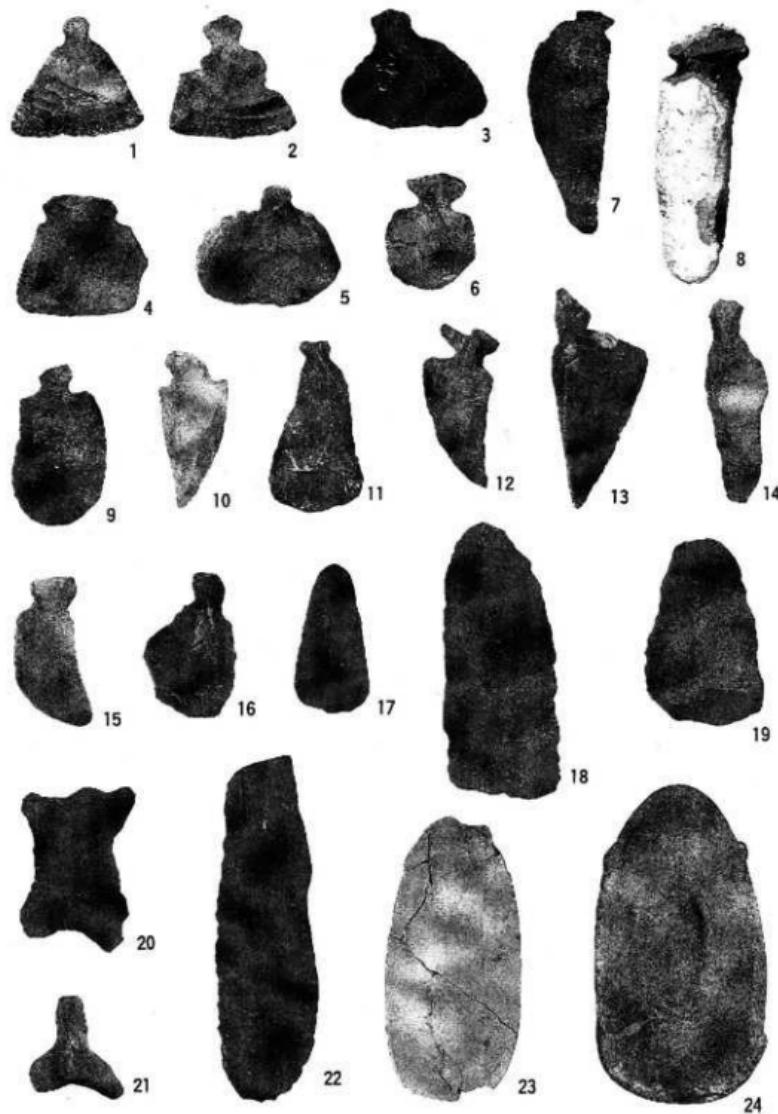
PL 10 出土土器(1)



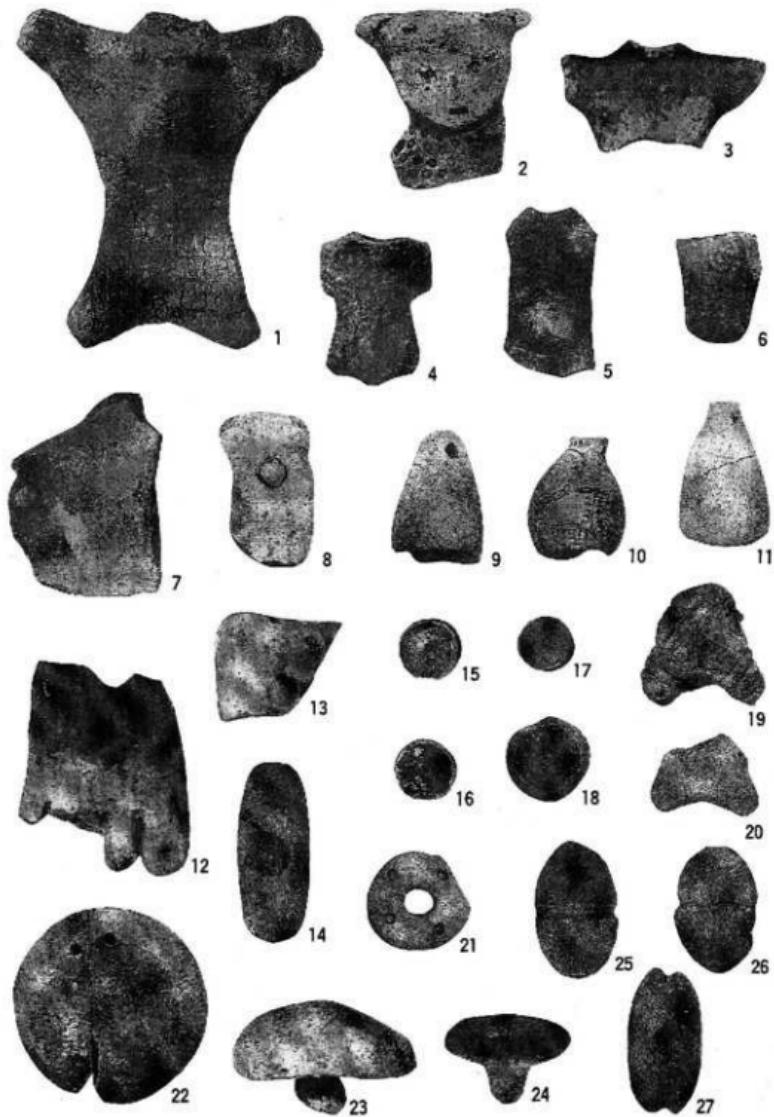
P L 11 出土土器(2)



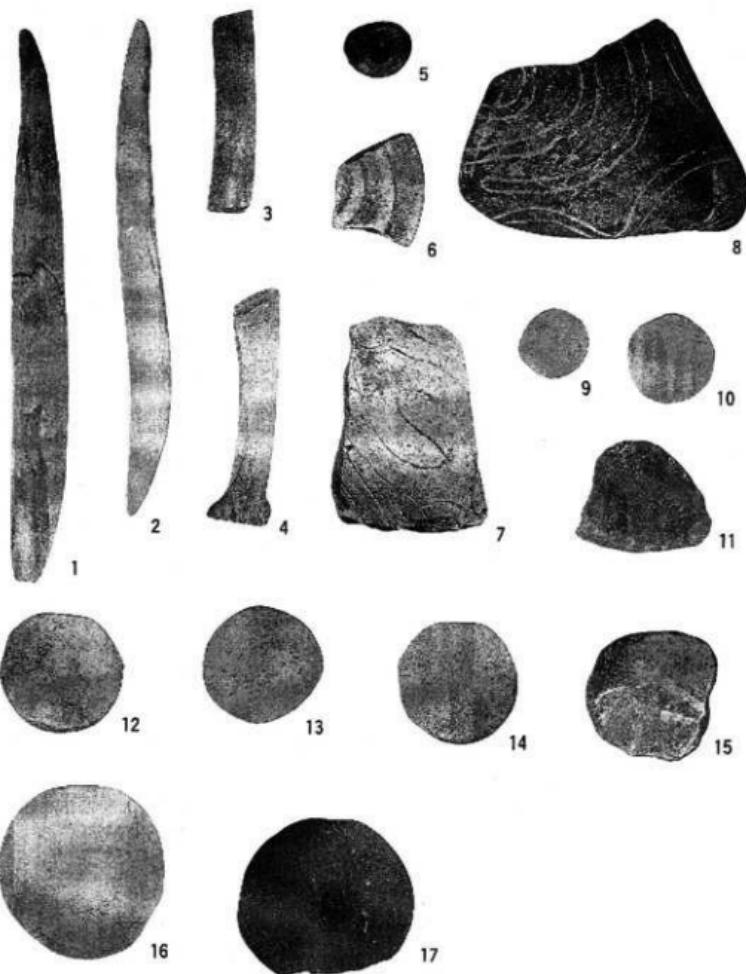
PL 12 出土土器(3)・出土石器(1)



P L 13 出土石器(2)



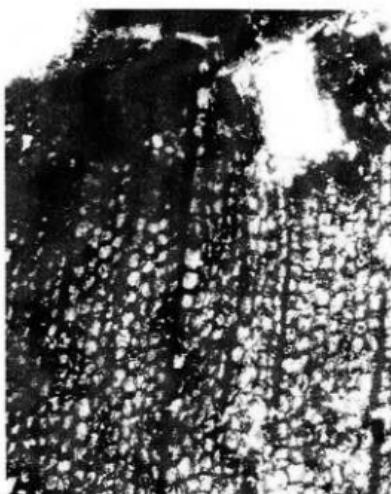
P L 14 出土土製品



PL 15 出土石製品



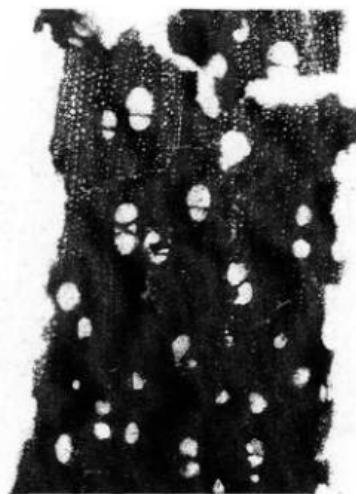
SK (F) 34出土炭化材(クリ)



SI 01出土炭化材(スギ)



SI 05出土炭化材(スギ)



SI 05出土炭化材(オニグルミ)

鹿角市文化財調査資料58

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(13)

発行年月日 平成9年3月31日

発 行 者 鹿角市教育委員会

番号 018-52

秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1

電話 0186-30-1111

印 刷 所 (有) 大館孔版社

番号 017

秋田県大館市谷地町後60
